

古事記物語

鈴木三重吉



目次

女神めがみの死し

天あめの岩屋いわや

八俣やまたの大蛇おろち

むかでの室むろ、へびの室むろ

きじのお使いつか

笠沙かささのお宮

満潮みちしおの玉、干潮ひしおの玉

八咫鳥やたがらす

赤い盾たて、黒い盾たて

おしの皇子おうじ

白い鳥

朝鮮征伐 ちようせんせいばつ

赤い玉

宇治の渡し うじわた

難波のお宮 なにわ

大鈴小鈴 おおすずこすず

しかの群、ししの群 むれ

とんぼのお歌

うし飼、うま飼 かい

女神^{めがみ}の死^し

一

世界ができたそもそものはじめ。まず天と地とができあがりますと、それといつしよにわれわれ日本人のいちばんご先祖の、^{あめのみなかぬしのかみ}天御中主神とおっしゃる神さまが、天の上の^{たかまのはら}高天原というところへお生まれになりました。そのつぎには^{たかみむすびのかみ}高皇産靈神、^{かみむすびのかみ}神産靈神のお二方^{ふたかた}がお生まれになりました。

そのときには、天も地もまだしつかり^{かた}固まりきらないで、両方とも、ただ油を^う浮かしたように、とろとろになって、くらげの

ように、ふわりふわりと浮かんでおりました。その中へ、ちようどあしの芽がはえ出るように、二人の神さまがお生まれになりました。

それからまたお二人、そのつぎには男神女神とお二人ずつ、

八人の神さまが、つぎつぎにお生まれになつた後に、伊弉諾神いざなぎのかみと伊弉冉神いざなみのかみとおっしゃる男神女神がお生まれになりました。

あめのみなかぬしのかみ天御中主神はこのお二方の神さまをお召しになつて、

「あの、ふわふわしている地を固めて、日本の国を作りあげよ」とおっしゃつて、りっぱな矛をほこ一ふりお授けになりました。

それでお二人は、さつそく、天の浮橋あめうきはしという、雲の中に浮か

んでいる橋の上へお出ましになつて、いただいた矛でもつて、下のところとしているところをかきまわして、さつとお引きあげになりますと、その矛の刃先はさきについた潮水しおみずが、ぽたぽたと下

へおちて、それが固かたまつて一つの小さな島になりました。

お二人はその島へおりていらしつて、そこへ御殿ごてんをたててお住まいになりました。そして、まずいちばんさきに淡路島あわじしまをおこしらえになり、それから伊予いよ、讃岐さぬき、阿波あわ、土佐とさとつづいた四国の島と、そのつぎには隠岐おきの島、それから、そのじぶん筑紫つくしといった今の九州と、壱岐いき、対島つしま、佐渡さどの三つの島をお作りになりました。そして、いちばんしまいに、とかげの形をした、いちばん大きな本州をおこしらえになつて、それに大日本豊秋津島おおやまととよあきつしまというお名まえをおつけになりました。

これで、淡路の島からかぞえて、すっかりで八つの島ができました。ですからいちばんはじめには、日本のことを、大八島国おおやしまぐにと呼びよ、またの名を豊葦原水穗国とよあしはらのみずほのくにとも称となえていました。

こうして、いよいよ国ができあがつたので、お二人は、こんど

はおおぜいの神さまをお生みになりました。それといつしよに、
 風の神や、海の神や、山の神や、野の神、川の神、火の神をもお
 生みになりました。ところがおいたわしいことには、伊弉冉神^{いざなみのかみ}
 は、そのおしまいの火の神をお生みになるときに、おからだに
 おやけどをなすつて、そのためにとうとうおかくれになりました
 た。

伊弉冉神^{いざなみのかみ}は、

「ああ、わが妻の神よ、あの一人の子ゆえに、大事なおまえを
 なくするとは」とおつしやつて、それはそれはいそうお嘆き^{なげ}
 になりました。そして、お涙^{なみだ}のうちに、やつと、女神のおなき
 がらを、出雲^{いずも}の国と伯耆^{ほうぎ}の国とのさかいにある比婆^{ひば}の山にお葬^{ほうむ}
 りになりました。

女神は、そこから、黄泉^{よみ}の国という、死んだ人の行くまつく

らな国へたつておしまいになりました。

伊弉諾神は、いざなぎのかみそのあとで、さつそくとつか十拳の劍つるぎという長い劍を

引きぬいて、女神の災わざわいのもとになった火の神を、一うちきに斬り殺してしまいになりました。

しかし、神のおくやしみは、そんなことではお癒いえになるはずありませんでした。神は、どうかしてもう一度、女神に会いたくおぼしめして、とうとうそのあとを追つて、まっくらな黄泉よみの国までお出かけになりました。

二

女神めがみはむろん、もうとつくに、黄泉よみの神の御殿ごてんに着いていらつしやいました。

すると、そこへ、夫の神が、はるばるたずねておいでになったので、女神は急いで戸口へお出迎えになりました。

伊弉諾神は、まつくらな中から、女神をお呼びかけになつて、「いとしきわが妻の女神よ。おまえといつしよに作る国が、まだできあがらないでいる。どうぞもう一度帰ってくれ」とおつしやいました。すると女神は、残念そうに、

「それならば、もつと早く迎えにいらしつてくださいますればよいものを。私はもはや、この国のけがれた火で炊いたものを食べましたから、もう二度とあちらへ帰ることはできませんまい。

しかし、せつかくおいでくださいましたのですから、ともかくいちおう黄泉の神たちに相談をしてみましよう。どうぞその間は、どんなことがありましても、けつして私の姿をご覧にならないでくださいましな。後生でございますから」と、女神はか

たくそう申しあげておいて、御殿の奥へおはいりになりました。

伊弉諾神は永い間戸口にじつと待っていていらつしやいました。

しかし、女神は、それなり、いつまでたつても出ていらつしやい

ません。伊弉諾神はしまいには、もう待ちどおしくてたまらな

くなつて、とうとう、左のびんのくしをおぬきになり、その片

はしの、大歯を一本欠き取つて、それへ火をともして、わずか

にやみの中をてらしながら、足さぐりに、御殿の中深くはいつ

ておいでになりました。

そうすると、御殿のいちばん奥に、女神は寝ていらつしやい

ました。そのお姿をあかりでご覧になりますと、おからだじゆ

うは、もうすっかりべとべとに腐りくずれていて、臭い臭い

やなにおいが、ぷんぷん鼻へきました。そして、そのべとべと

に腐つたからだじゆうには、うじがうようよとたかつておりま

した。それから、頭と、胸と、お腹なかと、両ももと、両手両足のところには、そのけがれから生まれた雷神らいじんが一人ずつ、すべてで八人で、怖ろしい顔おそをしてうずくまっております。

伊弉諾神いざなぎのかみは、そのありさまをご覧になると、びっくりなすつて、怖ろしさのあまりに、急いで遁にげ出しておしまいになりました。

女神はむつくりと起きあがって、

「おや、あれほどお止め申しておいたのに、とうとう私のこの姿すがたをご覧になりましたね。まあ、なんという憎にくいお方かたでしょう。人にひどい恥はじをおかかせになった。ああ、くやしい」と、それはひどくお怒りになって、さっそく女の悪鬼わるおにたちを呼よんで、

「さあ、早く、あの神をつかまえておいで」と齒がみをしながら

らお言いつけになりました。

女の悪鬼たちは、

「おのれ、待て」と言いながら、どんどん追っかけて行きました。

伊弉諾神は、その鬼どもにつかまつてはたいへんだとおぼしめして、走りながら髪かみの飾かざりにさしてある黒いかずらの葉を抜き取つては、どんどんうしろへお投げつけになりました。

そうすると、見る見るうちに、そのかずらの葉の落ちたところへ、ぶどうの実がふさふさとなりました。女鬼どもは、いきなりそのぶどうを取つて食べはじめました。

神はその間に、いっしょうけんめいにかけだして、やっと少しばかり遁にげのびたとお思ひになりますと、女鬼どもは、まもなく、またじきうしろまで追いつめて来ました。

神は、

「おや、これはいけない」とお思いになつて、こんどは、右のびんのくしをぬいて、その齒をひつ欠いては投げつけ、ひつ欠いては投げつけなさいました。そうすると、そのくしの齒が片かたはしからたけのこになつてゆきました。

おんなおに女鬼たちは、そのたけのこを見ると、またさつそく引き抜いて、もぐもぐ食べだしました。

いざなぎのかみ伊弉諾神は、そのすきをねらつて、こんどこそは、だいぶ向こうまでお遁にげになりました。そしてもうこれならだいじょうぶだろうとおぼしめして、ひよいとうしろをふりむいてご覧になりますと、意外にも、こんどはさっきの女神のまわりにいた八人の雷人らいじんどもが、千五百人の鬼の軍勢をひきつれて、死にもぐるいでおっかけて来るではありませんか。

神はそれをご覧になると、あわてて十拳とつかの剣を抜きはなして、それでもつてうしろをぐんぐん切りまわしながら、それこそいっしょうけんめいにお遁にげになりました。そして、ようよう、この世界と黄泉よみの国との境さかいになっている、黄泉比良坂よもつひらぎという坂の下まで遁にげのびていらつしやいました。

三

すると、その坂の下には、ももの木が一本ありました。

神はそのももの実を三つ取つて、鬼どもが近づいて来るのを待ち受けていらしつて、その三つのもものを力いっぱいお投げつけになりました。そうすると、雷神たちはびっくりして、みんなちりぢりばらばらに遁にげてしまいました。

神はそのももに向かつて、

「おまえは、これから先も、日本じゅうの者がだれでも苦しい目に会っているときには、今わしを助けてくれたとおりに、みんな助けてやってくれ」とおっしゃって、わざわざおおかんつみのみこと大神実命というお名まえをおやりになりました。

そこへ、女神は、とうとうじれつたくおぼしめして、こんどはご自分で追っかけていらつしやいました。神はそれをご覧になると、急いでそこにあつた大きな大岩をひつかかえていらしつて、それを押しつけて、坂の口をふさいでおしまいになりました。

女神は、その岩にさえぎられて、それより先へは一足も踏み出すことができないものですから、恨めしうらそうに岩をにらみつけながら、

「わが夫の神よ、それではこのしかえしに、日本じゅうの人を一日に千人ずつ絞め殺してゆきますから、そう思つていらつしやいまし」とおつしやいました。神は、

「わが妻の神よ、おまえがそんなひどいことをするなら、わたしは日本じゅうに一日に千五百人の子供を生ませるから、いつこゝうかまわない」とおつしやつて、そのまま、どんどんこちらへお歸りになりました。

神は、

「ああ、きたないところへ行つた。急いであらだを洗つてけがれを払おう」とおつしやつて、日向の国の阿波岐原あわきはらというところへお出かけになりました。

そこにはきれいな川が流れていました。

神はその川の岸へつえをお投げすてになり、それからお帶や

お下ばかまや、お上衣うわぎや、お冠かんむりや、右左のお腕うでにはまつた腕輪うでわなどを、すっかりお取りはずしになりました。そうすると、それだけの物を一つ一つお取りになるたんびに、ひよいひよいと一人ずつ、すべてで十二人の神さまがお生まれになりました。

神は、川の流れをご覧になりながら、

上かみの瀬せは瀬が早い、

下しもの瀬は瀬が弱い。

とおっしゃって、ちょうどいいころあいの、中ほどの瀬におおりになり、水をかぶって、おからだじゅうをお洗いになりました。すると、おからだについたけがれのために、二人の禍わざわいの神が生まれました。それで伊弉諾いざなぎのかみ神は、その神がつくりだす禍を

おとりになるために、こんどは三人のよい神さまをお生みになりました。

それから水の底へもぐつて、おからだをお清めになるときに、また二人の神さまがお生まれになり、そのつぎに、水の中にこごんでお洗いになるときにもお二人、それから水の上へ出ておすすぎになるときにもお二人の神さまがお生まれになりました。そしてしまいに、左の目をお洗いになると、それといっしよに、

それはそれは美しい、とうとめ貴い女神がお生まれになりました。

伊弉諾神は、この女神さまにいざなぎのかみ天照大神というお名前をおつけに

なりました。そのつぎに右のお目をお洗いになりますと、つきよみのみこと月読命

という神さまがお生まれになり、いちばんしまいにお鼻をお洗

いになるときに、たけはやすさのおのみこと建速須佐之男命という神さまがお生まれにな

りました。

いざなぎのかみ
伊弉諾神はこのお三方をさんかたご覧になつて、

「わしもこれまでいくたりも子供を生んだが、とうとうしまいに、一等よい子供を生んだ」と、それはそれは大喜びををなさいまして、さつそく玉の首飾くびかざりをおはずしになつて、それをさらさらとゆり鳴らしながら、天照大神におあげになりました。そして、

「おまえは天へのぼつて高天原を治めよ」とおつしやいました。
それから月読命つきよみのみことには、

「おまえは夜の国を治めよ」とお言いつけになり、三ばんめの須佐之男命すさのおのみことには、

「おまえは大海おおうみの上を治めよ」とお言いわたしになりました。

天の岩屋あめ いわや

一

あまてらすおおかみ

天照大神と、二番目の弟さまの月読命つきよみのみこととは、おとうさまのご

命令に従つて、それぞれ大空と夜の国とをお治めになりました。

ところが末のお子さまの須佐之男命すさのおのみことだけは、おとうさまのお

言いつけをお聞きにならないで、いつまでたつても大海おおうみを治め

ようとなさらないばかりか、りっぱな長いおひげが胸むねの上まで

たれさがるほどの、大きなおとなにおなりになつても、やつぱ

り、赤んぼうのように、絶えまもなくわんわんわんお泣きな

狂いになつて、どうにもこうにも手のつけようがありませんでした。そのひどいお泣き方といたら、それこそ、青い山々の草木も、やかましい泣き声で泣き枯^からされてしまい、川や海の水も、その火のつくような泣き声のために、すっかり干^ひあがつたほどでした。

すると、いろんな悪い神々たちが、そのさわぎにつけこんで、わいわいとうるさくさわぎまわりました。そのおかげで、地上にはありとあらゆる災^{わざ}が一^いどきに起こつてきました。

伊弉諾命^{いざなぎのみこと}は、それをご覧^{らん}になると、びっくりなすつて、さつそく須佐之男命^{すさのおのみこと}をお呼び^よになつて、

「いつたい、おまえは、わしの言うことも聞かないで、何をそんなに泣き狂つてばかりいるのか」ときびしくおとがめになりました。

すると須佐之男命はむきになつて、

「私はおかあさまのおそばへ行きたいから泣くのです」とおつ

しやいました。

伊弉諾命はそれをお聞きになると、たいそうお腹立ちになつて、

「そんなかつてな子は、この国へおくわけにゆかない。どこへなりと出て行け」とおつしやいました。

命は平気で、

「それでは、お姉上さまにおいとま乞こいをしてこよう」とおつしやりながら、そのまま大空の上の、高天原をめぐたかまのはらして、どんなのぼつていらつしやいました。

すると、力の強い、大男の命ですから、力いっぱいずしんず

しんと乱暴らんぼうにお歩きになると、山も川もめりめりとゆるぎだし、

世界じゆうがみしみしと震い動きました。

あまてらすおおかみ

天照大神は、その響きにびっくりなすつて、

「弟があんな勢いで**のぼ**つて来るのは、必ずただごとではない。
きつと私の国を奪**う**ば**わ**れ取ろうと思つて出て来たに相違ない」

こうおつしやつて、さつそく、お身じたくをなさいました。

女神はまず急いで髪を**か**み**か**いて、男まげにおゆいになり、両方の
びんと両方の腕とに、八尺の曲玉**まがたま**というりっぱな玉の飾**かざ**りをお
つけになりました。そして、お背中には、五百本、千本という
たいそうな矢をお負**お**いになり、右手に弓を取つてお突きたてに
なりながら、勢いこんで足を踏**ふ**みならして待ちかまえていらつ
しやいました。そのきついお力ぶみで、お庭の堅**かた**い土が、まる
で粉雪**こなゆき**のようにもうもうと飛びちりました。

まもなく須佐之男命すさのおのみことは大空へお着きになりました。

女神はそのお姿すがたをご覧らんになると、声を張りあげて、

「命みこと、そちは何をしに来た」と、いきなりおしかりつけになりました。すると命は、

「いえ、私はけつして悪いことをしにまいったものではございません。おとうさまが、私の泣いているのをご覧らんになつて、なぜ泣くかとおとがめになつたので、お母上のいらつしやるところへ行きたいからですと申しあげると、たいそうお怒りおこになつて、いきなり、出て行つてしまえとおつしやるので、あなたにお別れをしにまいったのです」と言いわけをなさいました。

でも女神はすぐにはご信用にならないで、

「それではおまえに悪い心のない証拠しやうこを見せよ」とおつしやいました。命みことは、

「ではお互たがいに子を生んであかしを立てましょう。生まれた子によつて、二人の心のよしあしがわかります」とおつしやいました。

そこでごきようだいは、天安河あめのやすのかわという河かわの両方の岸に分かれてお立ちになりました。そしてまず女神めがみが、いちばん先に、命みことの十拳とつかの剣つるぎをお取りになつて、それを三つに折つて、天真名井あめのまないという井戸で洗つて、がりがりとおかみになり、ふつと霧きりをお吹きになりますと、そのお息の中から、三人の女神がお生まれになりました。

そのつぎには命みことが、女神の左のびんにおかけになっている、八尺やさかの曲玉まがたまの飾かざりをいただいて、玉の音をからからいわせなが

ら、天真名井あめのまないという井戸で洗いすすいで、それをがりがりかんで霧をお吹き出しになりますと、それといつしよに一人の男の神さまがお生まれになりました。その神さまが、天忍穗耳命あめのおしほみのみことです。

それからつぎには、女神の右のびんの玉飾りたまかざりをお取りになつて、先せんと同じようにして息をお吹きになりますと、その中からまた男の神が一人お生まれになりました。

つづいてこんどは、おかずらの玉飾りを受け取つて、やはり真名井まないで洗つて、がりがりかんで息をお吹きになりますと、その中から、また男の神が一人お生まれになり、いちばんしまいに、女神の右と左のお腕うでの玉飾りをかんで、息をお吹きになりますと、そのたんびに、同じ男神が一人ずつ——これですべて五人の男神がお生まれになりました。

あまてらすおおかみ
天照大神は、

「はじめに生まれた三人の女神は、おまえの劍つるぎからできたのだから、おまえの子だ。あとの五人の男神は私の玉飾りわたしからできたのだから、私の子だ」とおっしゃいました。

命は、

「そうら、私が勝った。私になんの悪心あくしんもない印しるしには、私の子
は、みんなおとなしい女神ではありませんか。どうです、それ
でも私は悪人ですか」と、それはそれは大いばりにおいばりに
なりました。そして、その勢いに乗ってお暴れあばだしになって、
女神がお作らせになっている田の畔あぜをこわしたり、みぞを埋め
たり、しまいには女神がお初穂はつほを召しあがる御殿ごてんへ、うんこを
ひりちらすというような、ひどい乱暴らんぼうをなさいました。

ほかの神々は、それを見てあきれてしまつて、女神に言いつ

けにまいりました。

しかし女神はちつともお怒りおこにならないで、

「何、ほっておけ。けつして悪い気でするのではない。きたないものは、酔よったまぎれに吐はいたのであろう。畔あぜやみぞをこわしたのは、せつかくの地面を、そんなみぞなぞにしておくのが惜おしいからであらう」

こうおっしゃって、かえつて命みことをかばつておあげになりました。

すると命は、ますます図ずに乗つて、しまいには、女たちが女神のお召物めしものを織はつてゐる、機織場はたおりばの屋根を破つて、その穴あなから、ぶちのうまの皮をはいで、血まぶれにしたのを、どしんと投げこんだりなさいました。機織女はたおりおんなは、びっくりして遁にげ惑まどうはずみに、梭ひで下腹したはらを突ついて死んでしまいました。

女神は、命のあまりの乱暴さにととうとういたたまれなくおな
りになって、天の岩屋あめ いわやという石室いしむろの中へお隠れかくになりました。
そして入口の岩の戸をびつしりとおしめになったきり、そのま
まひきこもっていらつしやいました。

すると女神は日の神さまでいらつしやるので、そのお方がお
姿すがたをお隠しかくになるといつしよに、高天原たかまのほらも下界の地の上も、一
度にみんなまつ暗がりくらになって、それこそ、昼と夜との区別も
ない、長い長いやみの世界になつてしまいました。

そうすると、いろいろの悪い神たちが、その暗がりにつけこ
んで、わいわいとさわぎだしました。そのために、世界じゅう
にはありとあらゆる禍わざわいが、一度にわきあがつて来しました。

そんなわけで、大空の神々たちは、たいそうお困りこまになりま
して、みんなで安河原やすのかわらという、空の上の河原かわらに集まつて、どう

かして、天照大神に岩屋からお出ましになつていただく方法はあるまいかといつしようけんめいに、相談をなさいました。

そうすると、おもいかねのかみ思金神という、いちばんかしこい神さまが、いいことをお考えつきになりました。

みんなはその神のさしずで、さつそく、にわとりをどつさり集めて来て、岩屋の前で、ひつきりなしに鳴かせました。

それから一方では、やすのかわ安河の河上から固い岩をはこんで来て、それを鉄床かなどこにして、やた八咫の鏡かがみというりっぱな鏡を作らせ、やさか八咫の曲玉まがたまというりっぱな玉で胸飾むなかぎりを作らせました。そして、あめのかぐやま天香具山えだという山からさかきを根拔ぬきにして来て、その上の方の枝へ、やさか八咫の曲玉まがたまをつけ、中ほどの枝へやた八咫の鏡かがみをかけ、下の枝へは、白や青のきれをつりさげました。そしてある一人の神さまが、そのさかきを持って天の岩屋に立ち、ほかの一人の神さまが、

そのそばでのりとをあげました。

それからやはり岩屋の前へ、あきだるを伏せて、あめのうずめのみこと 天宇受女命

という女神に、あめのかぐやま 天香具山のかずらのつるをたすきにかけさせ、

かずらの葉を髪飾りにかみかざさせて、そのおけの上へあがつて踊りを

踊らせました。

うずめのみこと 宇受女命は、お乳もお腹も、なか ももまるだしにして、足をと

んとん踏ふみならしながら、まるでつきものでもしたように、く

るくるくるくると踊り狂くるいました。

するとそのようすがいかにもおかしいので、何千人という神

たちが、一度にどつとふきだして、みんなでころがりまわつて笑

いました。そこへにわとりは声をそろえて、コツケコー、コツ

ケコーと鳴きたてるので、そのさわぎといったら、まったく耳

もつぶれるほどでした。

天照大神は、そのたいそうなさわぎの声をお聞きになると、何ごとが起こつたのかとおぼしめして、岩屋の戸を細めにあけて、そつとのぞいてご覧らんになりました。そして宇受女命うずめのみことに向かつて、「これこれ私わたしがここに、隠れていれば、空の上もまつくらははずだのに、おまえはなにをもしろがつて踊っているのか。ほかの神々たちも、なんであんなに笑いくずれているのか」とおたずねになりました。

すると宇受女命は、

「それは、あなたよりも、もつと貴い神さまとうとが出ていらつしやいましたので、みんなが喜んでさわいでおりますのでございませう」と申しあげました。

それと同時に一人の神さまは、例の、八咫やたの鏡かがみをつけたさかきを、ふいに大神の前へ突き出しました。鏡には、さつと、大

神のお顔がうつりました。大神はそのうつった顔をご覧になると、

「おや、これはだれであろう」とおつしやりながら、もつとよく見ようとおぼしめして、少しばかり戸の外へお出ましになりました。

すると、さつきから、岩屋のそばに隠れて待ちかまえていた、たちからおのみこと

手力男命という大力の神さまが、いきなり、女神のお手を取つて、すっかり外へお引き出し申しました。それといつしよに、一人の神さまは、女神のおうしろへまわつて、

「どうぞ、もうこれからうちへはおはいりくありませんように」と申しあげて、そこへしめなわを張りわたしてしまいました。

それで世界じゅうは、やつと長い夜があけて、再び明るい昼

が来ました。

神々たちは、それでようやく安心なさいました。そこでさつそく、みんなで相談して、須佐之男命すさのおのみことには、あんなひどい乱暴らんぼうをなすつた罰ばつとして、ご身代をすつかりさし出させ、そのうえに、りっぱなおひげも切りとり、手足の爪つめまではぎとつて、下界へ追いくだしてしまいました。

そのとき須佐之男命すさのおのみことは、大気都比売命おおけつひめのみことという女神に、何か物を食べさせよとおおせになりました。大気都比売命おおけつひめのみことは、おことばに従つて、さつそく、鼻あなの穴や口の中からいろいろの食べ物を出して、それをいろいろにお料理してさしあげました。

すると須佐之男命すさのおのみことは大気都比売命おおけつひめのみことのすることを見ていらしつて、

「こら、そんな、お前の口や鼻から出したものがおれに食える

か。無礼なやつだ」と、たいそうお腹立ちはらだになつて、いきなり
剣を抜ぬいて、大氣都比売命おおけつひめのみことをうちに切り殺しておしまいにな
りました。

そうすると、その死がいの頭から、かいこが生まれ、両方の
目にいねがなり、二つの耳にあわがなりました。それから鼻に
はあずきがなり、おなかに、むぎとだいずがなりました。

それを神産靈神かみむすびのかみがお取り集めになつて、日本じゅうの穀物こくもつの
種になさいました。

すさのおのみこと
須佐之男命は、そのまま下界へおりておいでになりました。

八俣^{やまた}の大蛇^{おろち}

一

須佐之男^{すさのおのみこと}命は、大空から追いおろされて、出雲^{いずも}の国の、肥^ひの河^{かわ}の河上^{かわかみ}の、鳥髪^{とりかみ}というところへおくだりになりました。

すると、その河^{かわ}の中にはしが流れて来ました。命^{みこと}は、それをご覧^{らん}になつて、

「では、この河の上の方には人が住んでいるな」とお察しになり、さつそくそちらの方へ向かつて探^{さが}し探^{さが}しおいでになりました。そうすると、あるおじいさんとおばあさんが、まん中に

一人の娘をすわらせて三人でおんおん泣いておりました。

命は、おまえたちは何者かとおたずねになりました。

おじいさんは、

「私は、この国の大山津見とおおやまつみと申します神の子で、足名椎と申し

ます者でございます。妻の名は手名椎、この娘の名は櫛名田媛

と申します」とお答えいたしました。

命は、

「それで三人ともどうして泣いているのか」と、かさねてお聞きになりました。

おじいさんは涙をふいて、

「私たち二人には、もとは八人の娘がおりましたのでございま

すが、その娘たちを、八俣の大蛇と申します怖ろしい大じやが、

毎年出てきて、一人ずつ食べて行ってしまうして、とうとう

この子一人だけになりました。そういうこの子も、今にその大じやが食べにまいますのでございます」

こう言つて、みんなが泣いているわけをお話しいたしました。
「いつたいその大じやはどんな形をしている」と、命みことはお聞きになりました。

「その大じやと申しますのは、からだは一つでございしますが、頭と尾おは八つにわかれておりまして、その八つの頭には、赤ほおずきのようなまっかな目が、燃えるように光っております。それからからだじゅうには、こけや、ひのきやすぎの木などがはえ茂しげっております。そのからだのすつかりの長さが、八つの谷と八つの山のすそをとるまくほどの、大きな大きな大じやでございます。その腹はらはいつも血にただれてまっかになっております」と怖ろしそうにお話しいたしました。命は、

「ふん、よしよし」とおうなずきになりました。そして改めておじいさんに向かつて、

「その娘はおまえの子ならば、わしのお嫁よめにukれないか」とおつしやいました。

「おことばではございますが、あなたさまはどこのだなただか存じませんので」とおじいさんは危あやぶんで怖る怖るこう申しました。命は、

「じつはおれは天照大神あまてらすおおかみの同じ腹はらの弟で、たつた今、大空からおりて来たばかりだ」と、うちあけてお名まえをおつしやいました。すると、足名椎あしなずちも手名椎てなずちも、

「さようでございますか。これはこれはおそれおおい。それでは、おおせのままさしあげますでございます」と、両手をついて申しあげました。

命は、櫛名田媛くしなだひめをおもらいになると、たちまち媛をくしに化けさせておしまいになりました。そして、そのくしをすぐにご自分のびんの巻髪まきがみにおさしになって、足名椎あしなずちと手名椎てなずちに向かつておつしやいました。

「おまえたちは、これからこめをかんで、よい酒をどつきり作れ。それから、ここへぐるりとかきをこしらえて、そのかきへ、八やとところに門をあけよ。そしてその門のうちへ、一つずつさじきをこしらえて、そのさじきの上に、大おけを一つずつおいて、その中へ、二人でこしらえたよい酒を一ぱい入れて待つておれ」と言いつけになりました。

二人は、おおせのとおりに、すっかり準備をととのえて、待つておりました。そのうちに、そろそろ大じやの出て来る時間が近づいて来ました。

命は、それを聞いて、じつと待ちかまえていらつしやいますと、まもなく、二人が言つたように、大きな大きな八俣やまたの大蛇おろちが、大きなまっかな目をぎらぎら光らして、のそのそと出て来ました。

大じやは、目の前に八つの酒さかおけが並ならんでいるのを見ると、いきなり八つの頭を一つずつその中へつつこんで、そのたいそうなお酒を、がぶがぶがぶとまたたくまに飲み干ほしてしまいました。そうするとまもなくからだじゅうによいがまわつて、その場へ倒れたなり、ぐうぐう寝ねいつてしまいました。

須佐之男命すさのおのみことは、そつとその寢息ねいきをうかがつていらつしやいましたが、やがて、さあ今だと思ひになつて、十拳とつかの劍つるぎを引き抜ぬくが早いか、おのれ、おのれと、つづけさまにお切りつけになりました。そのうちに八つの尾おの中の、中ほどの尾をお切りつ

けになりますと、その尾の中に何か固い物があつて、劍の刃先はさきが、少しばかりほろりと欠けました。

みこと
命は、

「おや、変だな」とおぼしめして、そのところを切り裂いてご覧になりますと、中から、それはそれは刃の鋭い、りっぱな劍が出て来ました。命は、これはふしぎなものが手にはいったとお思ひになりました。その劍はのちに天照大神へあまてらすおおかみご献上けんじょうになりました。

命はとうとう、大きな大きな大じやの胴体をずたずたに切り刻んでおしまひになりました。そして、

あしなずち「足名椎、てなずち手名椎、来て見よ。このとおりだ」とお呼びになりました。

二人はがたがたふるえながら出て来ますと、そこいら一面は、

きれぎれになつた大じやの胴体から吹き出る血でいっぱいになつておりました。その血がどどん肥ひの河かわへ流れこんで、河の水もまっかになつて落ちて行きました。

命はそれから、櫛名田媛くしなだひめとお二人で、そのまま出雲いずもの国にお住まいになるおつもりで、御殿ごてんをおたてになるところを、そちこちと、探さがしてお歩きになりました。そして、しまいに、須加すがというところまでおいでになると、

「ああ、ここへ来たら、心持がせいせいしてきた。これはよいところだ」とおっしゃつて、そこへ御殿をおたてになりました。そして、足名椎神あしなずちのかみをそのお宮の役人の頭かしらになさいました。

命にはつぎつぎにお子さまお孫さまがどどんおできになりました。その八代目のお孫さまのお子さまに、おおくにぬしのかみ大国主神、またの名を大穴牟遲神おおなむちのかみとおっしゃるりっぱな神さまがお生まれにな

むかでの室^{むろ}、へびの室^{むろ}

一

この大國主神^{おおくにぬしのかみ}には、八十神^{やそがみ}といつて、何十人というほどの、お
おぜいのごきようだいがおありになりました。

その八十神^{やそがみ}たちは、因幡^{いなば}の国に、八上媛^{やがみひめ}という美しい女の人
がいると聞き、みんなてんでんに、自分のお嫁^{よめ}にもらおうと思つ
て、一同でつれだつて、はるばる因幡へ出かけて行きました。

みんなは、大國主神^{おおくにぬしのかみ}が、おとなしいかたなのをよいことにし
て、このかたをお供^{とも}の代わりに使つて、袋^{ふくろ}を背おわせてついて

来させました。そして、因幡の氣多けたという海岸まで来ますと、そこに毛のないあか裸はだかのうさぎが、地べたにころがつて、苦しうにからだじゅうで息をしておりました。

やそがみ八十神たちはそれを見ると、

「おいうさぎよ。おまえからだに毛がはやしたければ、この海の潮しおにつかつて、高い山の上で風に吹かれて寝ねておれ。そうすれば、すぐに毛がいっぱいはえるよ」とからかいました。うさぎはそれをほんとうにして、さつそく海につかつて、ずぶぬれになって、よちよちと山へのぼつて、そのまま寝ころんでおりました。

するとその潮水しおみずがかわくにつれて、からだじゅうの皮がひきつれて、びりびり裂さけ破れました。うさぎはそのひりひりする、ひどい痛いたみにたまりかねて、おんおん泣き伏ふしておりました。

そうすると、いちばんあとからお通りかかりになった、お供の
大国主神がそれをご覧らんになつて、

「おいおいうさぎさん、どうしてそんなに泣いているの」とやさしく聞いてくださいました。

うさぎは泣き泣き、

「私は、もと隠岐おきの島におりましたうさぎでございしますが、この本土へ渡わたろうと思ひましても、渡るてだてがございせんものですから、海の中のわにをだまして、いつたい、おまえとわしとどっちがみうちが多いだろう、ひとつくらべてみようじゃないか、おまえはいるだけのけん族をすつかりつれて来て、ここから、あの向こうのはての、氣多けたのみさきまでずっと並ならんでみよ、そうすればおれがその背中せの上をつたわつて、かぞえてやろうと申しました。

すると、わにはすっかりだまされまして、出てまいりますも
まいりますも、それはそれは、うようよと、まつくろに集まっ
てまいりました。そして、私の申しましたとおりに、この海ば
たまでずらりと一列に並びました。

私は五十八と数をよみながら、その背なかの上をどんどん
渡つて、もう一足でこの海ばたへ上がろうといたしますときに、
やあいまぬけのわにめ、うまくおれにだまされたアいとはやし
たてますと、いちばんしまいにおりましたわにが、むつと怒つ
て、いきなり私をつかまえて、このとおりにすつかりきも
のをひつpegがしてしまいました。

そこですこのところへ伏ふしころんで泣ないておりましたら、
さきほどここをお通りになりました八十神やそがみたちが、いいことを
教えてやろう、これこれこうしてみろとおっしゃいましたので、

そのとおりに潮水しおみずを浴びて風に吹かれておりますと、からだじゅうの皮がこわばって、こんなにびりびり裂さけてしまいました」

こう言つて、うさぎはまたおんおん泣きだしました。

おおくにぬしのかみ

大国主神は、話を聞いてかわいそうだとおぼしめして、

「それでは早くあすこの川口へ行つて、ま水でからだじゅうをよく洗つて、そこいらにあるかばの花をむしつて、それを下に敷いて寝ねころんでいてごらん。そうすれば、ちゃんもとのとおりになるから」

こう言つて、教えておやりになりました。うさぎはそれを聞くとたいそう喜んでお礼を申しました。そしてそのあとで言いました。

「あんなお人の悪い八十神やそがみたちは、けつして八上媛やがみひめをご自分のものになさることはできません。あなたは袋ふくろなどをおしよいに

なつて、お供^{とも}についていらつしやいますけれど、八上媛はきつと、あなたのお嫁^{よめ}さまになると申します。みていてごらんなさいます」と申しました。

まもなく、八十神たちは八上媛のところへ着きました。そして、代わる代わる、自分のお嫁になれなれと言いましたが、媛^{ひめ}はそれをいちいちはねつけて、

「いえいえ、いくらお言いになりましたも、あなたがたのご自由にはなりません。私は、あそこにいらつしやる大国主神のお嫁にしていただくのです」と申しました。

八十神たちはそれを聞くとたいそう怒^{おこ}つて、みんなで大国主神を殺してしまおうという相談^{ほうぎ}をきめました。

みんなは、大国主神を、伯耆^{ほうぎ}の国の手間^{てま}の山という山の下へつれて行つて、

「この山には赤いいのししがいる。これからわたしたちが山の上からそのいのししを追いおろすから、おまえは下にいてつかまえろ。へたをして遁^にがしたらおまえを殺してしまふぞ」と、言いわたしました。そして急いで、山の上へかけあがって、さかにたき火をこしらえて、その火の中で、いのししのようなかつこうをしている大きな石をまっかに焼いて、

「そうら、つかまえろ」と言いながら、どしんと、転^{ころ}がし落としました。

ふもとで待ち受けていらした大国主神は、それをご覧になるなり、大急ぎでかけ寄って、力まかせにお組みつきになったと思いますと、からだはたちまちそのあか焼けの石の膚^{はだ}にこびりついて、

「あッ」とお言いになつたきり、そのままただれ死にに死んで

おしまいになりました。

二

大国主神の生みのおかあさまは、それをお聞きになると、たいそうお嘆き^{なげ}になつて、泣き^な泣き大空へかけのぼつて、高天原^{たかまのほら}においてになる、高皇産靈神^{たかみむすびのかみ}にお助けをお願いになりました。すると、高皇産靈神^{たかみむすびのかみ}は、蛸貝媛^{きさがいひめ}、蛤貝媛^{うむがいひめ}と名のついた、あかがいとはまぐりの二人の貝を、すぐに下界へおくだしになりました。

二人は大急ぎでおりて見ますと、大国主神^{おおくにぬしのかみ}はまつくろこげになつて、山のすそに倒れて^{たお}いらつしやいました。あかがいはさつそく自分のからを削^{けず}つて、それを焼いて黒い粉をこしらえまし

た。はまぐりは急いで水を出して、その黒い粉をこねて、おちちのようにどろどろにして、二人で大国主神のからだじゅうへ塗りつけました。

そうすると大国主神は、それほどの大やけどもたちまちなおつて、もとのとおりの、きれいな若い神になつてお起きあがりになりました。そしてどんどん歩いてお家へ帰つていらつしやいました。

八十神^{やそがみ}たちは、

それを見ると、びつくりして、もう一度みんな

でひそひそ相談をはじめました。そしてまたじょうずに大国

主神をだまして、こんどは別の山の中へつれこみました。そし

てみんなで寄つてたかつて、ある大きな木を根もとから切

りまげて、その切れ目へくさびをうちこんで、その間へ大国主

神をはいらせました。そうしておいて、ふいにポンとくさびを

打ちはなして、はさみ殺しに殺してしまいました。

大国主神のおかあさまは、若い子の神がまたいなくなつたので、おどろいて方々さがしておまわりになりました。そして、しまいにまた殺されていらつしやるところをおみつけになると、大急ぎで木の幹を切り開いて、子の神のお死がいをお引き出しになりました。そしていつしうけんめいに介抱かいほうして、ようようのことで再びお生きかえらせになりました。おかあさまは、「もうおまえはうかうかこの土地においてはおかれない。どうぞこれからすぐに、須佐之男命すさのおのみことのおいでになる、根堅国ねのかたすくにへ遁にげておくれ、そうすれば命みことが必ずいいようにはからつてくださるから」

こう言つて、若い子わかの神を、そのままそちらへ立つてお行かせになりました。

大国主神は、言われたとおりに、命のおいでになるところへお着きになりました。すると、命のお娘むすめこの須勢理媛すぜりひめがお取次をなすつて、

「お父上さま、きれいな神がいらつしやいました」とお言いになりました。

お父上の大神おおかみは、それをお聞きになると、急いでご自分で出てご覧になつて、

「ああ、あれは、大国主という神だ」とおつしやいました。そして、さつそくお呼びよいれになりました。

媛ひめは大国主神のことをほんとに美しいよい方だとすぐに大すきにお思ひになりました。大神には、第一それがお氣にめしませんでした。それで、ひとつこの若い神を困こまらせてやろうとお思ひになつて、その晩、大国主神を、へびの室むろといつて、大へ

び小へびがいつぱいたかつているきみの悪いおへやへお寝かせになりました。

そうすると、やさしい須勢理媛すぜりひめは、たいそう気の毒にお思ひになりました。それでご自分の、比礼ひれといつて、肩かけかたのよう
に使うきれを、そつと大国主神におわたしになつて、
「もしへびがくいつきにまいりましたら、このきれを三度振つて追いのけておしまいなさい」とおつしやいました。

まもなく、へびはみんなでかま首を立ててぞろぞろとむかつて来ました。おおくにぬしのかみ大国主神はさつそく言われたとおりに、飾りのきれを三度お振ふりになりました。するとふしぎにも、へびはひとりでにひきかえして、そのままじつとかたまつたなり、一晚じゅう、なんにも害をしませんでした。若い神わかはおかげで、気らくにぐつすりおよつて、朝になると、あたりまえの顔をして、大神おおかみ

の前に出ていらつしやいました。

すると大神は、その晩はむかではちのいっぱいはいつてい
るおへやへお寝かせになりました。しかし媛が、またこつそり
と、ほかの首飾りのきれをわたしてくだすつたので、大国主神
は、その晩もそれでむかではちを追いはらつて、また一晩じゅ
うらくらくとおやすみになりました。

大神は、大国主神がふた晩とも、平気で切りぬけてきたので、
よし、それではこんどこそは見えておれと、心の中でおつしやり
ながら、かぶら矢と言つて、矢じりに穴があいていて、射ると
びゅんびゅんと鳴る、こわい大きな矢を、草のぼうぼうとはえ
のびた、広い野原のまん中にお射こみになりました。そして、
大国主神に向かつて、

「さあ、今飛んだ矢を拾つて来い」とおおせつけになりました。

若い神は、正直しょうじきにご命令を聞いて、すぐに草をかき分けて、
んどんはいっておいでになりました。大神はそれを見すまして、
ふいに、その野のまわりへぐるりと火をつけて、どんどんお焼
きたてになりました。大国主神は、おやと思うまに、たちまち
四方から火の手におかこまれになって、すっかり遁げ場を失っ
ておしまいになりました。それで、どうしたらいいかとびつく
りして、とまどいをしていらつしやいますと、そこへ一ぴきの
ねずみが出て来まして、

「うちはほらほら、そとはすぶすぶ」と言いました。それは、中
は、がらんどうで、外はすぼまつている、という意味でした。

若い神は、すぐそのわけをおさとりになって、足の下を、とん
ときつく踏ふんでごらんになりますと、そこは、ちゃんと下が大
きな穴になつていたので、からだごとすつぽりとその中へ落ち

こみました。それで、じつとそのままこごまつて隠れていらつしやいますと、やがてま近まで燃えて来た火の手は、その穴の上を走つて、向こうへ遠のいてしまいました。

そのうちに、さっきのねずみが大神のお射になつたかぶら矢をちゃんとさがし出して、口にくわえて持つて来てくれました。見るとその矢の羽根のところは、いつのまにかねずみの子供たちがかじつてすっかり食べてしまつておりました。

三

須勢理媛すぜりひめは、そんなことはちつともご存じないものですから、美しい若い神は、きつと焼け死んだものとお思いになつて、ひとりで嘆なげき悲しんでいらつしやいました。そして火が消えるとす

ぐに、急いでお弔いとむらの道具を持って、泣き泣きさがしにいらつしやいました。

お父上の大神も、こんどこそはだいじょうぶ死んだらうと思ひになつて、媛のあとからいらしつてごらんになりました。

すると大国主神は、もとのお姿すがたのまままで、焼けあとのなかか

ら出ていらつしやいました。そしてさつきのかぶら矢をちやんとお手におわたしになりました。

大神もこれには内々ないないびつくりしておしまいになりました、し

かたなくいつしよに御殿ごてんへおかえりになりました。そして大きな広間へつれておはいりになつて、そこへごろりと横におなりになつたと思うと、

「おい、おれの頭のしらみを取れ」と、いきなりおつしやいました。

大国主神はかしこまつて、その長い長いお髪ぐしの毛をかき分けてご覧になりますと、その中には、しらみでなくて、たくさんなむかだが、うようよたかつておりました。

すると、須勢理媛すぜりひめがそばへ来て、こつそりとむくの実と赤土とをわたしてお行きになりました。

大国主神は、そのむくの実を一粒ひとつぶずつかみくだき、赤土を少しずつかみとかしては、いっしょにふいふいお吐はき出しになりました。大神はそれをご覧になると、

「ほほう、むかでをいちいちかみつぶしているな。これは感心なやつだ」とお思いになりながら、安心して、すやすやと寝いておしまになりました。

大国主神は、この上ここにぐずぐずしていると、まだまだどんなめに会うかわからないとお思いになつて、命みことがちようどぐ

うぐうおやすみになつてゐるのをさいわいに、その長いお髪ぐしを
いく束たばにも分けて、それを四方のたる木というたる木へ一束ず
つ縛しばりつけておいたうえ、五百人もかからねば動かせないよう
な、大きな大きな大岩を、そつと戸口に立てかけて、中から出
られないようにしておいて、大神の太刀おおかみと弓矢ゆみやと、玉の飾りの
ついた貴い琴こととをひつ抱かかえるなり、急いで須勢理媛すぜりひめを背なかに
おぶつて、そつと御殿をお逃にげ出しになりました。

するとまの悪いことに、抱えていらつしやる琴が、樹きの幹に
ぶつかつて、じゃらじゃらじやらんとたいそうなひびきを立て
て鳴りました。

大神はその音におどろいて、むつくりとお立ちあがりになり
ました。すると、おぐしがたる木じゅうへ縛りつけてあつたの
ですから、大力おおちからのある大神がふいにお立ちになるといっしよに、

そのおへやはいきなりめりめりと倒れつぶれてしまいました。^{たお}

大神は、

「おのれ、あの小僧^{こぞう}ツ神め」と、それはそれはお怒り^{いか}になつて、髪^{かみ}の毛をひと束ずつ、もどかしく解きはなしていらつしやるまに、こちらの大国主神はいつしうけんめいにかけてつづけて、すばやく遠くまで逃げのびていらつしやいました。

すると大神は、まもなくそのあとを追つかけて、とうとう黄泉比良坂^{よもつひらざか}という坂の上までかけつけていらつしやいました。そしてそこから、はるかに大国主神を呼びかけて、大声をしぼつてこうおつしやいました。

「おおいおい、小僧ツ神。その太刀と弓矢をもつて、そちのきょうだいの八十神^{やそがみ}どもを、山の下、川の中と、逃げるところへ追いつめ切り払い^{はら}い、そちが国の神の頭^{かしら}になつて、宇迦^{うか}の山の

ふもとに御殿を立てて住め。わしのその娘はおまえのお嫁よめにくれてやる。わかったか」とおどなりになりました。

おおくにぬしのかみ

大国主神はおおせのとおりに、改めていただいた、大神の太刀たと弓矢ゆみやを持って、八十神やそがみたちを討うちにいらつしやいました。そして、みんながちりぢりに逃にげまわるのを追っかけて、そこいらじゅうの坂の下や川の中へ、切り倒たおし突き落として、とうとう一人ももらさず亡ほろぼしておしまいになりました。そして、国の神の頭かしらになつて、宇迦うかの山の下に御殿ごてんをおたてになり、須勢理媛すぜりひめと二人で楽しくおくらしになりました。

四

そのうちに例の八上媛やがみひめは、大国主神をしたって、はるばるたず

ねて来ましたが、その大国主神には、もう須勢理媛すぜりひめというりっぱなお嫁さまよめができていたので、しおしおと、またおうちへ帰って行きました。

大国主神はそれからなお順々に四方を平らげて、だんだんと国を広げておゆきになりました。そうしているうちに、ある日、出雲いずもの国の御大みおの崎さきという海うみばたにいつていらつしやいますと、はるか向こうの海の上から、一人の小さな小さな神が、お供の者たちといつしよに、どんどんこちらへ向かつて船をこぎよせて来ました。その乗っている船は、ががいもという、小さな草の実で、着ている着物は、ひとりむしの皮を丸はぎにしたものでした。

大国主神は、その神に向かつて、

「あなたはどなたですか」とおたずねになりました。しかし、そ

の神は口を閉じたまま名まえをあかしてくれませんでした。大
国主神はご自分のお供の神たちに聞いてご覧になりましたが、
みんなその神がだれだかけんとうがつきませんでした。

するとそこへひきがえるがのこのこ出て来まして、

「あの神のことは久延彦くえびこならきつと存じておりますでしょう」と
言いました。久延彦くえびこというのは山の田に立っているかかしでし
た。久延彦くえびこは足がきかないので、ひと足も歩くことはできませ
んでしたけれど、それでいて、この下界のことはなんでもすつ
かり知っておりまして。

それで大国主神は急いでその久延彦くえびこにお聞きになりますと、

「ああ、あの神は大空においでになる神産靈神かみむすびのかみのお子さまで、
すくなびすくなびこなのかみ
少名毘古那神とおっしゃる方でごいます」と答えました。大

国主神はそれでさつそく、神産靈神かみむすびのかみにお伺いうかがになりますと、神

も、

「あれはたしかにわしの子だ」とおつしやいました。そして改めて少名毘古那神に向かつて、

「おまえは大国主神ときようだいになって二人で国々を開き固めて行け」とおおせつけになりました。

大国主神は、そのお言葉に従つて、少名毘古那神とお二人

で、だんだんに国を作り開いておゆきになりました。ところが、

少名毘古那神は、あとになると、急に常世国とこよのくにという、海の向こ

うの遠い国へ行つておしまいになりました。

おおくにぬしのかみ

大国主神はがっかりなすつて、私一人では、とても思いどお

りに国を開いてゆくことはできない、だれか力を添そえてくれる

神はいないものかと言つて、たいそうしおれていらつしやいました。

するとちようどそのとき、一人の神さまが、海の上一面にきら
きらと光を放ちながら、こちらへ向かつて近づいていらつしや
いました。はなそれは須佐之男命のお子の大年神というお方でした。すさのおのみこと おおとしのかみ
その神が、大国主神に向かつて、

「私をよく大事にまつておくれなら、いつしよになつて国を
作りかためてあげよう。おまえさん一人ではとてもできはしな
い」と、こう言つてくださいました。

「それではどんなふうにおまつり申せばいいのでございますか」
とお聞きになりますと、

「大和やまとの御諸みもろの山の上にまつてくれればよい」とおつしやい
ました。

大国主神はお言葉のとおりに、そこへおまつりして、その神
さまと二人でまただんだんに国を広げておゆきになりました。

きじのお使つかい

一

そのうちに大空の天照大神あまてらすおおかみは、お子さまの天忍穗耳命あめのおしほみみのみことに向かつて、

「下界に見える、あの豊葦原水穗国とよあしはらのみずほのくには、おまえが治めるべき国である」とおっしゃって、すぐにくだつて行くように、お言いつけになりました。命みことはかしこまっておりますいらつしやいました。しかし天あめの浮橋うきはしの上までおいでになつて、そこからお見おろしになりますと、下では勢いの強い神たちが、てんでんあばに暴

れまわつて、大さわぎをしているのが見えました。命は急いでひきかえしていらしつて、そのことを大神にお話しになりました。

それで大神と高皇産靈神たかみむすびのかみとは、さつそく天安河あめのやすのかわの河原に、おぜいの神々をすつかりお召めし集めになつて、

「あの水穂国みずほのくには、私たちの子孫しそんが治めるはずの国であるのに、今あすこには、悪強い神たちが勢い鋭く荒れまわっている。あの神たちを、おとなしくこちらの言うとおりにさせるには、いつたいだれを使いに行ったものであらう」とこうおっしゃつて、みんなにご相談をなさいました。

すると例のいちばん考え深い思金神おもいかねのかみが、みんなと会議をして、「それには天菩比神あめのほひのかみをおつかわしになりますますがよろしゅうございましょう」と申しあげました。そこで大神は、さつそくその

菩比神ほひのかみをおくだしになりました。

ところが菩比神ほひのかみは、下界へつくと、それなり大國主神おおくにぬしのかみの手下になつてしまつて、三年たつても、大空へはなんのご返事もいたしませんでした。

それで大神と高皇產靈神たかみむすびのかみとは、またおおぜいの神々をお召めしになつて、

「菩比神ほひのかみがまだ歸つてこないが、こんどはだれをやつたらよいであろう」と、おたずねになりました。

思金神おもいかねのかみは、

「それでは、天津國玉神あまつくにたまのかみの子の、天若日子あめのわかひこがよろしゅうございましょう」と、お答え申しました。

大神はその言葉ことばに従つて、天若日子あめのわかひこにりっぱな弓ゆみと矢やをお授けになつて、それを持たせて下界へおくだしになりました。

するとその若日子は天空にちやんとほんとうのお嫁よめがあるのに、下へおり着くといっしよに、おおくにぬしのかみ　むすめ大国主神の娘の下照比売したてるひめをまたお嫁にもらったばかりか、ゆくゆくは水穗国を自分が取つてしまおうという腹はらで、とうとう八年たつても大神の方へはてんでご返事にも帰りませんでした。

大神と高皇産靈神たかみむすびのかみとは、また神々をお集めになつて、

「二度めにつかわした天若日子もまたとうとう帰つてこない。いったいどうしてこんなにつまでも下界にいるのか、それを責せめただしてこさせたいと思うが、だれをやつたものであろう」とお聞きになりました。

おもいかねのかみ
思金神は、

「それでは名鳴女ななきめというきじがよろしゅうございましょう」と申しあげました。大神たちお二人はそのきじをお召めしになつて、

「おまえはこれから行つて天若日子を責めてこい。そちを水穂国みずほのくにへおくりだしになつたのは、この国の神どもを説き伏せるためではないか、それなのに、なぜ八年たつてもご返事をしないのか、と言つて、そのわけを聞きただしてこい」とお言いつけになりました。

名鳴女は、はるばると大空からおりて、天若日子のうちの門のそばの、かえでの木の上にとまつて、大神からおおせつかつたとおりをすつかり言いました。

すると若日子のところに使われている、天佐具売あめのさくめという女が、その言葉を聞いて、

「あすこに、いやな鳴き声を出す鳥がおります。早く射いておしまいなさいまし」と若日子にすすめました。

若日子は、

「ようし」と言いながら、かねて大神からいただいた来た弓とゆみ矢を取り出して、いきなりそのきじを射殺してしまいました。すると、その当たった矢が名鳴女の胸むねを突き通して、さかさまに大空の上まではねあがって、天安河あめのやすのかわの河原かわらにおいでになる、あまてらすのおかみ たかみむすびのかみ天照大神と高皇産靈神とのおそばへ落ちました。
高皇産靈神はその矢を手につけてご覧らんになりますと、矢の羽根に血がついておりました。

高皇産靈神は、

「この矢は天若日子あめのわかひこにつかわした矢だが」とおっしゃって、み

んなの神々にお見せになった後、

「もしこの矢が、若日子が悪い神たちを射たのが飛んで来たのなら、若日子にはあたるな。もし若日子が悪い心をいだいているなら、かれを射殺せよ」とおっしゃりながら、さきほどの

矢が通つて来た空の穴あなから、力いっぱいにお突きおろしになりました。

そうするとその矢は、若日子がちようど下界であおむきに寝ねていた胸のまん中を、ぷすりと突き刺さして一ぺんで殺してしまいました。

若日子のお嫁よめの下照比売したてるひめは、びつくりして、大声をあげて泣なきさわぎました。

その泣く声が風にはこばれて、大空まで聞こえて来ますと、若日子の父の天津国玉神あまつくにたまのかみと、若日子のほんとうのお嫁と子供たちがそれを聞きつけて、びつくりして、下界へおりて来ました。そして泣き泣きそこへ喪屋もやといつて、死人を寝かせておく小屋をこしらえて、がんを供物くもつをささげる役に、さぎをほうき持ちに、かわせみをお供えそなの魚取りさかなにやとい、すずめをお供えのこ

めつきに呼び、きじを泣き役につれて来て、八日八晩の間、若日子の死がいのそばで楽器をならして、死んだ魂を慰めておりました。

そうしているところへ、おおくにぬしのかみ大国主神の子で、したてるひめ下照比売のおあにいさまのたかひこねのかみ高日子根神がお悔みに来ました。そうすると若日子の父と妻子たちは、

「おや」とびつくりして、その神の手足にとりすがりながら、

「まあまあおまえは生きていたのか」

「まあ、あなたは死なないでいてくださいましたか」と言って、みんなでおんおんと嬉し泣きに泣きだしました。それはたかひこねのかみ高日子根神の顔や姿がすがた天若日子にそっくりだったので、みんなは一も二もなく若日子だとばかり思ってしまったのでした。

すると高日子根神は、

「何をふぎけるのだ」とまつかになつて怒りだして、

「人がわざわざ悔みに来たのに、それをきたない死人などといつしよにするやつがどこにある」とどなりつけながら、長い剣を抜きはなすといつしよに、その喪屋をめちやめちやに切り倒し、足でぽんぽんけりちらかして、ふんぷん怒つて行つてしまひました。

そのとき妹の下照比売は、あの美しい若い神は私のおあにいさまの、これこれこういう方だということを、歌に歌つて、誇りがおに若日子の父や妻子に知らせました。

二

あまてらすおおかみ
天照大神は、そんなわけで、また神々に向かつて、こんどと

いうこんどはだれを遣わしたらよいかとご相談をなさいました。
おもいかねのかみ

思金神とすべての神々は、

「それではいよいよ、天安河の河上の、天の岩屋におります

おはばりのかみ

尾羽張神か、それでなければ、その神の子の建御雷神か、二人

のうちどちらかをお遣しになるほかはございません。しかし尾

羽張神は、天安河の水をせきあげて、道を通れないようにして

おりますから、めったな神では、ちよつと呼びにもまいれませ

あめのかくのかみ

ん。これはひとつ天迦久神をおさしむけになりました、尾羽張

神がなんと申しますか聞かせてご覧になるがようございましよ

う」と申しあげました。

大神はそれをお聞きになると、急いで天迦久神をおやりになつ

あめのかくのかみ

てお聞かせになりました。

そうすると尾羽張神は、

おはばりのかみ

「これは、わざわざもつたいない。その使いには私でもすぐにまいりますが、それよりも、こんなことにかけてましては、私の子たけみかずちのかみの建御雷神がいつとうお役に立ちますかと存じます」
こう言つて、さつそくその神を大神のご前ぜんへうかがわせました。

大神はその建御雷神に、天鳥船神あめのとりふねのかみという神をつけておくだしになりました。

二人の神はまもなく出雲国いずものくにの伊那佐いなさという浜にくだりつきました。そしてお互いたがに長い剣つるぎをずらりと抜き放はなして、それを海の上にあおむけに突き立てて、そのきつききの上にあぐらをかきながら、大国主神おおくにぬしのかみに談判をしました。

「わたしたちは天照大神あまてらすおおかみと高皇産靈神たかみむすびのかみとのご命令で、わざわざお使いにまいつたのである。大神はおまえが治めているこの葦原あしはら

の中^{なか}つ国^{くに}は、大神のお子さまのお治めになる国だとおつしやつてゐる。そのおおせに従つて大神のお子さまにこの国をすつかりお譲^{ゆず}りなさるか。それともいやだとお言いか」と聞きますと、
おおくにぬしのかみ
大国主神は、

「これは私からはなんともお答え申しかねます。私よりも、むしろこの八重事代主神^{やえことしろぬしのかみ}が、とかくのご返事を申しあげますでございましょうが、あいにくただいま御大^{みお}の崎^{さき}へりようにまいつておりますので」とおつしやいました。

建御雷神^{たけみかづちのかみ}はそれを聞くと、すぐに天鳥船神^{あめのとりふねのかみ}を御大^{みお}の崎^{さき}へやつて、事代主神^{ことしろぬしのかみ}を呼んで来させました。そして大国主神に言つたとおりのことを話しました。

すると事代主神は、父の神に向かつて、
「まことにもつたいたないおおせです。お言葉^{ことば}のとおり、この国

は大空の神さまのお子さまにおあげなさいまし」と言いながら、自分の乗って帰った船を踏み傾ふかたむけて、おまじないの手打ちをしますと、その船はたちまち、青いいけがきに変わってしまいました。事代主神はそのいけがきの中へ急いでからだをかくしてしまいました。

たけみかずちのかみ

建御雷神は大国主神に向かつて、

「ただ今事代主神はあのとおりに申したが、このほかには、もうちがつた意見を持っている子はいないか」とたずねました。

大国主神は、

「私の子は事代主神のほかにも、もう一人、建御名方神たけみなかたのかみというも

のがおります。もうそれきりでございます」とお答えになりました。

そうしているとところへ、ちょうどこの建御名方神たけみなかたのかみが、千人も

かからねば動かせないような大きな大きな大岩を両手でさしあげて出て来まして、

「やい、おれの国へ来て、そんなひそひそ話をしているのはだれだ。さあ来い、力くらべをしよう。まずおれがおまえの手をつかんでみよう」と言いながら、大岩を投げだしてそばへ来て、いきなり建御雷神の手をひつつかみますと、御雷神の手は、たちまち氷の柱になってしまいました。御名方神がおやとおどろいている間に、その手はまたひよいと剣の刃になつてしましました。

御名方神はすっかりこわくなつておずおずとしりごみをしかけますと、御雷神は、

「さあ、こんどはおれの番だ」と言いながら、御名方神の手くびをぐいとひつつかむが早いかな、まるではえたてのあしをでも

扱うように、たちまち一握りにぎに握りつぶして、ちぎれ取れた手先を、ぼうんと向こうへ投げつけました。

御名方神は、まつさおになつて、いっしょうけんめいに逃げにだしました。御雷神みかづちのかみは、

「こら待て」と言いながら、どこまでもどんだんだん追つかけて行きました。そしてとうとう信濃しなのの諏訪湖すわこのそばで追いつめて、いきなり、一ひねりにひねり殺そうとしますと、建御名方神たけみなかたのかみはぶるぶるふるえながら、

「もういよいよおそれいました。どうぞ命ばかりはお助けくださいまし。私はこれなりこの信濃しなのより外へはひと足も踏み出しはいたしません。また、父や兄の申しあげましたとおりに、この葦原あしはらの中つ国は、大空の神のお子さまにさしあげますでございます」と、平たくなつておわびしました。

そこで建御雷神はまた出雲へ帰つて来て、たけみかずちのかみ 大国主神に問いつめしました。いずも

「おまえの子は二人とも、大神のおおせにはそむかないと申したが、おまえもこれでいよいよ言うことはあるまいな、どうだ」と言いますと、大国主神は、

「私にはもう何も異存はございません。この中つ国はおおせのとおり、すっかり、大神のお子さまにさしあげます。その上でただ一つのおねがいは、どうぞ私の社として、やしろ 大空の神の御殿ごてんのような、りっぱな、しっかりとした御殿をたてていただきとうございます。そうしてくださいますれば私は遠い世界から、いつまでも大神のご子孫にお仕え申します。じつは私の子は、ほかに、まだまだいくたりもありますが、しかし、ことしろぬしのかみ 事代主神さえ神妙にご奉公いたします上は、あとの子たちは一人も不平を申し

はいたしません」

こう言つて、いさぎよくその場で死んでおしまいになりました。

それで建御雷神は、さつそく、たけみかずちのかみ出雲国の多芸志いずものくに たぎしという浜にりっぱな大きなお社やしろをたてて、ちゃんと望みのとおりにまつりました。そして櫛八玉神くしやたまのかみという神を、お供えそなものを料理する料理人にしてつけ添そえました。

すると八玉神やたまのかみは、うになつて、海の底そこの土をくわえて来て、それで、いろんなお供えものをあげるかわらけをこしらえました。それからある海草くきの茎で火切臼ひきりうすと火切杵ひきりぎねという物をこしらえて、それをすり合わせて火を切り出して、建御雷神たけみかずちのかみに向かつてこう言いました。

「私が切つたこの火で、そこいらが、大空の神の御殿のお料理

場のように、すすでいっぱいになるまで欠かさず火をたき、かまどの下が地の底の岩のように固かたくなるまで絶えず火をもやして、りようしたちの取つて来る大すずきをたくさんに料理して、大空の神の召しあがるようなりつばなごちそうを、いつもいつもお供えいたします」と言いました。

たけみかずちのかみ

建御雷神はそれでひとまず安心して、大空へ帰りのぼりました。

あまてらすおおかみ

たかみむすびのかみ

た。そして天照大神と高皇産靈神に、すっかりこのことを、く

そうじよう

わしく奏上いたしました。

笠沙のお宮

一

あまてらすおおかみ たかみむすびのかみ
天照大神と高皇産靈神とは、あれほど乱れさわいでいた下界
を、建御雷神たちたけみかずちのかみが、ちゃんとこちらのものにして帰りました
ので、さつそく天忍穗耳命あめのおしほみみのみことをお召しめになつて、

葦原の中つ国はもはやすつかり平らたいいだ。おまえはこれから
すぐにくだつて、さいしよ申しつけたように、あの国を治めて
ゆけ」とおっしゃいました。

命みことはおおせに従つて、すぐに出発の用意におとりかかりにな

りました。するとちようどそのときに、お妃きさききの秋津師毘売命あきつしひめのみことが男のお子さまをお生みになりました。

おしほみのみこと

忍穂耳命は大神のご前ぜんへおいでになって、

「私たち二人に、世嗣よつぎの子供が生まれました。

名前は日子番能邇邇芸ひこほのにぎのみこと

とつけました。中つ国へくだしますには、この子がいちばんよいかと存じます」とおっしゃいました。

それで大神は、そのお孫さまの命みことが大きくおなりになります

と、改めておそばへ召して、

「下界に見えるあの中つ国は、おまえの治める国であるぞ」とおっしゃいました。命は、かしこまつて、

「それでは、これからすぐにくだつてまいります」とおっしゃつて、急いでそのお手はずをなさいました。そしてまもなく、いよいよお立ちになろうとなさいますと、ちようど、大空のお通

り道のある四つじに、だれだか一人の神が立ちはだかつて、まぶしい光をきらきらと放ちながら、上は高天原^{たかまのほら}までもあかあかと照らし、下は中つ国までいちめんに照り輝^{かがや}かせておりました。

あまてらすおおかみ

たかみむすびのかみ

天照大神と高皇産靈神とはそれをご覧になりますと、急いで

あめのうずめのみこと

天宇受女命をお呼びになつて、

「そちは女でこそあれ、どんな荒^{あら}くれた神に向かいあつても、

びくともしない神だから、だれをもおいておまえを遣^{つかわ}すのである。

あの、道をふさいでいる神のところへ行つてそう言つて来

い。大空の神のお子がおくだりになろうとするのに、そのお通

り道を妨^{さまた}げているおまえは何者かと、しつかり責^せめただして来

い」とお言いつけになりました。

うずめのみこと

宇受女命はさつそくかけつけて、きびしくとがめたてました。

すると、その神は言葉^{ことば}をひくくして、

「私は下界の神で名は猿田彦神と申します者でございます。ただいまここまで出てまいりましたのは、大空の神のお子さまがまもなくおくだりになると承りましたので、及ばずながら私がお道筋すじをご案内申しあげたいと存じまして、お迎えにまいりましたのでございます」とお答え申しました。

大神はそれをお聞きになりましてご安心なさいました。そしてあめあめのこやねのみことのこやねのみこと ふとだまのみこと あめのうずめのみこと いしこりどめのみこと たまのおやのみこと 天児屋根命、太玉命、天宇受女命、石許理度売命、玉祖命の五人を、お孫さまの命のお供の頭かしらとしておつけ添えそになりました。そしておしまいにお別れになるときに、八尺やさかの曲玉まがたまという、それはそれはごりつぱなお首飾くびかざりの玉と、八咫やたの鏡かがみという神々こうごうしいお鏡と、かねて須佐之男命が太じやの尾の中からお拾すさのおのみこといになった、鋭い御剣みつるぎと、この三つの貴いとうとご自分のお持物を、お手ずから命みことにお授けになつて、

「この鏡は私の魂だたましいと思つて、これまで私に仕えてきたとおりに、たいせつに崇めあがまつ祀るがよい」とおつしやいました。それから大空の神々の中でいちばんちえの深い思金神おもいかねのかみと、いちばんすぐれて力の強い手力男神たちからおのかみとをさらにおつけ添そえになつたうえ、「思金神よ、そちはあの鏡の祀まつりをひき受けて、よくとり行なえよ」とおおせつけになりました。

邇邇芸命ににぎのみことはそれらの神々をはじめ、おおぜいのお供の神をひきつれて、いよいよ大空のお住まいをおたちになり、いく重えともなくはるばるとわき重いこうなっている、深い雲の峰みねをどんどんおし分わけて、ご威光いこうりりしくお進すすみになり、やがて天浮橋あめのうきはしをもおし渡わたつて、どうどうと下界に向かつてくだつておいでになりました。そのまつさきには、天忍日命あめのおしひのみことと、天津久米命あまつくめのみことという、よりすぐった二人の強い神さまが、大きな剣つるぎをつるし、大きな弓

と強い矢とを負い抱えて、勇ましくお先払いをして行きました。
命たちはしまいに、日向ひゅうがの国の高千穂たかちほの山の、串触嶽くしふるだけという
険しい峰けの上にお着きになりました。そしてさらに韓国嶽からくにだけとい
う峰へおわたりになり、そこからだんだんと、ひら地へおくだ
りになって、お住まいをお定めになる場所を探し探し、海の方
へ向かつて出ておいでになりました。

そのうちに同じ日向ひゅうがの笠沙かささの岬みさきへお着きになりました。

ににぎのみこと

邇邇芸命は、

「ここは朝日もま向きに射し、夕日もよく照つて、じつにす
がしいよいところだ」とおっしゃつて、すっかりお氣にめし
ました。それでとうとう最後にそこへお住まいになることにお
きめになりました。そしてさつそく、地面のしつかりしたところ
へ、大きな広い御殿ごてんをおたてになりました。

命は、それから例の宇受女命うずめのみことをお召しめになつて、

「そちは、われわれの道案内をしてくれた、あの猿田彦神さるたひこのかみとは、

さいしよからの知り合いである。それでそちがつき添つて、あの神が帰るところまで送つて行つておくれ。それから、あの神のてがらを記念してやる印に、猿田彦さるたひこという名まえをおまえが継いで、あの神と二人のつもりで私わたしに仕えよ」とおつしやいました。宇受女命うずめのみことはかしこまつて、猿田彦神を送つてまいりました。

猿田彦神は、その後、伊勢いせの阿坂あざかというところに住んでいましたが、あるときりょうに出て、ひらふがいという大きな貝に手をはさまれ、とうとうそれなり海の中へ引き入れられて、おぼれ死しにに死んでしまいました。

宇受女命うずめのみことはその神を送り届けて帰つて来ますと、笠沙かささの海ば

たへ、大小さまぎまの魚をすつかり追ひ集めて、

「おまえたちは大空の神のお子さまにお仕え申すか」と聞きま
した。そうすると、どの魚も一ぴき残らず、

「はいはい、ちゃんとご奉公申しあげます」とご返事をしまし
たが、中でなまこがたった一人、お答えをしないで黙だまっており
ました。

すると宇受女命うずめのみことは怒って、

「こウれ、返事をしない口はその口か」と言いざま、手早く懐劍かいけん
を抜きはなつて、そのなまこの口をぐいとひとえぐり切り裂さき
ました。ですからなまこの口はいまだに裂けております。

そのうちに邇邇ににぎのみこと芸命は、ある日、同じみさきできれいな若い女の人にお出会いになりました。

「おまえはだれの娘か」むすめとおたずねになりますと、その女の人
は、

「私は大山津見神おおやまつみのかみの娘の木色咲耶媛このはなさくやひめと申す者でございます」と
お答え申しました。

「そちにはきょうだいがあるか」とかさねてお聞きになります
と、

「私には石長媛いわながひめと申します一人の姉がございます」と申しまし
た。みこと命は、

「わたしはおまえをお嫁よめにもらいたいと思うが、来るか」とお
聞きになりました。すると咲耶媛さくやひめは、

「それは私からはなんとも申しあげかねます。どうぞ父の大山津見神おおやまつみのかみ

におたずねくださいまし」と申しあげました。

みこと

命はさつそくお使いをお出しになつて、おおやまつみのかみ大山津見神にさくやひめ咲耶媛

をお嫁にもらいたいとお申しこみになりました。

おおやまつみのかみ

さくやひめ大山津見神はたいそう喜んで、すぐにそのさくやひめ咲耶媛に、姉の

いわながひめ

石長媛をつき添いにつけて、いろいろのお祝いの品をどつさり

持たせてさしあげました。

みこと

命は非常にお喜びになつて、すぐさくやひめ咲耶媛とご婚礼をなさいました。しかし姉の石長媛は、それはそれはひどい顔をした、みにくい女でしたので、同じごてん御殿でいっしょにおくらしになるのがおいやだものですから、そのまますぐに、父の神の方へお送りかえしになりました。

おおやまつみ

は大山津見は恥じ入つて、使いをもつてこう申しあげました。

「私がこのはなさくやひめ木色咲耶媛に、わざわざいわながひめ石長媛をつき添いにつけました

わけは、あなたが咲耶媛さくやひめをお嫁になすつて、その名のとおり、花が咲さき誇ほこるように、いつまでもお栄えになりますばかりでなく、石長媛いわながひめを同じ御殿にお使いになりますれば、あの子の名まえについておりますとおり、岩が雨に打たれ風にさらされても、ちつとも変わらずにがつしりしているのと同じように、あなたのおからだもいつまでもお変わりなくいらつしやいますようにと、それをお祈り申してつけ添えたのでございます。それなのに、咲耶媛さくやひめだけをおとめになつて、石長媛いわながひめをおかえしになつたうえは、あなたも、あなたのご子孫のつぎつぎのご寿命じゅみょうも、ちょうど咲いた花がいくほどもなく散りはてるのと同じで、けつして永ながくは続きませんよ」と、こんなことを申し送りました。

そのうちに咲耶媛さくやひめは、まもなくお子さまが生まれそうになりました。

それで命にそのことをお話しになりますと、命はあんまり早く生まれるので変だとおぼしめして、

「それはわしたち二人の子であろうか」とお聞きになりました。

さくやひめ
咲耶媛は、そうおつしやられて、

「どうしてこれが二人よりほかの者の子でございましょう。もし私たち二人の子でございませんでしたら、けつして無事にお産はできますまい。ほんとうに二人の子である印しるしには、どんなことをして生みましても、必ず無事に生まれるに相違ございません」

こう言つてわざと出入口のないお家をこしらえて、その中におはいりになり、すきまというすきまをぴつしり土で塗ぬりつぶしておしまいになりました。そしていざお産をなさるというとき、そのお家へ火をつけてお燃もやしになりました。

しかしそんな乱暴^{らんぼう}な生み方をなすつても、お子さまは、ちやんとご無事に三人もお生まれになりました。媛^{ひめ}は、はじめ、うちじゆうに火が燃え広がって、どんどん炎^{ほのお}をあげているときにお生まれになった方を火照命^{ほてりのみこと}というお名まえになさいました。それから、つぎつぎに、火須勢理命^{ほすせりのみこと}、火遠理命^{ほおりのみこと}というお二方^{ふたかた}がお生まれになりました。火遠理命はまたの名を日子穗穗出見命^{ひこほほでみのみこと}ともお呼び^よ申しました。

満潮みちしおの玉、干潮ひしおの玉

一

三人のごきようだいは、まもなく大きな若い人わかにおなりになりました。その中でおあにいさまの火照命ほてりのみことは、海でりようをなさるのがたいへんおじょうずで、いつもいろんな大きな魚さかなや小さな魚をたくさんつってお帰りになりました。末の弟さまの火遠理命ほおりのみことは、これはまた、山でりようをなさるのがそれはそれはお得意で、しじゅういろんな鳥や獣をどつきりとお帰りになりました。

あるとき弟の命は、^{みこと}おあにいさまに向かつて、
「ひとつためしに二人で道具を取りかえて、互^{たが}いに持ち場をか
えて、りようをしてみようではありませんか」とおつしやいま
した。

おあにいさまは、弟さまがそう言つて三度もお頼^{たの}みになつて
も、そのたんびにいやだと言つてお聞き入れになりませんでした。
しかし弟さまが、あんまりうるさくおつしやるものですか
ら、とうとうしまいに、いやいやながらお取りかえになりました。
た。

弟さまは、さつそくつり道具を持つて海ばたへお出かけにな
りました。しかし、つりのほうはまるでおかつてがちがうので、
いくらおあせりになつても一^びきもおつれになれないばかりか、
しまいにはつり針^{はり}を海の中へなくしておしまいになりました。

おあにいさまの命も、山のりようにはおなれにならないものですから、いっこうに獲物えものがないので、がっかりなすつて、弟さまに向かつて、

「わしのつり道具を返してくれ、海のりようも山のりようも、お互いになれたものでなくてはだめだ。さあこの弓矢を返そう」とおつしやいました。

弟さまは、

「私はとんだことをいたしました。とうとう魚を一ぴきもつらないうちに、針を海へ落としてしまいました」とおつしやいました。するとおあにいさまはたいへんにお怒りおこになつて、無理にもその針をさがして来いとおつしやいました。弟さまはしかたなしに、身につるしておいになる長い剣つるぎを打ちこわして、それでつり針を五百本こしらえて、それを代わりにおさしあげ

になりました。

しかし、おあにいさまは、もとの針でなければいやだとおつしやつて、どうしてもお聞きいれになりませんでした。それで弟さまはまた千本の針をこしらえて、どうぞこれでかんべんしてくださいましと、お頼みになりましたが、おあにいさまは、どこまでも、もとの針でなければいやだとお言いはりになりました。

ですから弟さまは、困こまつておしまいになりました、ひとりで海ばたに立つて、おいおい泣ないておいでになりました。そうすると、そこへ塩しお椎つち神のかみという神が出てまいりまして、

「もしもし、あなたはどうしてそんなに泣いておいでになるの
でございます」と聞いてくれました。弟さまは、

「私わたしはおあにいさまのつり針を借りてりょうをして、その針を

海の中へなくしてしまつたのです。だから代わりの針をたくさんこしらえて、それをお返しすると、おあにいさまは、どうしてもとの針を返せとおっしゃつてお聞きにならないのです」
こう言つて、わけをお話しになりました。

しおつちのかみ

塩椎神はそれを聞くと、たいそうお氣の毒に思ひまして、

「それでは私がちゃんとよくしてさしあげましょう」と言いながら、大急ぎで、水あかが少しもはいらぬように、かたく編んだ、かごの小船こぶねをこしらえて、その中へ火遠理命ほおりのみことをお乗せ申しました。

「それでは私が押し出してあげ申しますから、そのままどんな海のまんなかへ出ていらつしやいまし。そしてしばらくお行きになりますと、向かうの波の間によい道がついておりますから、それについてどこでも流れておいでになると、しまい

にたくさんのむねが魚のうろこのように立ち並んだ、大きな大きなお宮へお着きになります。それは綿津見わたつみの神という海の神の御殿ごてんでございます。そのお宮の門のわきに井戸いどがあります。井戸の上にかつらの木がおいかぶさっておりますから、その木の上のぼって待っていらつしやいまし。そうすると海の神の娘むすめが見つけて、ちゃんといひようにとりはからつてくれますから」と言つて、力いっぱいその船を押し出してくれました。

二

みこと
命はそのままずんずん流れてお行きになりました。そうするとまったく塩椎神しおつちのかみが言つたように、しばらくして大きな大きなお宮へお着きになりました。

命はさつそくその門のそばのかつらの木にのぼつて待つておいでになりました。そうすると、まもなく、綿津見神わたつみのかみの娘むすめの豊玉媛とよたまひめのおつきの女が、玉の器うつわを持って、かつらの木の下の井戸いどへ水をくみに来しました。

女は井戸の中を見ますと、人の姿すがたがうつっているので、ふしぎに思つて上を向いて見ますと、かつらの木にきれいな男の方がいらつしやいました。

命は、その女に水をくれとお言いになりました。女は急いで玉の器にくみ入れてさしあげました。

しかし命はその水をお飲みにならないで、首にかけておいでになる飾かざりりの玉をおほどきになつて、それを口にふくんで、その玉の器の中へ吐はき入れて、女にお渡しになりました。女は器を受け取つて、その玉をとり出そうとしますと、玉は器の底に

固くくつついてしまつて、どんなにしても離れませんでした。
それで、そのままうちの中へ持つてはいつて、豊玉媛にその器
ごとさし出しました。

とよたまひめ
豊玉媛は、その玉を見て、

かぢぐち
「門口にだれかおいでになつてゐるのか」と聞きました。

女は、

「井戸のそばのかつらの木の上にきれいな男の方がおいでになつ
ています。それこそは、こちらの王さまにもまさつて、それは
それはけだかい貴い方とうとでございます。その方が水をくれとおつ
しやいましたから、すぐに、この器へくんでさしあげますと、水
はおあがりにならないで、お首飾りの玉を中へお吐き入れにな
りました。そういたしますと、その玉が、ご覧らんのように、どう
しても底から離れないのでございます」と言いました。

媛ひめ みことは命のお姿を見ますと、すぐにおとうさまの海の神のところへ行つて、

「門口にきれいな方がいらしつています」と言いました。

海の神は、わざわざ自分で出て見て、

「おや、あのお方は、大空からおくだりになった、貴い神さまのお子さまだ」と言いながら、急いでお宮へお通し申しました。

そしてあしかの毛皮を八枚重まいかさねて敷しき、その上へまた絹たための畳たたみを八枚重ならねて、それへすわつていただいて、いろいろごちそうをどつさり並ならべて、それはそれはいいねいにおもてなしをしました。そして豊玉媛よめをお嫁よめにさしあげました。

それで命みことはそのまま媛ひめといつしよにそこにお住まいになりました。そのうちに、いつのまにか三年という月日がたちました。すると命はある晩、ふと例の針はりのことを思い出しになつて、

深いため息をなさいました。

とよたまひめ

豊玉媛はあくる朝、そつと父の神のそばへ行つて、

みこと

「おとうさま、命はこのお宮に三年もお住まいになつていても、これまでただの一度もめいつたお顔をなさつたことがないのに、ゆうべにかぎつて深いため息をなさいました。なにか急に心配なことがおできになつたのでしょうか」と言いました。

海の神はそれを聞くと、あとで命に向かつて、

むすめ

「さきほど娘が申しますには、あなたは三年の間こんなところにおいでになりましたも、ふだんはただの一度も、ものをお嘆なげきになつたことがないのに、ゆうべはじめてため息をなさいましたと申します。何かわけがおありになるのでございますか。いったいいちばんはじめ、どうしてこの海の中なぞへおいでになつたのでございます」こう言つておたずね申しました。

命はこれこれこういうわけで、つり針はりをさがしに來たのですとおつしやいました。

海の神はそれを聞くと、すぐに海じゅうの大きな魚さかなや小さな魚を一ぴき残さず呼び集めて、

「この中にだれか命の針をお取り申した者はいないか」と聞きました。すると魚たちは、

「こないだから雌めだいがのどにとげを立てて物が食べられないで困こまっておりますが、ではきつとお話のつり針をのんでいるに相違ちがひございません」と言いました。

海の神はさつそくそのたいを呼んで、のどの中をさぐつて見ますと、なるほど、大きなつり針を一本のんでおりました。

海の神はそれを取り出して、きれいに洗つて命にさしあげました。すると、それがまさしく命のおなくしになつたあの針で

した。海の神は、

「それではお帰りになつて、おあにいさまにお返しになります
ときには、

いやなつり針、

わるいつり針、

ばかなつり針。

とおつしやりながら、必ずうしろ向きになつてお渡しなさいま
し。それから、こんどからはおあにいさまが高いところへ田を
お作りになりましたら、あなたは低いところへお作りなさいま
し。そのあべこべに、おあにいさまが低いところへお作りにな
りましたら、あなたは高いところへお作りになることです。す

べて世の中の水という水は私が自由に出し入れするのでございます。おあにいさまは針のことです。いぶんあなたをおいじめになりましたから、これからはおあにいさまの田へはちつとも水をあげないで、あなたの田にばかりどつさり入れておあげ申します。ですから、おあにいさまは三年のうちに必ず貧乏びんぼうになつておしまいになります。そうすると、きつとあなたをねたんで殺しにおいでになるに相違ちがひございません。そのときには、この満潮みちしおの玉を取り出して、おぼらしておあげなさい。この中から水がいくらでもわいて出ます。しかし、おあにいさまが助けてくれとおつしやられておわびをなさるなら、こちらのこの干潮ひしおの玉を出して、水をひかせておあげなさいまし。ともかく、そうして少しこらしめておあげになるがようございます」

こう言つて、そのたいせつな一つの玉を命みことにさしあげました。

それからけらいのわにをすつかり呼び集めて、

「これから大空の神のお子さまが陸の世界へお帰りになるのだから、おまえたちはいく日あつたら命をお送りして帰ってくるか」と聞きました。

わにたちは、お互いにからだの大きさにつれてそれぞれかんじようして、めいめいにお返事をしました。その中で六尺しゃくばかりある大わには、

「私は一日あれば行つてまいります」と言いました。海の神は、「それではおまえお送り申してくれ。しかし海を渡るときに、けつしてこわい思いをおさせ申してはならないぞ」とよく言い聞かせた上、その首のところへ命をお乗せ申して、はるばるとお送り申して行かせました。すると、わにはうけあつたとおり、一日のうちに命をもとの浜までおつれ申しました。

命はご自分のつるしておいでになる小さな刀をおほどきになつて、それをごほうびにわにの首へくくりつけておかえしになりました。

命はそれからすぐに、おあにいさまのところへいらしつて、海の神が教えてくれたとおりに、

いやなつり針はり、

悪いつり針、

ばかなつり針。

と言いいい、例のつり針を、うしろ向きになつてお返しになりました。それから田を作るにも海の神が言ったとおりになさいました。

そうすると、命の田からは、毎年どんどんおこめが取れるのに、おあにいさまの田には、水がちつとも来ないものですから、おあにいさまは、三年の間にすっかり貧乏びんぼうになつておしまいになりました。

するとおあにいさまは、あんのじょう、命のことをねたんで、いくどとなく殺しにおいでになりました。命はそのときにはさつそく満潮みちしほの玉を出して、大水をわかせてお防ぎになりました。おあにいさまは、たんびにおぼれそうになつて、助けてくれ、助けてくれ、とおつしやいました。命はそのときには干潮ひしほの玉を出してたちまち水をおひかせになりました。そんなわけで、おあにいさまも、しまいには弟さまの命にはとてもかなわないと思いますになり、とうとう頭をさげて、

「どうかこれまでのことは許しておくれ。私はこれからしよう

がい、夜昼おまえのうちの番をして、おまえに奉公するから」と、かたくお誓いちかになりました。

ですから、このおあにいさまの命のご子孫は、後の代よまで、命が水におぼれかけてお苦しみになったときの身振りみぶをまねた、さまざまなおかしな踊りおどを踊るのが、代々きまりになつておりました。

三

そのうちに、火遠理命ほおりのみことが海のお宮へ残しておかえりになつた、お嫁よめさまの豊玉媛とよたまひめが、ある日ふいに海の中から出ていらしつて、「私はかねて身重みおもになつておりましたが、もうお産をいたしますときがまいりました。しかし大空の神さまのお子さまを海の

中へお生み申してはおそれ多いと存じまして、はるばるこちらまで出てまいりました」とおっしゃいました。

それで命は急い^{みこと}で、うぶやという、お産をするおうちを、海ばたへおたてになりました。その屋根はかやの代わりに、うの羽根を集めておふかせになりました。

するとその屋根がまだできあがらないうちに、豊玉媛は、もう産けがおつきになって、急いでそのうちへおはいりになりました。

そのとき媛^{ひめ}は命に向かつて、

「すべての人がお産をいたしますには、みんな自分の国のならわしがあります、それぞれへんなかつこうをして生みますものでございます。それですから、どうぞ私がお産をいたしますところも、けつしてご覧^{らん}にならないでくださいましな」と、かた

くお願いしておきました。命は媛ひめがわざわざそんなことをおつしやるので、かえつて変だとおぼしめして、あとでそつと行つてのぞいてご覧になりました。

そうすると、たつた今まで美しい女であつた豊玉媛が、いつのまにか八ひろもあるような恐ろしい大わになつて、うんうんうなりながらはいまわつていました。命はびつくりして、どんどん逃にげ出しておしまひになりました。

豊玉媛はそれを感じいて、恥ずかしくて恥ずかしくてたまらないものですから、お子さまをお生み申すと、命に向かつて、「私はこれから、しじゅう海を往来して、お目にかかりにまいりますつもりでおりましたが、あんな、私の姿をご覧になりましたので、ほんとうにお恥ずかしくて、もうこれきりおうかがいできません」こう言つて、そのお子さまをあとにお残し申

したまま、海の中の通り道をすっかりふさいでしまつて、どんな海の底へ帰つておしまいになりました。そしてそれなりとうとう一生、二度と出ていらつしやいませんでした。

お二人の中のお子さまは、うの羽根の屋根がふきおえないうちにお生まれになつたので、それから取つて、うがやふきあえずのみこと鵜茅草葺不合命とお呼びになりました。

ひめ媛は海のお宮にいらしても、このお子さまのことが心配でならないものですから、お妹さまの玉依媛をたまよりひめこちらへよこして、その方の手で育ててもらいになりました。媛は夫の命が自分のひどい姿をおのぞきになつたことは、いつまでたつても恨めしくてたまりませんでしたけれど、それでも命のことはやつぱり恋しくおしたわしくて、かたときもお忘れになることができませんでした。それで玉依媛にことづけて、

赤玉は、

緒おさえ光れど、

しらたま

白玉の、

君が装よそおし、

とうと

貴くありけり。

という歌をお送りになりました。これは、

「赤い玉はたいへんにりっぱなもので、それをひもに通して飾かざりにすると、そのひもまで光って見えるくらいですが、その赤玉にもまさった、白玉のようにうるわしいあなたの貴いお姿すがたを、私はしじゅうお慕したわしく思っております」という意味でした。

みこと

命はたいそうあわれにおぼしめして、私もおまえのことはけっ

して忘れはしないという意味の、お情けのこもったお歌をお返しになりました。

命は高千穂たかちほの宮というお宮に、とうとう五百八十のお年までお住まいになりました。

八咫鳥 やたがらす

一

鵜茅草葺不合命うがやふきあえずのみことは、ご成人の後、玉依媛たまよりひめを改めてお妃きさきにお立

てになって、四人の男のお子をおもうけになりました。

この四人のごきょうだいのうち、二番めの稲氷命いなひのみことは、海をこ

えてはるばると、常世国とこよのくにという遠い国へお渡りになりました。

ついで三番めの若御毛沼命わかみけぬのみことも、お母上のお国の、海の国へ行つ

ておしまいになり、いちばん末の弟さまの神倭伊波礼毘古命かみやまといわれひこのみことが、

高千穂たかちほの宮にいらしつて、天下をお治めになりました。しかし、

日向はたいへんにへんぴで、政をお聞きめすのにひどくご不便ひゅうが まつりごとでしたので、命はいちばん上のおあにいさまの五瀬命とお二人みことでご相談のうえ、

「これは、もつと東の方へ移ったほうがよいであろう」とおっしゃって、軍勢を残らずめしつれて、まず筑前国ちくぜんのかくにに向かっておたちになりました。その途中、豊前の宇佐ぶぜん うさにお着きになりますと、その土地の宇佐都比古うさつひこ、宇佐都比売うさつひめという二人の者が、御殿をつくつてお迎え申し、てあつくおもてなしをしました。

命はそこから筑前ちくぜんへおはいりになりました。そして岡田宮おかだのみやというお宮に一年の間ご滞在になった後、さらに安芸あきの国へおのぼりになって、多家理宮たけりのみやに七年間おとどまりになり、ついで備前びぜんへお進みになって、八年の間高島宮たかしまのみやにお住まいになりました。そしてそこからお船をつらねて、波の上を東に向かつておのぼ

りになりました。

そのうちに速吸門はやすいのもとというところまでおいでになりますと、向

こうから一人の者が、かめの背なかに乗つて、魚さかなをつりながら出て来まして、命みことのお船を見るなり、両手をあげてしきりに手招てまねきをいたしました。命はその者を呼びよせて、

「おまえは何者か」とお聞きになりますと、

「私はこの地方の神で宇豆彦うずひこと申します」とお答えいたしました。

「そちはこのへんの海路を存じているか」とおたずねになりますと、

「よく存じております」と申しました。

「それではおれのお供につくか」とおっしゃいますと、

「かしこまりました。ご奉公申しあげます」とお答え申しまし

たので、命はすぐにおそばの者に命じて、さおをさし出させてお船へ引きあげておやりになりました。

みんなは、そこから、なお東へ東へとかじを取つて、やがてせつつ摂津の浪速なみはやの海を乗り切つて、河内国かわちのくにの、青雲あをぐもの白肩津しらかたのつという浜へ着きました。

するとそこには、大和やまとの鳥見とみというところの長髓彦ながすねひこという者が、兵をひきつれて待ちかまえておりました。命は、いざ船からおおりになろうとしますと、かれらが急にどつと矢を射向いけて来ましたので、お船の中から盾たてを取り出して、ひゅうひゅう飛んで来る矢の中をくぐりながらご上陸なさいました。そしてすぐにどんどん戦いくさをなさいました。

そのうちに五瀬命いつせのみことが、長髓彦ながすねひこの鋭い矢のために大きずをお受けになりました。命みことはその傷をおおさえになりながら、

「おれたちは日の神の子孫でありながら、お日さまの方に向かつて攻めかかったのがまちがいである。だからかれらの矢にあたつたのだ。これから東の方へ遠まわりをして、お日さまを背なかに受けて戦おう」とおっしゃって、みんなをめし集めて、弟さまの命といっしょにもう一度お船におめしになり、大急ぎで海のまん中へお出ましになりました。

その途中で、命はお手についた傷の血をお洗いになりました。しかしそこから南の方へまわつて、紀伊国きのくにの男おの水門みなとまでおいでになりますと、お傷の痛みいたがいよいよ激しくなりました。命は、

「ああ、くやしい。かれらから負わされた手傷で死ぬるのか」と残念そうなお声でお叫びになりながら、とうとうそれなりおかくれになりました。

神倭伊波礼毘古命かんやまといわれひこのみことは、

そこからぐるりとおまわりになり、同じ紀伊きいの熊野くまのという村にお着きになりました。するとふいに大きな大ぐまが現われて、あつというまにまたすぐ消えさつてしまいました。ところが、命みこともお供の軍勢もこの大ぐまの毒氣にあたつて、たちまちぐらぐらと目がくらみ、一人のこらず、その場に氣絶してしまいました。

そうすると、そこへ熊野くまのの高倉下たかくらじという者が、一ふりの太刀たちを持つて出て来まして、伏し倒れておいでになる伊波礼毘古命いわれひこのみことに、その太刀をさしだしました。命はそれといつしよに、ふと正氣しょうきにおかえりになつて、

「おや、おれはずいぶん長寝をしたね」とおつしやりながら、

高倉下たかくらじがささげた太刀たちをお受けとりになりますと、その太刀に

備わっている威光でもつて、さっきのくまをさし向けた熊野の

山の荒くれた悪神わるがみどもは、ひとりでにばたばたと倒れて死にま

した。それといつしよに命の軍勢は、まわつた毒から一度にさ

めて、むくむくと元気よく起きあがりました。

命はふしぎにおぼしめして、高倉下たかくらじに向かつて、この貴い剣とうと つるぎ

のいわれをおたずねになりました。

高倉下たかくらじは、うやうやしく、

「実はゆうべふと夢を見ましたのでございます。その夢の中で、

天照大神と高皇産靈神のお二方あまてらすおおかみ たかみむすびのかみが、建御雷神をおめしになりま

して、葦原中国あしはらのなかつくには、今しきりに乱れ騒みだ さわいでいる。われわれの子

孫たちはそれを平らげようとして、悪神わるがみどもから苦しめられて

いる。あの国は、いちばんはじめそちが従えて来た国だから、おまえもう一度くだって平らげてまいれとおっしゃいますと、たけみかずちのかみ建御雷神は、それならば、私がまいりませんでも、ここにこの前あすこを平らげてまいりましたときの太刀たちがございますから、この太刀をくたしましょう。それには、高倉下たかくらしの倉くらのむねを突きやぶって落としましょうと、こうお答えになりました。

それからその建御雷神は、私に向かつて、おまえの倉くらのむねを突きとおしてこの刀を落とすから、あすの朝すぐに、大空の神のご子孫にさしあげよとお教えくださいました。目がさめまして、倉へまいって見ますと、おおせのとおりに、ちゃんとただいまのその太刀たちがございましたので、急いでさしあげにまいりましたのでございます」

こう言つて、わけをお話し申しました。

そのうちに、高皇産靈神は、雲の上から伊波礼毘古命いわれひこのみことに向かつて、

「大空の神のお子よ、ここから奥おくへはけっしてはいってはいけませんよ。この向こうには荒あらくれた神たちがどつさりいます。今これから私が八咫鳥やたがらすをさしくだすから、そのからすの飛んで行く方へついておいでなさい」とおさとしになりました。

まもなくおおせのとおり、そのからすがおりて来ました。命みことはそのからすがつれて行くとおりに、あとについてお進みになりますと、やがて大和やまとの吉野河よしのがわの河口かわぐちへお着きになりました。そうするとそこにやなをかけて魚さかなをとっているものがありました。た。

「おまえはだれだ」とおたずねになりますと、

「私はこの国の神で、名は贄持にえもちの子と申します」とお答え申し

ました。

それから、なお進んでおいでになりますと、今度はおしりにしつぽのついている人間が、井戸いどの中から出て来ました。そしてその井戸がぴかぴか光りました。

「おまえは何者か」とおたずねになりますと、

「私はこの国の神で井冰鹿いひかと申すものでございます」とお答えいたしました。

命みことはそれらの者を、いちいちお供ともにおつれになつて、そこから山の中を分けていらつしやいますと、またしつぽのある人にお会いになりました。この者は岩をおし分けて出て来たのでした。

「おまえはだれか」とお聞きになりますと、

「わたしはこの国の神で、名は石押分いわおしわけの子と申します。ただい

ま、大空の神のご子孫がおいになる承りまして、お供に加えていただきにありがとうございましたのでございます」と申しあげました。命は、そこから、いよいよ険しい深い山を踏み分けて、大和の宇陀^{うだ}というところへおでましになりました。

この宇陀には、兄宇迦斯^{えうかし}、弟宇迦斯^{おとうかし}というきょうだいの荒くれ者がおりました。命はその二人のところへ八咫鳥^{やたがらす}を使いにお出しになって、

「今、大空の神のご子孫がおこしになった。おまえたちはご奉公申しあげるか」とお聞かせになりました。

すると、兄の兄宇迦斯^{えうかし}はいきなりかぶら矢^やを射^いかけて、お使いのからすを追いかえしてしまいました。兄宇迦斯^{えうかし}は命がおいになるのを待ち受けて討^うつてかかろうと思ひまして、急いで兵たいを集めにかかりましたが、とうとう人数^{にんずう}がそろわなかつ

たものですから、いつそのこと、命をだまし討ちにしようと思
いまして、うわべではご奉公申しあげますと言いいこしらえて、
命をお迎え申すために、大きな御殿ごてんをたてました。そして、そ
の中に、つり天じようをしかけて、待ち受けておりました。

すると弟の弟宇迦斯おとうかしが、こつそりと命みことのところへ出て来まし
て、命を伏しふ拝みながら、

「私の兄の兄宇迦斯えうかしは、あなたさまを攻め亡せほろぼそうとたくらみま
して、兵を集めにかかりましたが、思うように集まらないもので
すから、とうとう御殿の中につり天じようをこしらえて待ち受け
ております。それで急いでおしらせ申しにあがりました」と申
しました。そこで道臣命みちおみのみこととおおくめのみこと
の二人の大将が、兄宇迦斯えうかし
を呼びよせて、

「こりや兄宇迦斯えうかし、おのれの作つた御殿にはおのれがまずはいつ

て、こちらの命みことをおもてなしする、そのもてなしのしかたを見せろ」ととなりつけながら、太刀たちのえをつかみ、矢をつがえて、無理やりにその御殿の中へ追いこみました。兄宇迦斯えうかしは追いまくられて逃げこむはずみに、自分のしかけたつり天じようがどしんと落ちて、たちまち押し殺おされてしまいました。

二人の大將は、その死がいを引き出して、ずたずたに切り刻きざんで投げ捨すてました。

命は弟宇迦斯おとうかしが献上けんじょうしたごちそうを、けらい一同におくだしになつて、お祝いの大宴会えんかいをお開きになりました。命はそのとき、

「宇陀うだしろの城にしぎなわをかけて待つていたら、しぎはかからないで大きくじらがかかり、わなはめちやめちやにこわれた。ははは、おかしや」という意味を、歌にお歌いになつて、兄宇迦斯えうかし

のはかりごとの破れたことを、喜びお笑いになりました。

それからまたその宇陀^{うだ}をおたちになつて、忍坂^{おさか}というところにお着きになりますと、そこには八十建^{やそたける}といつて、穴^{あな}の中に住んでゐる、しつぽのはえた、おおぜいの荒^{あら}くれた悪者どもが、命^{みこと}の軍勢を討^うち破ろうとして、大きな岩屋の中に待ち受けておりました。

命はごちそうをして、その悪者たちをお呼びになりました。そして前もつて、相手の一人に一人ずつ、お給仕につくものをきめておき、その一人一人に太刀^{たち}を隠^{かく}しもたせて、合^あい図^ずの歌を聞いたら一度に切つてかかれと言^いい含^{ふく}めておおきになりました。

みんなは、命が、

「さあ、今だ、うて」とお歌いになると、たちまち一度に太刀

を抜き放つて、建^{たける}どもをひとり残さず切り殺してしまいました。

しかし命は、それらの賊たちよりも、もつともつとにくいのはおあにいさまの命^{みこと}のお命を奪^{うば}つた、あの鳥見^{とみ}の長髓彦^{ながすねひこ}でした。命はかれらに対しては、ちょうどしようがを食べたあと、口がひりひりするように、いつまでも恨^{うら}みをお忘^{わす}れになることができませんでした。命は、畑のiraを、根も芽^めもいっしょに引き抜くように、かれらを根こそぎに討ち亡ぼしてしまいたい、海の中の大きな石に、きしやごがまつくろに取りついていっているように、かれらをひしひしと取りまいて、一人残さず討ち取らなければおかまいという意味を、勇ましい歌にしてお歌いになりました。そして、とうとうかれらを攻め亡ぼしておしまいになりました。

そのとき、長髓彦^{ながすねひこ}の方に、やはり大空の神のお血すじの、

にぎはやひのみこと
瀬芸速日命という神がいました。

その神が命みことのほうへまいって、

「私は大空の神の御子がおいになつたと承りまして、ご奉公に出ましてございます」と申しあげました。そして大空の神の血筋ちすじだという印しるしの宝物を、命みことに献上けんじようしました。

命はそれから兄師木えしき、弟師木おとしきというきょうだいのものご征伐せいばになりました。その戦いくさで、命の軍勢は伊那佐いなさという山の林の中に盾たてを並ならべて戦っているうちに、途中でひょうろうがなくなつて、少し弱よわりかけて来ました。命はそのとき、

「おお、私わしも飢うえ疲つかれた。このあたりのうを使う者たちよ。早くたべ物を持って助けに来い」という意味のお歌をお歌いになりました。

命みことはなおひきつづいて、そのほかさまさまの荒あらびる神どもを

なつけて従^はわせ、刃向かうものをどんどん攻め^せ亡^{ほろ}ぼして、とうとう天下をお平らげになりました。それでいよいよ大和の^{やまと}橿原宮^{かしはらのみや}で、われわれの一番最初の天皇のお位におつきになりました。^{じんむてんのう}神武天皇とはすなわち、この^{とうと}貴い伊波礼毘古命^{いわれひこのみこと}のことを申しあげるのです。

三

天皇は、はじめ日向^{ひゅうが}においでになりますときに、阿比良媛^{あひらひめ}という方をお妃^{きさき}に召^めして、多芸志耳命^{たぎしみみのみこと}と、もう一方男^{ひとかた}のお子をおもうけになっていましたが、お位におつきになってから、改めて、皇后としてお立てになる、美しい方をおもとめになりました。

すると大久米命が、
おおくめのみこと

「それには、やはり、大空の神のお血をお分けになった、伊須気依媛
いすけよりひめと申す美しい方がおいでになります。これは三輪みわの社やしろの大物主神
おおものぬしのかみが、勢夜陀多良媛せやだたらひめという女の方のおそばへ、朱塗りの矢しゆぬに化けておいでになり、媛ひめがその矢を持っておへやおはいりになりますと、矢はたちまちもとのりつばな男の神さまになって、媛のお婿むこさまにおなりになりました。伊須気依媛いすけよりひめはそのお二人の中にお生まれになったお媛さまでございます」と申しあげました。

そこで天皇は、大久米命をおつれになって、その伊須気依媛いすけよりひめ見においでになりました。すると同じ大和やまとの、高佐士野たかさじのという野で、七人の若い女の人が野遊びをしているのにお出会いになりました。するとちょうど伊須気依媛いすけよりひめがその七人の中にいらつ

しやいました。

大久米命はそれを見つけて、天皇に、このなかのどの方をおもらいになりますかということを、歌に歌ってお聞き申しますと、天皇はいちばん前にいる方を伊須いすけ氣依媛よりひめだとすぐにおさとりになりました、

「あのいちばん前にいる人をもらおう」と、やはり歌でお答えになりました。大久米命は、その方のおそばへ行つて、天皇のおおせをお伝えしようとしますと、媛は、大久米命が大きな目をぎろぎろさせながら来たので、変だとおぼしめして、

あめ、つつ、

ちどり、ましとと、

など裂さける利目とめ。

とお歌いになりました。それは、

「あめという鳥、つつ一という鳥、ましとという鳥やちどりの目のように、どうしてあんな大きな、鋭い目を光らせているのであろう」という意味でした。

大久米命は、すぐに、

「それはあなたを見つげ出そうとして、さがしていた目でございます」と歌いました。

媛ひめのおうちは、狹井川さいがわという川のそばにありました。その

川原かわらには、やまゆりがどつき咲いていました。天皇は、媛のお

うちへいらして、ひと晩とまってお帰りになりました。媛は

まもなく宮中におあがりになって、貴とうとい皇后におなりになりま

した。お二人の中には、日子八井命ひこやいのみこと、神八井耳命かみやいみみのみこと、神沼河耳命かぬかのみこと

と申す三人の男のお子がお生まれになりました。

天皇は、後におん年百三十七でおかくれになりました。おな
きがらは畝火山うねびやまにお葬りほうむ申しあげました。

するとまもなく、さきに日向ひゅうがでお生まれになった多芸志耳命たぎしみみのみこと
が、お腹はらちがいの弟さまの日子八井命ひこやいのみことたち三人をお殺し申して、
自分ひとりがかつてなことをしようとお企てくわだになりました。

お母上の皇后はそのはかりごとをお見ぬきになって、

うねびやま

「畝火山に昼はただの雲らしく、静かに雲がかかっているけれ
ど、夕方になれば荒れあが来て、ひどい風が吹き出すらしい。木
の葉がそのさきぶれのように、ざわざわさわいでいる」という
意味の歌をお歌いになり、多芸志耳命たぎしみみのみことが、いまに、おまえたち
を殺しにかかるぞということをし、それとなくおきとしになりました。
した。

三人のお子たちは、それを聞いてびつくりなさいまして、それでは、こつちから先に命みことを殺してしまおうとご相談なさいました。

そのときいちばん下の神沼河耳命かんぬかわみみのみことは、中のおあにいさまの神八井耳命かんやいみみのみことに向かつて、

「では、あなた、命みことのところへ押おしいつて、お殺しなさい」とおつしやいました。

それで神八井耳命かんやいみみのみことは刀かたなを持つてお出かけになりましたが、いざとなるとぶるぶるふるえ出して、どうしても手出しをなさることができませんでした。そこで弟さまの神沼河耳命かんぬかわみみのみことがその刀をとつてお進みになり、ひといきに命を殺しておしまいになりました。

神八井耳命かんやいみみのみことはあとで弟さまに向かつて、

「私はあのかたきを殺せなかつたけれど、そなたはみごとに殺してしまった。だから、私は兄だけれど、人のかみに立つことはできない。どうぞそなたが天皇の位について天下を治めてくれ、私は神々をまつる役目をひき受けて、そなたに奉公をしよう」とおっしゃいました。それで、弟の命はお二人のおあにいさまをおいてお位におつきになり、大和の葛城宮にお移りやまとかつらぎのみやになって、天下をお治めになりました。すなわち第二代、綏靖天皇すいぜいてんのうさまでいらつしやいます。

天皇はご短命で、おん年四十五でお隠れかくになりました。

赤い盾、黒い盾

一

綏靖天皇から御七代をへだてて、第十代目に崇神天皇がお位
におつきになりました。

天皇にはお子さまが十二人おありになりました。その中で皇
女、豊鉏入媛が、はじめて伊勢の天照大神のお社に仕えて、そ
のお祭りをお司りになりました。また、皇子倭日子命がおなく
なりになったときに、人がきといつて、お墓のまわりへ人を生
きながら埋めてお供をさせるならわしがはじまりました。

この天皇の御代には、はやり病がひどくはびこつて、人民という人民はほとんど死に絶えそうになりました。

天皇は非常にお嘆きになつて、どうしたらよいか、神のお告げをいただこうとおぼしめして、御身を潔めて、慎んでお寢床の上にすわつておいでになりました。そうするとその夜のお夢に、三輪の社の大物主神が現われていらしつて、

「こんどのやく病はこのわしがはやらせたのである。これをすつかり亡ぼしたいと思うならば、大多根子というものにわしの社を祀らせよ」とお告げになりました。天皇はすぐに四方へはやうまのお使いをお出しになつて、そういう名まえの人をおさがしになりますと、一人の使いが、河内の美努村というところでその人を見つけてつれてまいりました。

天皇はさつそくご前にお召しになつて、

「そちはだれの子か」とおたずねになりました。

すると大多根子は、

おおものぬしのかみ

ちすじ

「私は大物主神のお血筋をひいた、建甕槌命と申します者の子

でございます」とお答えいたしました。

それというわけは、大多根子から五代もまえの世に、陶都耳命

おおたねこ

だい

すえつみみのみこと

という人の娘で活玉依媛むすめというたいそう美しい人がおりました。

よりひめ

この依媛があるとき、一人の若い人をお婿むこさまにしました。

その人は、顔かたちから、いずまいの美しいけだかいことといつたら、世の中にくらべるものもないくらい、りっぱな、りりしい人でした。

媛ひめはまもなく子供が生まれそうになりました。しかしそのお

婿さんは、はじめから、ただ夜だけ媛のそばにいるきりで、あけがたになると、いつのまにかどこかへ行ってしまうて、けつ

してだれにも顔を見せませんし、お嫁さんの媛にさえ、どこのだれかということすらも、うちあけませんでした。

媛のおとうさまとおかあさまとは、どうかして、そのお婿さんを、どこの何びとか突きとめたいと思ひまして、ある日、媛ひめに向かつて、

「今夜は、おへやへ赤土をまいておおき、それからあさ糸のまりを針はりにおして用意しておいて、お婿むこさんが出て来たら、そつと着物のすそにその針をさしておおき」と言ひました。

媛はその晩、言われたとおりに、お婿さんの着物のすそへあさ糸をつけた針をつきさしておきました。

あくる朝になつて見ますと、針についているあさ糸は、戸のかぎ穴あなから外へ伝わつていました。そして糸のたまは、すつかり繰りほどけて、おへやの中には、わずか三まわり輪わに巻けた

長さしか残つておりませんでした。

それで、ともかくお婿さんは、戸のかぎ穴から出はいりして
いたことがわかりました。媛はその糸の伝わっている方へずん
ずん行つて見ますと、糸はしまいに、三輪山みわやまのお社やしろにはいつて
止まっていました。それで、はじめて、お婿さんは大物主神で
いらしたことがわかりました。

おたねこ

大多根子はこのお二人の間に生まれた子の四代目の孫でした。

天皇は、さつそくこの大多根子を三輪の社の神主かみぬしにして、大
物主神のお祭りをおさせになりました。それといつしよに、お
供えものを入れるかわらけをどつさり作らせて、大空の神々や
下界の多くの神々をおまつりになりました。その中のある神さ
まには、とくに赤色の盾たてや黒塗くろぬりの盾をおあげになりました。

そのほか、山の神さまや川の瀬せの神さまにいたるまで、いちい

ちもれなくお供えものをおあげになつて、ていちょうにお祭りをなさいました。そのために、やく病はやがてすっかりとまつて、天下はやつと安らかになりました。

二

天皇はついで大毘古命おおひこのみことを北陸道ほくろくどうへ、その子の建沼河別命たけぬかわわけのみことをとうさんどう東山道へ、そのほか強い人を方々へお遣しつかわになつて、ご命令に従わない、多くの悪者どもをぞ征伐になりました。

大毘古命おおひこのみことはおおせをかしこまつて出て行きましたが、途中で、やましろ山城やましろの幣羅坂へらざかというところへさしかかりますと、その坂の上に腰ぬこしのばかりを身につけた小娘こむすめが立っていて、

これこれ申し天子さま、

あなたをお殺し申そうと、

前の戸に、

裏の戸に、

行ったり来たり、

すきを狙ねらっている者が、

そこにいるとも知らないで、

これこれ申し天子さま。

と、こんなことを歌いました。

おおひこのみこと

大毘古命は変だと思ひまして、わざわざうまをひきかえして、

「今言つたのはなんのことだ」とたずねました。

すると小娘こむすめは、

「私はなんにも言いはいたしません。ただ歌を歌っただけでございます」と答えるなり、もうどこへ行つたのか、ふいに姿が見えなくなつてしまいました。

おおひこのみこと

大毘古命は、その歌の言葉がしきりに氣になつてならないも

ことば

のですから、とうとうそこからひきかえしてきて、天皇にそのことを申しあげました。すると天皇は、

「それは、きつと、山城にいる、私の腹ちがいの兄、建波邇安王

やましろ

わし

はら

たけはにやすのみこ

が、悪だくみをしている知らせに相違あるまい。そなたはこれから軍勢をひきつれて、すぐに討ちとりに行つてくれ」とおつしやつて、彦国夫玖命という方を添えて、いつしよにお遣しになりました。

ひこくにぶくのみこと

そ

つかわ

二人は、神々のお祭りをして、勝利を祈つて出かけました。

やましろ

きつがわ

たけはにやすのみこ

そして、山城の木津川まで行きますと、建波邇安王は案のじよ

う、天皇におそむき申して、兵を集めて待ち受けていらつしやいました。両方の軍勢は川を挟はさんで向かい合いに陣取じんどりました。彦国夫玖命は、敵に向かつて、

「おお、そちらのやつ、まずかわきりに一矢射やいてみよ」とどなりました。敵の大將の建波邇安王は、すぐたけはにやすのみこにそれに応じて、大きな矢をひゅうツと射放しましたが、その矢はだれにもあたらないで、わきへそれてしまいました。それでこんどはこちらから国夫玖命が射かけますと、その矢はねらいたがわず建波邇安王たけはにやすのみこを刺さし殺してしまいました。

敵の軍勢は、王が倒みこれておしまいになると、たちまち総くくずれになって、どんどん逃にげだしてしまいました。国夫玖命の兵はどんどんそれを追っかけて、河内かわちの国のある川の渡しのところまで追いつめて行きました。

すると賊兵のあるものは、苦しまぎれにうんこが出て下ばかりを汚よごしました。

こちらの軍勢はそいつらの逃げ道をくいとめて、かたつぱしからどんどん切り殺してしまいました。そのたいそうな死がい
が川に浮かんで、ちょうど、うのように流れくだつて行きまし
た。

おおひこのみこと

大毘古命は天皇にそのしだいをすっかり申しあげて、改めて

ほくろくどう

北陸道へ出発しました。

おおひこのみこと

そのうちに大毘古命の親子をはじめ、そのほか方々へお遣つかわし

になった人々が、みんなおおせつかった地方を平らげて帰りま
した。そんなわけで、もういよいよどこにも天皇におさからい
する者がなくなつて、天下は平らかに治まり、人民もどんど
裕福ゆうふくになりました。それで天皇ははじめて人民たちから、男か

ら弓端ゆはずの調みつきといつて、弓矢でとつた獲物えものの中のいくぶんを、女
からは手末たなすえの調みつきといつて、紡つむいだり、織おつたりして得たものの
いくぶんを、それぞれ貢物みつぎものとしておめしになりました。

天皇はまた、人民のために方々へ耕作用の池をお作りになり
ました。天皇の高いお徳は、後の代よからも、いついつまでも永なが
くおほめ申しあげました。

おしの皇子おうじ

一

崇神天皇すじんてんのうのおあとには、お子さまの垂仁天皇すいにんてんのうがお位をお継つぎぎになりました。天皇は、沙本毘古王さほひこのみこという方のお妹さまで沙本媛さほひめとおつしやる方を皇后にお召めしになって、大和やまとの玉垣たまがきの宮にお移りになりました。

その沙本毘古王さほひこのみこが、あるとき皇后に向かつて、

「あなたは夫と兄とはどちらがかわいいか」と聞きました。皇后は、

「それはおあにいさまのほうがかわゆうございます」とお答えになりました。すると王は、用意していた鋭い短刀をそつと皇后にわたして、

「もしおまえが、ほんとうに私をかわいいと思うなら、どうぞこの刀で、天皇がおよつていらつしやるところを刺し殺しておくれ。そして二人でいつまでも天下を治めようではないか」と言つて、無理やりに皇后を説き伏せてしまいました。

天皇は二人がそんな怖ろしいたくらみをしているとはご存じないものですから、ある晩、なんのお気もなく、皇后のおひざをまくらにしてお眠りになりました。

皇后はこのときだと思ひになつて、いきなり短刀を抜き放して、天皇のお首をま下にねらつて、三度までお振りかざしになりましたが、いよいよとなると、さすがにおいたわしくて、ど

うしてもお手をおくだしになることができませんでした。そしてとうとう悲しさに堪えきれないで、おんおんお泣きだしになりました。

その涙が天皇の顔にかかつて流れ落ちました。天皇はそれといっしょに、ひよいとお目ざめになつて、

「おれは今きたいな夢を見た。沙本の村の方からにわか到大雨が降つて来て、おれの顔にぬれかかった。それから、にしき色の小さなへびがおれの首へ巻きついた。いったいこんな夢はなんの兆であるう」と、皇后に向かつておたずねになりました。皇后はそうおっしゃられると、ぎくりとなすつて、これはとても隠しきれないとお思ひになつたので、おあにいさまとお二人のおそれ多いくらみをすっかり白状しておしまいになりました。

天皇はそれをお聞きになると、びつくりなすつて、

「いやそれは危くばかな目を見るところであつた」とおつしやりながら、すぐに軍勢をお集めになつて、沙本毘古さほひこを討ちとりにおつかわしになりました。

すると沙本毘古さほひこのほうでは、いねたばをぐるりと積みあげて、それでとりでをこしらえて、ちゃんと待ち受けておりました。天皇の軍勢はそれをめがけて撃つてかかりました。

皇后はそうになると、こんどはまたおあにいさまのことがおいたわしくおなりになつて、じつとしておいでになることができなくなりました。それで、とうとうこつそり裏口うらぐちのご門から抜け出して、沙本毘古さほひこのとりでの中へかけつけておしまいになりました。

皇后はそのときちょうど、お腹なかにお子さまをお持ちになつて

いらつしやいました。

天皇は、もはや三年もごちよう愛になつていた皇后でおありになるうえに、たまたまお身持ちでいらつしやるものですから、いつそうおかawaiiそうにおぼしめして、どうか皇后のお身におけががないようにと、それから、とりでもただ遠まきにして、むやみに攻め落とさないように、とくにご命令をおくだしになりました。

二

そんなことで、かれこれ戦いくさも長びくうちに、皇后はおあにいさまのとりでの中で皇子をお生みおとしになりました。

皇后はそのお子さまをとりでのそとへ出させて、天皇の軍勢

の者にお見せになり、

「この御子みこをあなたのお子さまとおぼしめしてくださるならば、どうぞひきとつてご養育なすつてくださいますし」と、天皇にお伝えさせになりました。

天皇はそのことをお聞きになりますと、ついでにどうかして皇后をもいつしよに取りかえたいとお思ひになりました。それは、兄の沙本さほ毘古ひこに対しては、刻きざみ殺してもたらないくらい、お憤いきどおりになつておりますが、皇后のことだけは、どこまでもおいたわしくおぼしめしていらつしやるからでした。

それで味方の兵士の中で、いちばん力の強い、そしていちばんすばしつこい者をいく人かお選えびになつて、

「そちたちはあの皇子を受け取るときに、必ず母の后うきをもひきさらつてかえれ。髪でも手でも、つかまりしだいに取りつかま

えて、無理にもつれ出して来い」と言いつけになりました。

しかし皇后のほうでも、天皇がきつとそんなお企くわだてをなさるに

違いないと、ちゃんとお感ぐしづきになつていましたので、そのと

きの用意に、前もつてお髪ぐしをすつかりおそり落としになつて、

そのお毛をそのままそつとお被かぶりになり、それからお腕うでさき先のお

たまかざ

玉飾りも、わざと、つなぎの緒ひもを腐くさらして、お腕みえへ三重にお巻き

つけになり、お召物めしものもわざわざ酒で腐らしたのをおめしになつ

て、それともなげに皇子を抱かかえて、とりでの外へお出ましにな

りました。

待ちかまえていた勇士たちは、そのお子さまをお受け取り申すといつしよに、皇后をも奪い取ろうとして、すばやく飛びかかつてお髪ぐしをひつつかみますと、髪はたちまちすらりとぬげ落ちてしまいました。

「おや、しまった」と、こんどはお手をつかみますと、そのお手の玉飾りの緒ひももぷつりと切れたので、難なんなくお手をすり抜ぬいてお逃にげになりました。こちらはまたあわてて追いきりながら、ぐいとお召物をつかまえました。すると、それもちまちまぼろりとちぎれてしまいました。その間に皇后は、さつと中へ逃げこんでおしまいになりました。

勇士どもはしかたなしに、皇子一人をお抱かかえ申して、しおしおと帰ってまいりました。

天皇はそれらの者たちから、
「お髪ぐしをつかめばお髪がはなれ、玉の緒ひももお召物めしものも、みんなぶすぶす切れて、とうとうおとりにがし申しました」とお聞きになりますと、それはそれはたいそうお悔くやみになりました。

天皇はそのために、宮中の玉飾りの細工人さいいくにんたちまでお憎にくみに

なつて、それらの人々が知行ちぎようにいたでいた土地を、いきなり残らず取りあげておしまいになりました。

それから改めて皇后の方へお使いをお出しになつて、

「すべて子供の名は母がつけるものときまつているが、あの皇子は、なんとという名前にしようか」とお聞きかせになりました。

皇后はそれに答えて、

「あの御子みこは、ちようどとりでが火をかけられて焼けるさいちゆうに、その火の中でお生まれになつたのでございますから、ほむちわけのみこ本牟智別王とお呼び申したらよろしゆうございましょう」とおつしやいました。そのほむちというのは火のことでした。

天皇はそのつぎには、

「あの子には母がないが、これからどうして育てたらいいか」とおたずねになりますと、

「ではうばをお召し抱えになり、お湯をおつかわせ申す女たちをもおおきになつて、それらの者にお任せになればよろしゅうございます」とお答えになりました。

天皇は最後に、

「そちがいなくなつては、おれの世話はだれがするのだ」とお聞きになりました。すると皇后は、

「それには、丹波の道能宇斯王の子に、兄媛、弟媛というきょうだいの娘がございます。これならば家柄も正しい女たちでございますから、どうかその二人をお召しなさいまし」とおっしゃいました。

天皇はもういよいよしかたなしに、一氣にとりでを攻め落として、沙本毘古を殺させておしまいになりました。

皇后も、それといつしよに、えんえんと燃えあがる火の中に

飛びこんでおしまいになりました。

三

お母上のない本牟智別王は、ほむちわけのみこそれでもおしあわせに、ずんずんじようぶにご成長になりました。

天皇はこの皇子のために、わざわざ尾張の相津おわり あいずというところにある、二またになった大きなすぎの木をお切らせになって、それをそのままくつて二またの丸木船まるぎふねをお作らせになりました。そして、はるばると大和まで運ばせて、市師いちしの池という池にお浮かべになり、その中へごいっしょにお乗りになって、皇子をお遊ばせになりました。

しかしこの皇子は、後にすっかりご成人せいじんになって、長いお下ひ

げがお胸先むねさきにたれかかるほどにおなりになつても、お口がちつともおきけになりませんでした。

ところがあるとき、ここの鳥が、空を鳴いて飛んで行くのを覧らんになつて、お生まれになつてからはじめて、

「あわわ、あわわ」とおおせになりました。

天皇は、さつそく、山辺大鷹やまべのおおたかという者に、

「あの鳥をとつて来てみよ」とおいいつけになりました。

大鷹おおたかはかしこまつて、その鳥のあとをどこまでも追つかけて、紀伊国きのくに、播磨国はりまのくにへとくだつて行き、そこから因幡いなば、丹波たんば、但馬たじま

をかけまわつた後、こんどは東の方へまわつて、近江おうみから美濃みの、

尾張おわりをかけぬけて信濃しなのにはいり、とうとう越後えちごのあたりまでつ

けて行きました。そして、やつとのことで和那美わなみという港でわ

な網あみを張つて、ようやく、そのここの鳥をつかまえました。そ

して大急ぎで都へ歸つて、天皇におさし出し申しました。

天皇は、その鳥を皇子にお見せになつたら、おものがおつしやれるようになりになりはしないかとおぼしめして、わざわざとりにおつかわしになつたのでした。しかし皇子は、やはりそのまゝ一言もおもものをおつしやいませんでした。

天皇はそのために、いつもどんなにお心をおいためになつていたかしれませんでした。

そのうちに、ある晩、ふと夢の中で、

「私のお社わし やしろを天皇のお宮のとおりにりっぱに作り直して下さるなら王は必ず口がきけるようにならなみこい」と、こういうお告げをお聞きになりました。

天皇は、どの神さまのお告げであらうかと急いで占いの役人うらなに言いつけて占わせてごらんになりますと、それは出雲の大神いづも おおかみ

のお告げで、皇子はその神のおたたりでおしにお生まれになったのだとわかりました。

それで天皇は、すぐに皇子を出雲へおまいりにお出しになることになさいました。

それにはだれをつけてやったらよかろうと、また占わせてごらんになりますと、けたつのみこ曙立王という方が占いにおあたりになりました。

天皇は、そのけたつのみこ曙立王にお言いつけになつて、なお念のために、うかがいのお祈りを立てさせてごらんになりました。

みこ王はおおせによつて、さぎの巢すの池のそばへ行つて、

「あの夢のお告げのとおり、出雲の大神をおが拝んでおしるしがあるならば、その証しょうこ拠こにこの池のさぎどもを死なせて見せてくださるように」とお祈りをしますと、そのまわりの木の上にとまつ

ていた池じゅうのさがが、いつせいにばたばたと池に落ちて死んでしまいました。そこでこんどは祈りを返して、

「あのさががことごとく生きかえりますように」と言いますと、いったん死んだそれらのさがが、またたちまちもとのとおりに生きかえりました。そのつぎには古櫟ふるがしの岡おかという岡の上に茂しげつている、葉の大きなかしの木も、曙立王けたつのみこの祈りによつて、同じように枯かれたりまた生きかえつたりしました。

そんなわけで、お夢のこともまったく出雲の大神おおかみのお告げだということがいよいよたしかになりました。

天皇はすぐに曙立王けたつのみこと兎上王うがみのみことの二人を本牟智別王ほんむちわけのみこにつけて、出雲へおつかわしになりました。

そのご出立しゅったつのときにも、どちらの道を選べばよいかとお占うらなわせになりました。すると、奈良街道ならかいどうからでは、途中でいざりや

めくらに会うし、大阪口から行つても、やはりめくらやいざりに
 会うので、どちらとも旅立ちには不吉である、脇道の紀井街道
 をとおつて行けば、必ずさい先がよいと、こう占いに出ました。
 一同はそのとおりにして立つておいでになりました。

天皇は皇子のお名前を永く後の世までお伝えになるために、
 その途中のいたるところに、本牟智部という部族をおこしらえ
 させになりました。

皇子は、いよいよ出雲にお着きになつて、大神のお社におま
 いりになりました。

そしてまた都へお帰りになろうとなさいますと、その出雲の
 国をおあずかりしている、国造という、いちばん上の役人が、
 肥の河の中へ仮のお宮をつくり、それへ、細木を編んだ橋を渡
 して、その宮で、皇子を、ごちそうしておもてなし申しあげま

した。

そのとき川下の方には、皇子のお目を慰めるために、青葉で、作りものの山がこしらえてありました。

皇子はそれをご覧らんになつて、

「あの川下に、山のように見えている青葉は、あれはほんとうの山ではないだろう。神主かんぬしたちが大國主神のお祭りをする場所でもあるのか」と突然こうお聞きになりました。

お供の曙立王けたつのみこや兎上王うがみのみこたちは、皇子がふいにおものをおつしやれるようになったので、びっくりして喜んで、すぐに早うまのお使いを立てて、そのことを天皇にお知らせ申しました。

皇子はそれからほかのお宮へお移りになつて、肥長媛ひながひめという人をお妃おきにおもらいになりました。

ところがあとでご覧らんになりますと、それはへびが女になつて

出て来たのだとわかりました。皇子はびつくりなすつて、みんなとごいっしょに船に乗つてお逃にげになりました。

するとへびの媛ひめは、皇子のおあとを慕したつて、急いで別の船をしたてて、海の上をきらきらと照らしながら、どんどん追つかけて来ました。皇子はいよいよ気味きみが悪くおなりになつて、あわてて船をひきあげさせて、それをひっぱらせて山の間をお越こえになり、またその船をおろして海をお渡わたりになつたりなすつて、やつと無事に都みやこへ逃げておかえりになりました。

曙立王けいたつのみこは天皇におめみえをして、

「おおせのとおりに大神をお拝おがみになりますと、まもなく、急にお口がおきけになるようになりましたので、一同でお供をして帰つてまいりました」と申しあげました。

天皇は、それはそれは言うに言われないほどお喜びになります。

した。そしてすぐに兎上王うがみのみこをまた再び出雲へおくだしになって、大神のお社やしろをりっぱにご造営ぞうえいになりました。

四

天皇はそれですつかりご安心になったので、こんどはご不由がちな、おそばのご用をおいいつけになるために、かねて皇后がおつしやつてお置きになったように、丹波たんばから兄媛えひめたちのきょうだい四人をおめしよせになりました。

しかし下の二人はたいそうみにくい子でしたので、天皇は兄媛えひめとそのつぎの弟媛おとひめとだけをお抱かかえになって、あとの二人はそのまま家へかえしておしまいになりました。

すると、いちばん下の円野媛まどのひめは、四人がいつしよにおめしに

会つて伺いながら、二人だけは顔が汚きたないためにご奉公ができないでかえされたと言え、近所の村々への聞こえも恥はづかしく、とても生きてはいられないと言つて、途中の山城やましろの乙訓おとくにというところまでかえりますと、あわれにも、その深いふちに身を投げて死んでしまいました。

それから天皇はある年、多遲摩毛理たじまもりという者に、常世国とこよのくにへ行つて、香かおりの高いたちばなの実みを取つて来いとおおせつけになりました。

多遲摩毛理たじまもりはかしこまつて、長い年月としつきの間いっしょうけんめいに苦心して、はてしもない大海おおうみの向こうの、遠い遠いその国へやつとたどり着きました。そしておおせのたちばなの実の、枝葉えだはのままついたのを八つ、実ばかりのを八つもぎ取つて、また長い間かかつて、ようよう都へ歸つて来ました。しかし天皇

はその前に、もうとつくにおかくれになっていました。

多遲摩毛理たじまもりはそのことを承ると、それはそれはがっかりして、

葉つきの実を四つと、葉のないのを四つとを、天皇のおそばにお仕え申していた兄媛えひめにさしあげたうえ、あとの四つずつを天皇のお墓にお供え申しました。そして泣き泣き大声を張りあげて、

「ご覧らんくださいまし。このとおりおおせの実を取ってまいりました。どうぞご覧らんくださいまし」とそのたちばなを両手にさしあげて、繰くりかえし繰くりかえし、いつまでもそのお墓の前で叫び続けて、とうとうそれなり叫び死にに死んでしまいました。

白い鳥

一

第十二代景行天皇^{けいこうてんのう}は、お身の丈^{たけ}が一丈二寸^{じょうすん}、おひざから下^{しやく}が四尺一寸^{しやく}もおありになるほどの、偉大なお体格でいらつしやいました。それからお子さまも、すべてで八十人もお生まれになりました。

天皇はその中で、後におあとをお継^つぎになつた若帶日子命^{わかたらしひこのみこと}と、
小碓命^{おうすのみこと}とおつしやる皇子^{おうじ}と、ほかにもう一方^{ひとかた}とだけをおそばに
お止めになり、あとの七十七人の方々^{かたがた}をことごとく、地方地方

く^にのみやつこ^わけ
の国造、別、稲置^{いなぎ}、^あがたぬし^し
県主という、それぞれの役におつけになり
ました。

あるとき天皇は、美濃^{みの}の、神大根王^{かんおおねのみこ}という方の娘^{むすめ}で、兄媛弟媛^{えひめおとひめ}
という姉妹^{きょうだい}が、二人ともたいそうきりようがよい子だという評
判をお聞きになつて、それをじつさいにお確^{たし}かめになつたうえ、
さつそく御殿^{ごてん}にお召使^{めしつか}いになるおつもりで、皇子の大碓命^{おおおうすのみこと}にお
言いつけになつて、二人を召^めし^めのぼせにお遣^{つか}わしになりました。

すると、大碓命^{おおおうすのみこと}は、その二人の者をご自分のお召使^{めしつか}いに取つ
ておしまいになり、別に二人の姉妹^{きょうだい}の女を^{さが}探^さし出して、それを
兄媛^{えひめ}、弟媛^{おとひめ}だといつわつて、天皇にお目通りをおさせになりま
した。

天皇はそれがほかの女であるということをし、ちゃんとお見抜き
になりました。しかしうわべでは、あくまでだまされていらつ

しやるようにお見せかけになつて、二人をそのまま御殿^{ごてん}にお置きになりました。その代わりお手近^{てぢか}のご用は、わぎとほかの者にお言いつけになつて、それとなく二人をおこらしめになりました。

おおすのみこと

大碓命はそんな悪いことをなすつてからは、天皇の御前^{ごぜん}へお出ましになるのをうしろぐらくおぼしめして、さつぱりお顔をお見せになりませんでした。

おうじ おおすのみこと

天皇はある日、弟さまの皇子の小碓命に向かつて、

「そちが兄は、どういうわけで、このせつ朝夕の食事のときにも出て来ないのであらう。おまえ行つて、よく申し聞かせよ」とおつしやいました。

おおすのみこと

しかし、それから五日もたつても、大碓命は、やつぱりそのままお顔出しをなさらないものですから、天皇は小碓命を召し^め

て、

「兄はどうして、いつまでも食事しよくじに出て来ないのか。おまえはまだ言わないのではないか」とお聞きになりました。

「いいえ、申し聞かせました」と命みことはお答えになりました。

「では、どういうふうに話したのか」

「ただ朝早く、おあにいさまがかわやにはいりますところを待ち受けて、つかみくじき、手足をむしりとつて、死体をこもにくるんでうちやりました」と、命みことはまるでむぞうさにこう言つて、すましていらつしやいました。

天皇はそれ以来、小碓命おうすのみことのきつい荒いあらご気性きしやうを怖ろしくおぼしめして、どうかしてそれとなく命をおそおそばから遠ざけようとお考えになりました。それでまもなく命を召めして、

「実は西の方に熊襲建くまそたけるという者のきようだいがいる。二人とも

私の命令に従わない無礼なやつである。そちはこれから行つて、かれらを打ちとつてまいれ」とおおせになりました。それで命は、急いで伊勢いせにおくだりになつて、大神宮だいじんぐうにお仕えになつてゐる、おんおば上の倭媛やまとひめにお別れをなさいました。

するとおば上からは、ご料りようのお上着うわぎと、おはかま着ぎと、懷劍かいけんとを、お別れのお印しるしにおくだしになりました。

命はそれからすぐに、今日ひゆうが日向おおすみ、大隅さつま、薩摩の地方へ向かつておくだりになりました。そのとき命は、まだお髪ぐしをお額ひたいにお結ゆいになつてゐる、ただほんの一少年でいらつしやいました。

二

命は、その土地にお着きになり、熊襲建くまとけるのうちへ近づいて、

ようすをおうかがいになりますと、建^{たける}らは、うちのまわりへ軍勢をぐるりと三重^{じゅう}に立て囲^{かこ}わせて、その中に住まっておりました。そして、たまたまちようどその家ができあがつたばかりで、近々にそのお祝いの宴会^{えんかい}をするというので、大さわぎでしたくをしているところでした。

みこと

命はそのあたりをぶらぶら歩きまわって、その宴会^{えんかい}の日が来るのを待ちかまえていらつしやいました。そして、いよいよその日になりますと、今までお結^ゆいになつていたお髪^{ぐし}を、少女のようにすきさげになさり、おんおば上からおさずかりになつたご衣裳^{いしやう}を召^めして、すつかり小女^{こおんな}の姿^{すがた}におなりになりました。そして、ほかの女たちの中にまじって、建^{たける}どもの宴会^{えんかい}のへやへはいつておいでになりました。

くまそたける

すると熊襲建^{くまそたける}きようだいは、命をほんとうの女だとばかり思

いこんでしましまして、その姿のきれいなのがたいそう氣にいつたので、とくに自分たち二人の間にすわらせて、大喜びで飲みさわぎました。

命は、みんながすっかり興きように入つたところを見はからつて、そつふところと懐から劍をお取り出しになつたと思ひますと、いきなり片手で兄の建たけるのえり首をつかんで、胸むねのところをひと突つきに突き通しておしまひになりました。

弟の建たけるはそれを見ると、あわててへやの外へ逃げ出そうとしました。

命は、それをもすかさず、階段かいだんの下に追いつめて、手早く背中せなかをひつつかみ、ずぶりとおしりをお突き刺さしになりました。

建たけるはそれなりじたばたしようともしないで、

「どうぞその刀をしばらく動かさないでくださいまし。一言申ひつこと

しあげたいことがございます」と、言いました。それで命は刀をお刺しさになつたなり、しばらく押し伏おせたままにしていらしやいますと、建は、たける

「いつたいあなたはどなたでございます」と聞きました。

「おれは、大和やまとの日代ひしろの宮みやに天下を治めておいでになる、大帯日子天皇おおたらしひこてんのみかどの皇子おうじ、名は倭童男やまとおぐな王のみこという者だ。なんじら二人とも天皇のおせに従わず、無礼なふるまいばかりしているので、勅命ちよくめいによつて、ちゆう伐ばつにまいつたのだ」と、命みことはおおしくお名乗りになりました。

たける建はそれを聞いて、

「なるほど、そういうお方に相違さぐわいございますまい。この西の国じゆうには、私ども二人より強い者は一人もおりません。それにひきかえ大和やまとには、われわれにもまして、すばらしいお方が

いられたものだ。おそれながら私がお名まえをさしあげます。これからあなたのお名まえは倭建命やまとたけるのみこととお呼び申したい」と言いました。

命は建たけるがそう言いおわるといつしよに、その荒あらくれ者を、まるで熟じゆくしたまくわうりを切るように、ずぶずぶと切り屠ほふつておしまいになりました。

それ以来、だれもかれも命のご武勇をおほめ申して、お名まえを倭建命やまとたけるのみことと申しあげるようになりました。

命は、それから大和やまとへおひきかえしになる途中で、いろんな山の神や川の神や、穴戸あなどの神と称とえて、方々の險阻けんそなところにててもっている悪神わるがみどもを、片かたはしからお従したがえになった後、出雲いずもの国へおまわりになつて、そのあたりで幅はばをきかせている、出雲建いずもたけるという悪者をお退治たいじになりました。

みこと

命はまずその建たけるの家へたずねておいでになつて、その悪者と

ごこうさいをお結びになりました。そして、そのあとで、こつそりといちいという木を刀のようにお削けずりになり、それをりっぱな太刀たちのように飾かざりをつけておつるしになつて、建たけるをさそい出して、二人で肥ひの河かわの水を浴びにいらつしやいました。そして、いいかげんなころを見はからつて、ご自分の方が先におあがりになり、ごじょうだんのように建たけるの太刀をお身におつけになりながら、

「どうだ、二人でこの刀のとりかえつこをしようか」とおつしやいました。建たけるはあとからのそのそあがつて来て、

「よろしい取りかえよう」と言いながら、うまくだまされて命のにせの刀をつるしました。命は、

「さあ、ひとつ二人で試合をしよう」とお言いになりました。そ

して二人とも刀を抜き放すだんになりますと、建たけるのはにせの刀ですから、いくら力を入れても抜けようはずがありません。命は建たけるがそれでまごまごしているうちに、すばやくほんものの刀を引き抜いて、たちまちその悪者を切り殺しておしまいになりました。そして、そのあとで、建たけるが抜けない刀を抜こうとして、まごまごとあわてたおかしさを、歌につくってお笑いわらになりました。

三

命みことはこんなにして、お道筋みちすじの賊ぞくどもをすつかり平たいらげて、大和やまとへおかえりになり、天皇にすべてをそつじよう奏上なさいました。すると天皇は、またすぐにひき続いて、命に、東の方の十二か国

の悪い神々や、おおせに従わない悪者どもを説き従えてまいれとおおせになつて、ひいらぎの矛ほこをお授けさずになり、御鉏友耳建日子みすきともみみたけひこという者をおつけ添えそになりました。

命はお言いつけを奉じて、またすぐにおでかけになりました。そして途中で伊勢いせのお宮におまいりになつて、おんおば上の倭媛やまとひめに再度さいどのお別れをなさいました。そのとき命はおんおば上に向かつておつしやいました。

「天皇は私を早くなくならせようとでもおぼしめすのでしよう。でも、こないだまで西の方の賊を討うちにまいつておりまして、やつと、たつた今かえつたと思いますと、またすぐに、こんどは東の方の悪者どもを討ちとりにお出しになるのはどういうわけでございます。それもほとんど軍勢ぐんぜいというほどのものもくださらないのです。こんなことからおして考えてみますと、ど

うしても私を早く死なせようというお心持としか思われません」
命はこうおっしゃって涙なみだながらにお立ちになろうとしました。

おんおば上は、命のそのお恨みうらをおやさしくおなだめになつたうえ、もと神代かみよのときに、須佐之男命すさのおのみことが大じやの尾の中からお拾いになった、あの貴いお宝物たからものの御剣みつるぎと、ほかに袋ふくろを一つお授けになり、まん一、急なことが起こつたら、この袋ふくろの口をお解ときなさい、とおおせになりました。

命はそれから尾張おわりへおはいりになつて、その国造くにのみやつこの娘の美夜媛みやすひめのおうちにおとまりになりました。そして、かえりにはまた必ず立ち寄よるからとお言いのこしになつて、さらに東の国へお進みになり、山や川に住んでいる、荒あらくれ神や、そのほか天皇にお仕えしない悪者どもをいちいちお説とき従えになりました。そしてまもなく相模さがみの国へお着きになりました。

するとその国造^{くにのみやつこ}が、命をお殺し申そうとたくらんで、
 「あすこの野中に大きな沼^{ぬま}がございます。その沼の中に住んで
 おります神が、まことに乱暴^{らんぼう}なやつで、みんな困^{こま}っております」
 と、おだまし申しました。

命はそれをまにお受けになつて、その野原の中へはいつてお
 いでになりますと、国造^{くにのみやつこ}は、ふいにその野へ火をつけて、どん
 どん四方から焼きたてました。

命ははじめて、あいつにだまされたかとお気づきになりました
 た。その間^まにも火はどんどんま近^{せま}に迫^{せま}つて来て、お身^{あやう}が危^{あやう}くな
 りました。

命はおんおば上のおおせを思い出して、急いで、例の袋のひ
 もをといてご覧^{らん}になりますと、中には火打^{ひうち}がはいつておりまし
 た。

命はそれで、急いでお宝物たからものの御剣みつるぎを抜ぬいて、あたりの草をどん
どんおなぎ払いになり、今の火打ひうちでもつて、その草へ向かい火を
つけて、あべこべに向こうへ向かつてお焼きたてになりました。
命はそれでようやく、その野原からのがれ出ていらつしやいま
した。そしていきなり、その悪い国造くにのみやつこと、手下てしたの者どもを、こ
とごとく切り殺して、火をつけて焼いておしまいになりました。
それ以来そのところを焼津やいづと呼びました。それから、命みことが草
をお切りはらいになつた御剣みつるぎを草薙くさなぎの剣つるぎと申しあげるようにな
りました。

命はその相模さがみの半島はんとうをおたちになつて、お船で上総かずさへ向かつ
てお渡りわたになろうとしました。すると途中で、その海の神が
ふいに大波おおなみを巻きあげて、海一面を大荒れおおあに荒れさせました。
命の船はたちまちくるくるまわり流されて、それこそ進むこと

もひきかえすこともできなくなつてしまいました。

そのとき命がおつれになつていたお召使の弟橘媛は、めしつかい おとたちばなひめ

「これはきつと海の神のたたり^{めしつかい}に相違ございません。私があなたのお身代わりになりました、海の神をなだめしましょう。あなたはどうぞ天皇のお言いつけをおしとげくださいます、めでたくあちらへおかえりくださいまし」と言いながら、すげの畳たたみを八枚、皮畳を六枚に、絹畳を八枚重ねて、波の上に投げおろさせるやいなや、身をひるがえして、その上へ飛びおりました。

おおなみ

大波は見るまに、たちまち媛ひめを巻きこんでしまいました。す

るとそれといつしよに、今まで荒れ狂っていた海が、ふいにぱつたりと静まつて、急に穏かななぎになつてきました。

おだや

命はそこのおかげでようやく船を進めて、上総かずさの岸へ無事にお着きになることができました。

それから七日目に、橘媛たちばなひめのくしがこちらの浜へうちあげられました。命はそのくしを拾わせて、あわれな媛ひめのためにお墓をお作らせになりました。

橘媛たちばなひめが生前に歌った歌に、

さねさし、

さがむの小野おのに、

もゆる火の、

火中ほなかに立ちて、

問いしきみはも。

これは、相模さがみの野原で火攻めにお会いになったときに、その燃える火の中にお立ちになっていた、あの危急なときにも、命みことは

私のことをご心配くださつて、いろいろに慰め問うてくださつた、ほんとに、お情け深い方よと、そのもつたいないお心持をわす忘れない印にしるし歌つたのでした。

命はそこから、なおどんどんお進みになつて、いたるところで手におえない悪者どもをへいていご平定になり、山や川の荒あらくれ神をもお従えになりました。

それでいよいよ、再び大和ふたた やまとへおかえりになることになりました。

そのお途中で、足柄山あしがらやまの坂の下で、お食事をなすつておいでになりますと、その坂の神が、白いしかに姿をかえて現われて、命を見つめてつつ立つておりました。

みこと命は、それをご覧らんになると、お食べ残しのにらの切きはしをお取りになつて、そのしかをめがけてお投げつけになりました。

すると、それがちょうど目にあたつて、しかはばたりと倒れてしましました。

命はそれから坂の頂上へおあがりになり、そこから東の海をおながめになつて、あの哀れな橘媛のことを、つくづくと思いかえしになりながら、

「あずまはや」（ああ、わが女よ）とお嘆きになりました。それ以来そのあたりの国々をあずまと呼ぶようになりました。

四

命は、そこから甲斐の国へお越えになりました。そして酒折宮という御殿におとまりになつたときに、

にいばり、つくばを過ぎて、
いく夜か寝ねつる。

とお歌いになりますと、あかりのたき火についていた一人の老人が、すぐにそのおあとを受けて、

かなべて、

夜よには九夜このよ、

日には十日とおかを。

と歌いました。それは、

「蝦夷えびすどもをたいらげながら、常陸ひたちの新治にいばりや筑波つくばを通りすぎて、

ここまで来るのに、いく夜寝たであらう」とおっしゃるのに対

して、

「かぞえて見ますと、九夜寝て十日目を迎えましたのでござい
ます」という意味でした。

命はその答えの歌をおほめになつて、そのごほうびに、老人
あずまのくにのみやつこ
を東国造という役におつけになりました。

それから信濃へおはいりになり、その国境の地の神を討ち
しなの
従えて、ひとまずもとの尾張までお帰りになりました。

命はお行きがけにお約束をなすつたとおり、美夜受媛のおう
ちへおとまりになりました。そして草薙の宝剣を媛におあずけ
おうみ いぶきやま
になつて近江の伊吹山の、山の神を征伐においでになりました。

命はこの山の神ぐらいは、す手でも殺すとおっしゃつて、ど
んどんのぼつておいでになりました。すると途中で、うしほど
もあるような、大きな白いのししが現われました。命は、

「このいのししに化^ばけて出たのは、まさか山の神ではあるまい。
神の召使^{めしつかい}の者であろう。こんなやつは今殺さなくとも、かえり
にしとめてやればたくさんである」とおいばりになつて、その
ままのぼつておいでになりました。

そうすると、ふいに大きなひょうがどツと降りだしました。
命^{みこと}はそのひょうにお襲^{おそ}われになるといつしよに、ふらふらとお
目まいがして、ちようどものお酔^よいになつたように、お気分
が遠くおなりになりました。

それというのは、さきほどの白^{しろ}い^{しろ}のししは、山の神の召使
ではなくて、山の神自身が化^ばけて出たのでした。それを命があ
んなにけいべつして広言^{こうげん}をお吐^はきになつたので、山の神はひど
く怒^{おこ}つて、たちまち毒氣^{どくき}を含^{ふく}んだひょうを降^ふらして、命をおい
じめ申したのでした。

命は、ほとんどほうにくれておしまいになりましたが、ともかく、ようやくのことで山をおくだりになって、玉倉部たまくらべというところにわき出ている清水しみずのそばでご休息をなさいました。そして、そのときはじめて、いくらかご気分がたしかにおなりになりました。しかし命はとうとうその毒気のために、すっかりおからだをこわしておしまいになりました。

やがて、そこをお立ちになって、美濃みのの当芸野たぎのという野中までおいでになりますと、

「ああ、おれは、いつもは空でも飛んで行けそうに思っていたのに、今はもう歩くこともできなくなった。足はちょうど船のかじのように曲がってしまった」とおっしゃって、お嘆なげきになりました。そしてそのまままた少しお歩きになりましたが、まもなくひどく疲つかれておしまいになったので、とうとうつえにす

がつて一足一足お進みになりました。ひとあしひとあし

そんなにして、やつと伊勢いせの尾津おつの崎さきという海ばたの、一本まつのところまでおかえりになりますと、この前お行きがけのときに、そのまつの下でお食事をお取りになつて、つい置き忘れおわすていらした太刀たちが、そのままくならないで、ちゃんと残つておりました。

みこと
命は、

「おお一つまつよ、よくわしのこの太刀たちの番をしていてくれた。おまえが人間であつたら、ほうびに太刀をさげてやり、着物を着せてやるのだけれど」と、こういう意味の歌を歌つてお喜びになりました。それからなおお歩きになつて、ある村までいらつしやいました。

命は、そのとき、

「わしの足はこんな^{みえ}に三重に曲がつてしまった。どうもひどく疲^{つか}れて歩けない」とおつしやいました。しかしそれでも無理にお歩きになつて、能^の褒^ぼ野という野へお着きになりました。

命は、その野の中でつくづく、おうちのことを思いになり、

あの青^{あお}山^{やま}にとりかこまれた、

美しい大^{やま}和^とが恋しい。

しかし、あ^{わたし}あ私は、

その恋しい土地へも、

歸りつくことはできない。

命^{いのち}あるものは、

これからがいせんして、

あの平群^{へぐり}の山の、

くまがしの葉を、

髪^{かみ}に飾^{かざ}つて祝い楽しめよ。

という意味をお歌いになり、

はしけやし、

わぎへの方^{かた}よ、

雲^{くも}いたち来^くも。

（おおなつかしや、

わが家^やのある、

はるかな大和^{やまと}の方から、

雲が出て来るよ。）

と、お歌いになりました。

そして、それといっしょにびようせい病勢もどつときとくご危篤になつてき
ました。

みこと命は、ついに、

おとめの、

とこ床のべに、

わがおきし、

つるき剣の太刀。たち

その太刀はや。

と、あの美夜みや受あづ媛ひめのおうちにおいていらした宝剣ほうけんも、とうと

う再びふたたび手にとることもできないかとお歌いになり、そのお歌の終わるのとともに、この世をお去りになりました。

早うまのお使いは、このことを天皇に申しあげにかけつけました。

大和やまとからは、命のお妃みことめやお子さまたちが、びつくりしてくだつておいでになりました。そして、命のご陵りようをお作りになつて、そのぐるりの田の中に伏ふしまろんで、おんおんおんと泣いていらつしやいました。

するとおなくなりになつた命は、大きな白い鳥になつて、お墓の中からお出ましになり、空へ高くかけのぼつて、浜辺はまべの方へ向かつて飛んでおいでになりました。

お妃みことめやお子さまたちは、それをご覧らんになると、すぐに泣き泣きそのあとを追ひしたつて、ささの切り株かぶにお足を傷つけて血

だらけにおなりになつても、痛^{いた}さを忘^{わす}れて、いつしようにけんめいにかけておいでになりました。

そしてしまいには、海の中にまではいつて、ぎぶぎぶと追っかけていらつしやいました。

白い鳥はその人々をあとにおいて、海の中のいそからいそにと伝わ^{つた}つて飛^とんで行きました。

お妃^{みづき}は潮^{しほ}の中を歩きなやみながら、おんおんお泣きになりました。

その鳥は、とうとう伊勢^{いせ}から河内^{かわち}の志紀^{しき}というところへ来てとまりました。それで、そこへお墓^{はか}を作^{つく}つて、いったんそこへお鎮^{しず}め申しましたが、しかし鳥は、あとにまた飛^とび出して、ど^どんどん空^{そら}をかけて、どこへともなく逃^にげ去^さつてしまいました。

五

みこと

命には、お子さまが男のお子ばかり六人おいでになりました。

たらしなかつひこのみこと

その中の、帶中津日子命とおっしゃる方は、後にお祖父上そふうえの天

せいむてんのう

皇のおつぎの成務天皇のおあとをお継つぎになりました。すなわ

ちゅうあいてんのう

ち仲哀天皇でいらつしやいます。

せいぼつ

命が諸方を征伐しておまわりになる間は、七拳脛ななつかはぎという者が、

いつもご料理番としてお供について行きました。

おんちちうえ

けいこうてんのう

御父上の景行天皇は、おん年百三十七でおかくれになりました。

た。

ちようせんせいばつ
朝鮮征伐

一

ちゆうあいてんのう
仲哀天皇は、ある年、ご自身で熊襲をくまそお征伐せいばつにおくだりになり、筑前ちくぜんの香椎かしいの宮というお宮におとどまりになつていらつしやいました。

そのとき天皇は、ある夜、戦いくさのお手だてについて、神さまのお告げをすわいただくとおぼしめして、大臣たけのうちのすくねの武内宿禰をお祭場まつりばへお坐すわらせになり、御自分はお琴ことをおひきになりながら、お二人でお祈いのりをなさいました。そうすると、どなたか一人の神さ

まが、皇后の息長帯媛のおからだにお乗りうつりになり、皇后のお口をお借りになつて、

「これから西の方にあるひとつの国がある、そこには金銀をはじめ、目もまぶしいばかりの、さまざまの珍しい宝がどつきりある。つまらぬ熊襲の土地よりも、まずその国をあなたのものにしてあげよう」とおつしやいました。

「しかし、高いところへ登つて西の方を見ましても、そちらの方はどこまでも大海ばかりで、国などはちつとも見えないではありませんか」と、天皇はお答えになりました。そしてお心のうちでは、

「これはほんとうの神さまではあるまい。きつといつわりを言う神が乗りうつたにちがいない」とおぼしめして、それなりお琴をおしのけて、だまつておすわりになつていました。

すると神さまはたいそうお怒りいかになつて、

「そんな、わしの言葉ことばをうたぐつたりするものには、この国も任まかせてはおかれない。あなたはもう、さつさと死んでおしまいなさるがよい」と、おおせになりました。

宿禰すくねはその言葉を聞くと、びっくりして、

「これはたいへんでございます。陛下よ、どうぞもつとお琴をおひきあそばしませ」と、あわててご注意申しあげました。

天皇は仕方なしに、しぶしぶお琴をおひき寄せになつて、しばらくの間、申しわけばかりにぼつぽひいておいでになりましたが、そのうちにまもなく、ふツつりとお琴の音ねがとだえてしまいました。

宿禰すくねはへんだと思つて、灯ひをさし上げて見ますと、天皇はもはやいつのまにかお息が絶えて、その場にお倒たおれになつていらつ

しやいました。

皇后も宿禰すくねも、神さまのお罰ばつに驚き怖おそれて、急いでそのお空骸なきがら

を仮のお宮へお移し申しました。そしてまず第一番に、神さま

のお怒りをおなだめ申すために、そのあたりの国じゅうで生き

た獣けものの皮を剥はいだり、獣を逆さかはぎにしたものをはじめとして、田

の畔くろをこわしたものの、溝みぞをうめたもの、汚きたないものをひりちら

したものの、そのほか言うも穢けがらわしいような、さまざまの汚な

い罪を犯したものをたちをいちいちさがし出させて、御幣ごへいをとつ

て、はらい清めて、国じゅうのけがれをすっかりなくしておし

まいになりました。そして、宿禰すくねが再びお祭場ふたに坐すわつて、改め

て神さまのお告げをお祈り申しました。

すると神さまからは、この前おつしやった西の国のことにつ

いて、同じようなおおせがありました。

「それからこの日本の国は、今、皇后のお腹なかにいらつしやるお子がお治めになるべきものだ」とおつしやいました。

皇后は、そのときちようどお身重みおもでいらつしやいました。宿禰すくね

はそのおおせを聞いて、

「では、恐れおそながら、今、皇后のお腹においでになりますお子さまは、男のお子さまと女のお子さまと、どちらでいらつしやりましょう」とうかがいますと、

「お子はご男子なんしである」とお告げになりました。

すくね

宿禰はなお、すべてのことをうかがつておこうと思ひまして、

「まことにおそれいます、かようにいちいちお告げを下さいますあなたさまは、どなたさままでいらつしやいますか。どうぞお名まえをおあかしく下さいまし」と申しあげました。神さまは、やはり皇后のお口を通して、

「これはすべて天照大神のおぼしめしである。また、底筒男命、そこつつおのみこと中筒男命、なかつつおのみこと上筒男命の三人の神も、いっしよに申し下してくだいるのだ」と、そこではじめてお名まえをお告げになりました。

神さまはなお改めて、

「もしそなたたちが、ほんとうにあの西の国を得ようと思うならば、まず大空の神々、地上の神々、また、山の神、海と河かわとの神々にことごとくお供えを奉り、それから私たち三人の神の御魂みたまを船のうえに祀まつったうえ、まきの灰はいを瓠ひきいに入れ、また箸はしと盆ぼんとをたくさんこしらえてそれらのものを、みんな海の上に散らし浮かべて、その中を渡わたって行くがよい」とおっしゃって、くわしく征伐せいばつの手順ていじゆんをおしえてくださいました。

それで、皇后はすぐ軍勢をお集めになり、神々のお言葉ことばのとおり、すべてご用意をお整ととのえになつて、仰山ぎやうさんなお船をめしつ

らねて、勇ましく大海のまん中へお乗り出でになりました。

そうすると海じゅうの、あらゆる大小の魚が、のこらず駈かけよつて来て、すつかりのお船をみんなで背中せなかにお担かつぎ申しあげて、わっしよいわっしよいと、威勢いせいよく押おしはこんで行きました。そこへ、ちようどつごうよく、追い手の風がどんどん吹き募つつて来ました。ですから、それだけのお船がみんな、かけ飛ぶように走つて行きました。

そのうちに、そのたいそうな大船に押しまくられた大浪おおなみが、しまいには大きな、すさまじい大海嘯おおつなみとなつて、これから皇后がご征伐になろうとする、今の朝鮮ちようせんの一部分の新羅しらぎの国へ、ふいにどどんと打ち上げました。そして、あつという間まに、国じゅうを半分までも巻まき込こんでしまいました。

皇后の軍勢は、その大海嘯と入れちがいに、息もつかせずう

わあツと攻めこみました。すると新羅の王はすっかり怖れちぢこまつて、すぐに降参してしまいました。

国王は、

「私どもはこれからいついつまでも、天皇のおおせのままに、おうま飼の下郎となりまして、いっしょうけんめいにご奉公申しあげます。そして毎年船をどつさり仕立てまして、その船底の乾くときもなく、棹や櫂の乾くまもないほどおうかがわせ申しまして、絶えず貢物を奉り天地が亡びますまで無窮にお仕え申しあげます」と、平蜘蛛のようになっておちかいをいたしました。

それで皇后はさつそくお聞き届けになりましたして、新羅の王をおうま飼ということにおきめになり、その隣の百済をもご領地にお定めになりました。そしてそのお印に、お杖を、新羅の王宮

の門のところ突き刺さしてお置きになりました。

それから最後に、お社やしろをお作りになって、今度のご征伐せいばつについていちちお指図さしずをしてくださった、底筒男命以下三人の神さまを、この国の氏神うじがみさまにお祀まつりになった後、ご威風堂々いふうと新羅しらぎをおひき上げになりました。

二

おん母上の皇后はその前に、まだご征伐のお途中でお腹なかのお子さまがお生まれになろうとしました。それで、どうぞ今しばらくの間はご出産にならないようにとお祈りになって、そのお呪まじないに、お下着のお腰こしのところへ石ころをおつるしになり、それでもって当分お腹をしずめておおきになりました。

するとお子さまは、ちゃんと筑紫へお凱旋がいせんになつてからご無事にお生まれになりました。それはかねて神さまのお告げのとおりりっぱな男のお子さまでいらつしやいました。この小さな天皇には、ご誕生たんじょうのときに、ちようど、軛ともといつて弓ゆみを射いるときに左の臂ひじにつける革具かわぐのとおりの形をしたお盛肉もりにくが、お腕うでに盛りあがつておりました。皇后はこれをお名まえにお取りになつて、大軛命おおおとのみこととお名づけになりました。すなわち後にお呼び申す応神天皇さまです。その軛とものお肉のことをうけたまわつたものたちは、天皇がお母上のお腹なかのうちから、すでに天下をお治めになつていたということは、これでもわかると言つて、みんな畏れ入りました。

また、皇后はご出征のまえに、肥前ひぜんの玉島たましまというところにおいでになつて、その川のほとりでお食事をなさつたことがあ

りました。

それがちょうど四月で、あゆが取れるころでした。皇后はた
めしにその川中の石の上にお下りになつて、お下袴したばかまの糸をぬい
て釣糸つりいとになされ、お食事のおあとのご飯粒はんつぶを餌えさにして、ただで
も決して釣つることができないあゆをちゃんとおつり上げになり
ました。

ですからこの地方では、その後いつも四月のはじめになりま
すと、女たちがみんな下袴したばかまの糸をぬいて、飯粒めしつぶを餌えさにしてあゆ
を釣り、ながく皇后のお徳をかたりつたえる印しるしにしております
た。

おん母上の皇后は、ついで熊襲くまそをも難なくご平定になつて、
 いよいよ大和やまとにおかえりになることになりました。

しかし、大和には、香坂王かざかのみこ、忍熊王おしくまのみことおつしやる、お二人の
 お腹はらちがいの皇子などがおいでになるので、うっかりしている
 と、天皇がお小さいのにつけ入ってどんな悪い事をお企たくらみにな
 るかわからないとお気づかいになりました。

それで皇后は、ちゃんとお策略さくくりやくをお立てになつて、喪船もふねを一
 そうお仕立てになり、お小さな天皇をその中へお乗せになりま
 した。

そして天皇はもはやとくにお亡なくなりになつたとお言いふら
 しになり、そのお空骸なきからを奉じておかえりになるていにして、筑紫つくし
 をお立ちになりました。

こちらは香坂かざか、忍熊おしくまの二皇子は、それをお聞きになりますと、

案のとおり、ご自分たちがあとを取ろうとおかかりになりました。それでまず第一番に皇后の軍勢を待ちうけて討ち亡ぼそうとおぼしめして、にわか**に**兵を集めて、摂津の斗賀野**とがの**というところまでご進軍になりました。

皇子たちは、その野原でた**め**しに**りよう**獵をして、その獲物によつて、さいさきを占つてみようとなさいました。

香坂皇子は、くぬぎの木に上つて、その獵の有様を見ていらつしやいました。すると、ふいにそこへ、手傷を負つた大きなのししがあらわれて、そのくぬぎの木の根もとをど**ん**ど**ん**掘りにかかりました。そしてまもなくすとんと掘り倒したと思いま**か**ぐさ**か**のおうじすと、いきなり香坂皇子に飛びかかつて、が**つ**が**つ**皇子を食べてしまいました。

しかし、弟さまの忍熊皇子は、おしくまのおうじ、そんな悪い前兆にもとんじや

くなしに、そのまま軍勢をおひきつれになり、海ばたまで押しかけて、待ちかまえていらつしやいました。

そのうちに、皇后がたのお船が見えて来ました。忍熊王は、おしくまのみこ

その中の喪船もふねには、兵たいたちが乗つていないはずなので、まづまつ先にその船を目がけてお討うちかからせになりました。

ところがその船の中には、前もつてちゃんとよりすぐりの兵が忍しのばせてありました。その兵士たちは船がつくなり、ふいに、

うわツと飛び下りて、たちまち、はげしい戦いくさをはじめました。

そのとき忍熊王の軍勢おしくまのみこ ぐんぜいには、伊佐比宿禰いさひのすくねというものが総大将そうたいたいしょう

になっていました。それに対して皇后方からは建振熊命たけふるくまのみことという

強い人が將軍となつて攻めせかけました。

たけふるくまのみこと

建振熊命は見る見るうちに宿禰すくねの軍勢を負かし崩くずして、ぐん

ぐんと、どこまでも追つかけて行きました。すると敵は山城やましろうで

ふみ止とどまつて、頑固がんこに防ぎ戦ふせいくさをしだしました。

たけふるくまのみこと

建振熊命は、何と言いながら、死にもの狂ぐるいで攻めかけ攻めかけしました。しかし、どんなにあせつても敵はそれなりひと足も退ひこうとはしませんでした。

たけふるくまのみこと

建振熊命は、しまいには、これでは果はてしがないと思い直して、急に味方の兵をひきまとめるといっしよに、向こうの軍勢に向かつて、

「実は皇后が急におなくなりになつたので、われわれはもう戦いくさをする気はない」と申し入れながら、その目の前で全軍ぜんぐんの兵士へいしたちに弓ゆみの弦つるをことごとく断たち切きらせて、さもほんとうのように、伊佐比宿禰いさひのすくねに降参こうさんをしました。

すると伊佐比宿禰いさひのすくねはそれですっかり気をゆるして、自分のほうもひとまずみんなに弓の弦つるをはずさせ、いっさいの戦道具いくさぐを

も片づけさせてしまいました。
かた

建振熊命はそれを見すまして、
たけふるくまのみこと

「それッ」と合い図をしますと、部下の兵たちは、髪の中に隠
かみ
していた、かけがえの弦を取り出して瞬くまに弓を張って、
またた

「うわッ」と、哄を上げて攻めかかりました。
とき

敵はまんまと不意を討たれて、総くずれになつてにげ出しま
たけふるくまのみこと
した。建振熊命は勝に乗じてどんどんと追いまくって行きまし
た。

すると敵勢は近江の逢坂というところまでにげのびて、そこ
てきぜい
でいったん踏み止まって戦いましたが、また攻めくずされて、
ふ
ちりぢりににげて行きました。

建振熊命は、とうとうそれを同じ近江の篠波というところで
たけふるくまのみこと
おうみ
ささなみ

追いつめて、敵の兵たいという兵たいを一人ものこさず斬り殺
き

してしまいました。

おしくまのみこ

いさひのすくね

あやう

そのとき忍熊王と伊佐比宿禰とは、危く船に飛び乗って、湖の中へにげ出しました。

しかしぐずぐずしていると今につかまってしまふのが目に見えていましたので、皇子は宿禰すくねに向かつて、

さあ、おまえ、

ふるくま

振熊に殺されるよりも、

かいつぶり

鳩鳥のように、

この湖水にもぐってしまおうよ。

とお歌いになり、二人でざんぶと飛び込んで、それなり溺れ死おぼにに死んでおしまいになりました。

四

皇后はそれでいよいよめでたく大和へおかえりになりました。

しかし武内宿禰たけのうちのすくねだけは、お小さな天皇をおつれ申して、穢けがれ払はら

みそぎ

いの禊みそぎということをしに、近江おうみや若狹わかさをまわつて、越前えちぜんの鹿角つぬが

というところに仮のお宮を作り、しばらくの間そこに滞在たいざいしておりました。

するとその土地に祀まつられておいでになる伊奢沙和氣大神いささわけのおおかみとい

う神さまが、あるばん宿禰すくねの夢に現われていらしつて、

「わしの名を、お小さい天皇のお名と取りかえてくれぬか」とおつしやいました。

宿禰すくねは、

「それはもつたいないおおせでございます。どうもありがとうございます。存じます」とお答え申しました。大神は、おおかみ「それでは、明日あすお供をして海ばたへ来るがよい。名を取りかえてくださったお礼を上げようから」とおっしゃいました。

それである朝早く、天皇をおつれ申して海岸へ出て見ますと、みんな鼻の先に傷きずをうけた、それはそれはたいそうな海い豚るかが、浜じゅうへいっぱいうち上げられておりました。

宿禰すくねはさつそくさかなお社やしろへお使いをたてて、

「食さかなべ料のお魚をどつさりありがとう存じます」とお礼を申しあげました。

天皇はそれから大和やまとへおかえりになりました。

お待ち受けになっていたお母上の皇后は、それはそれは大喜びをなすつて、さつそくご用意のお酒を出させて、お祝いのお

さかもりをなさいました。

皇后は、

このお酒は、わたし私がかもした酒ではない。

薬の神の少名彦名神がすくなひこなのかみあなたのご運をお祝いして、

喜びさわいでつくつてくださったお酒だから、

のこさず、すっかりめし上がってください。

さあさあどうぞ。

という意味をお歌いになりました。

すくね宿禰は天皇に代わって、

このお酒をつくった人は、

鼓を白つづみの上に立てて、

歌いながら、舞まいながら、

喜び喜びつくつたせいでございますか、

それはそれはたいそうよいお酒で、

いただきますとひとりでに歌いたく、

舞いたくなつてまいります。

ああ楽しや。

とお答えの歌を歌いながら、ともどもお喜び申しました。

後の世の人は、この母上の皇后の、いろんな雄お々おしい大きな

お手柄てがらをおほめ申しあげて、お名まえを特に神功皇后じんぐうこうごうとおよび

申しております。

赤い玉

一

神功皇后のお母方じんぐうこうごう ははかたのご先祖については、こういうお話が伝わっています。

それは、この時分から、もつともつと昔むかし、新羅しらぎの国の阿具沼あぐぬまという沼ぬまのほとりで、ある日一人の女が昼寝ひるねをしておりました。すると、ふしぎなことには、日の光がにじのようになって、さつと、その女のお腹なかへ射さしました。

それをちようど通りかかった一人の農夫が見て、へんなこと

もあるものだと思ひながら、それから、いつもその女のそぶりに目をつけていますと、女はまもなくお腹が大きくなつて、一つの赤い玉を生み落としました。農夫はその玉を女からもらつて、物につつんで、いつも腰こしにつけていました。

この農夫は谷間たにまに田を作つておりました。ある日農夫は、その田で働いている人たちのたべ物を、うしに負わせて運んで行きますと、その谷間で、天日矛あめのひぼこという、この国の王子に出会いました。

王子は農夫がへんなところへうしを引いて行くのを見て、

「これこれ、そちはどうしてそのうしへたべ物などを乗せてこんなところへはいつて来たのだ。きつと人に隠かくれてそのうしも殺して食おうというのであらう」と言いながら、いきなり農夫をつかまえてろうやへつれて行こうとしました。農夫は、

「いえいえ私はけつしてこのうしを殺そうなどとするのではございせん。ただこうして百姓ひやくしやうたちのたべ物を運んでまいりますだけでございます」と、ほんとうのままを話しました。それでも王子は、

「いやいや、うそだ」と言つて、なかなかゆるしてくれないので、農夫は腰こしにつけている例の赤い玉を出して、それを王子にあげて、やつとのこととで放してもらいました。

王子はその玉をおうちへ持つて帰つて、床とこの間に置いておきました。すると赤い玉が、ふいに一人の美しい娘になりました。王子はその娘を自分のお嫁よめにもらいました。

そのお嫁は、いつもいろいろの珍めづしいお料理をこしらえて、王子に食べさせていましたが、王子はだんだんにわがままを出して、しまいにはお嫁をひどくののしりとばすようになりまし

た。

するとお嫁のほうではとうとうたまりかねて、

「私はもうこれぎり親たちの国へ帰つてしまいます。もともとわたし

私は、あなたのような方のお嫁になつてばかにされるような女ではありません」と言いながら、そのうちを抜け出して、小船に乗つて、はるばると摂津せつつの難波なにわの津まで逃げて来ました。この女の人は後に阿加流媛あかるひめという神さまとしてその土地にまつられました。

王子の天日矛あめのひぼこは、そのお嫁のあとを追つかけて、とうとう難波なにわ

の海まで出て来ましたが、その海の神がさえぎつて、どうしても入れてくれないものですから、しかたなしにひきかえして、但馬たじまの方へまわつて、そこへ上陸しました。そして、しばらくそこに暮らしているうちに、後にはとうとうその土地の人をお

嫁にもらつて、そのままそこへいつくことにしました。

あめのひほこ

この天日矛の七代目の孫にあたる高たか額ぬひめ媛という人がお生み申

したのが、すなわち神功皇后のお母上でいらつしやいました。

すいにんてんのう

例の垂仁天皇のお言いつけによつて、常世国とこよのくにへたちばなの実を

取りに行つたあのだ遅摩毛理は、日矛ひほこの五代目の孫の一人でし

た。

ひほこ

日矛はこちらへ渡わたつて来るときに、りつぱな玉や鏡なぞの宝物ほうもつ

やしな

を八品持つて来ました。その宝物は、伊豆志いずしの大神おおかみという名ま

えの神さまにしてまつられることになりました。

二

この宝物をまつつた神さまに、伊豆志乙女いずしおとめという女神めがみが生ま

れました。この女神を、いろんな神々たちがお嫁にもらおうとなさいましたが、女神はいやがって、だれのところへも行こうとはしませんでした。

その神たちの中に、秋山の下氷男したびおとこという神がいました。その神が弟の春山の霞男はるやま かすみおとこという神に向かつて、

「私わたしはあの女神をお嫁にしようと思つても、どうしても来てくれない。どうだ、おまえならもらつてみせるか」と聞きました。

「私わたしならわけなくもらつて来ます」と弟の神は言いました。

「ふふん、きつとか。よし、それではおまえがりっぱにあの女神めがみをもらつて見せたら、そのお祝いに、わしの着物をやろう。それからわしの身の丈たけほどの大がめに酒を盛もつて、海山の珍めづらしいごちそうをそろえて呼よんでやろう、しかし、もしもらいそこねたら、あんな広言こうげんを吐はいた罰ばつに、今わしがしてやろうと言つた

とおりをわしにしてくれるか」と言いました。

弟の神は、おお、よろしい、それではかけをしようと誓ちかいました。そして、おうちへ帰つて、そのことをおかあさまにお話しますと、おかあさまの女神は、一晚ひとばんのうちに、ふじのつるで、着物からはかまから、くつからくつ下まで織ゆみつたり、こしらえたりした上に、やはり同じふじのつるで弓をこしらえてくれました。

弟の神はその着物やくつをすっかり身につけて、その弓矢ゆみやを持って、例の女神のおうちへ出かけて行きました。すると、たちまち、その着物やくつや弓矢にまで、残らず、一度にぱつとふじの花が咲さきそろいました。

弟の神はその弓矢を便所のところへかけておきますと、女神はそれを見つけて、ふしぎに思いながら取りはずして持つて行

きました。弟の神は、すかさず、そのあとについて女神のへやにはいつて、どうぞ私のお嫁になつてくださいますと言いました。そして、とうとうその女神をもらつてしまいました。

二人の間には一人子供までできました。

弟の神は、それで兄の神に向かつて、

「私はあのとおり、ちゃんと女神をもらいました。だから約束のとおり、あなたの着物をください。それからごちそうもどつさりしてください」と言いました。すると兄の神は、弟の神のことをたいそうねたんで、てんで着物もやらないし、ごちそうもしませんでした。

弟の神は、そのことを母上の女神に言いつけました。すると女神は、兄の神を呼んで、

「おまえはなぜそんなに人をだますのです。この世の中に住ん

でいる間は、すべてりっぱな神々のなさるとおりをしななければいけません。おまえのように、いやしい人間のまねをする者はそのままにしてはおかれない」と、ひどく怒りつけました。それから、そこいらの川の中の島にはえていたけを伐つて来て、それで目の荒いあらかごを作り、その中へ、川の石に塩をふりかけて、それをたけの葉につつんだのを入れて、

「この兄の神のようなくそつきは、このたけの葉がしおれるようにしおれてしまえ。この塩がひるようにひからびてしまえ。そして、この石が沈むように沈み倒れてしまえ」とのろつて、そのかごをかまどの上に置かせました。

すると兄の神は、そのたたりで、まる八年の間、ひからびしおれ、病みつかれて、それはそれは苦しい目を見ました。それでとうとう弱り果てて泣く泣く母上の女神におわびをしました。

女神はそのときやつとのろいをといてやりました。そのおかげで兄の神は、またもとのとおりのじょうぶなからだにかえりました。

宇治の渡し

一

お小さな応仁天皇も、そのうちにすっかりご成人になって、
大和の明の宮で、ご自身に政をお聞きになりました。

あるとき、天皇は近江へご巡幸になりました。そのお途中で、
山城の宇治野にお立ちになって、葛野の方をご覧になりますと、
そちらには家々も多く見え、よい土地もどつきりあるのがお目
にとまりました。

天皇はそのながめを歌にお歌いになりながら、まもなく木幡

というところまでおいでになりますと、その村のお道筋で、それはそれは美しい一人の少女にお出会いになりました。

天皇は、

「そちはだれの娘か」とおたずねになりました。

「私は比布礼能意富美と申します者の子で、宮主矢河枝媛と申

します者でございます」と、その娘はお答え申しました。

すると、天皇は

「ではあす帰りにそちのうちへ行くぞ」とおっしゃいました。

媛はおうちへ帰って、すべてのことをくわしくおとうさまに

話しました。

おとうさまの意富美は、

「それではそのお方は天子さまだ。これはこれはもつたいたい。そちも十分気をつけて失礼のないようによくおもてなし申しあ

げよ」と言いきかせました。そしてさつそくうちじゅうを、すみずみまですつかり飾りつけて、ちゃんとお待ち申しております。

天皇はおおせのとおり、あくる日お立ちよりになりました。意富美らは怖れかしこみながら、ごちそうを運んでおもてなしをしました。

天皇は矢河枝媛が奉るさかずきをお取りになつて、

この料理のかには、

越前敦賀のかにが、

横ざまにはつて、

近江を越えて来たものか。

わしもその近江おうみから来て、

木幡こぼたの村でおまえに会った。

おまえの後姿うしろすがたは、

盾たてのようにすらりとしている。

おまえのきれいな齒はなみ並なみは、

しいの実みのように白く光っている。

顔には九瀬坂わにざかの土を、

そこの土は、

上土うわつちは赤く、

底土そこつちは赤黒いけれど、

中土なかつちの、

ちようど色のよいのを

眉墨まゆずみにして、

色濃く眉まゆをかいている。

おまえはほんとうにきれいな子だ。

とこういう意味のお歌を歌っておほめになりました。

天皇は、この美しい矢河枝媛やかわえひめを、後にお妃きさきにお召めしになりました。このお妃から、宇治若郎子うじのわかいらつことおつしやる皇子がお生まれになりました。

天皇には、すべてで、皇子が十一人、皇女が十五人おありになりました。

その中で、天皇は、矢河枝媛やかわえひめのお生み申した若郎子皇子を、いちばんかわいくおぼしめていらつしやいました。

あるとき天皇は、その若郎子皇子とはそれぞれお腹はらちがいのお兄上おあやまでいらつしやる大山守命おおやまもりのみこととおおささぎのみこととおおささぎのみこととお二人をお召めしに

なつて、

「おまえたちは、子供は兄と弟とどちらがかわいいものと思うか」とお聞きになりました。

おおやまもりのみこと

大山守命は、

「それはだれでも兄のほうをかわいくおもいます」と、ぞうきもなくお答えになりました。

おおささぎのみこと

しかしお年下の大雀命は、お父上がこんなお問いをおかけになるのは、わたしたち二人をおいて、弟の若郎子わかいらつこにお位をお譲りゆずになりたいというおぼしめしに相違そういないと、ちゃんと、天皇のお心持をおさとりになりました。それでそのおぼしめしに添そうように、

「私は弟のほうがかわいいだろうと思います。兄のほうは、もはや成人しておりますので、何の心配もございませんが、弟と

なりますと、まだ子供でございますから、かわいそうでございます」とお答えになりました。

天皇は、

「それは雀kyōの言うとおりである。わしもそう思っている」とお
おせになり、なお改めて、

「ではこれから、そちら二人と若郎子わかいらつこと三人のうち、大山守おおやまもりは

海と山とのことを司つかさどれ、雀kyōはわしを助けて、そのほかのすべて

の政まつりごとをとり行なえよ。それから若郎子わかいらつこには、後にわしのあとを

継ついで天皇の位につかせることにしよう」と、こうおっしゃつ

て、ちゃんと、お三人のお役わりをお定めになりました。

おおやまもりのみこと

大山守命は、後に、このお言いつけにおそむきになつて、

わかいらつこおうじ

若郎子皇子を殺そうとさえなさいましたが、ひとり大雀命おおささぎのみこと

だけは、しまいまで天皇のご命令のとおりにおつくしになりました

した。

二

天皇は日向ひゆうがの諸県君もろあがたぎみという者の子に、髪長媛かみながひめという、たいそうきりょうのよい娘むすめがあるとお聞きになりました、それを御殿ごてんへお召し使いになるつもりで、はるばるとお召しのぼせになりました。

皇子おうじの大雀命おおささぎのみことは、その髪長媛かみながひめが船で難波なにわの津つへ着いたところをご覧らんになり、その美しいのに感心しておしまいになりました。それで武内宿禰たけのうちのすくねに向かつて、

「こんど日向ひゆうがからお召しよせになったあの髪長媛かみながひめを、お父上にお願いして、私のお嫁よめにもらつてくれないか」とお頼たのみになり

ました。

宿禰すくねはかしこまって、すぐにそのことを天皇に申しあげました。

すると天皇は、まもなくお酒盛のお席へ大雀命おおささぎのみことをお召しになりました。そして、美しい髪長媛かみながひめにお酒をつぐかしわの葉をお持たせになって、そのまま命みことにおくだしになりました。

天皇はそれといっしよに、

わしが、子どもたちをつれて、

のびるをつみに通り通りする、

あの道ばたのたちばなの木は、

上の枝々は鳥えだえだに荒あらされ、

下の枝々は人にむしられて、

中の枝にばかり花がさいている。

そのひそかな花の中に、

小さくかくれている実のような、

しとやかなこの乙女おとめなら、

ちようどおまえに似にあつてゐる。

さあつれて行け。

という意味をお歌に歌つてお祝いになりました。

皇子おうじはとうから評判にも聞いていた、このきれいな人を、天

皇のお許しでお妃きさきにおもらいになつたお嬉うれしさを、同じく歌に

お歌いになつて、大喜びで御前ごぜんをおさがりになりました。

この天皇の御代^{みよ}には、新羅^{しらぎ}の国の人^{たけのうちのすくね}がどつきり渡^{わた}つて来^きました。武内宿禰^{たけのうちのすくね}はその人々^{たけのうちのすくね}を使^{つか}つて、方々に田へ水を取^とる池などを掘^ほりました。

それから百濟^{くだら}の国の王^{みこと}からは、おうま一頭^{ひとつ}、めうま一頭^{ひとつ}に阿知吉師^{あちきし}という者^{もの}をつけて献上^{けんじょう}し、また刀や大きな鏡^{かがみ}などをも献^{けん}じました。

天皇は百濟^{くだら}の王^{みこと}に向^{むか}かつて、おまえのところに賢^{かしこ}い人があるならばよこすようにとおおせになりました。王^{みこと}はそれでさつそく和邇^{わにきし}吉師^{きし}という学者^{がくしや}をよこしてまいりました。

そのとき和邇^{わにきし}は、十卷^{じゅうかん}の論語^{ろんご}という本^{ほん}と、千字文^{せんじもん}という一卷^{いっかん}の本^{ほん}を持^もつて来^きて献上^{けんじょう}しました。また、いろいろの職工^{しやくこう}や、かじ屋^{かじや}の卓素^{たくそ}という者^{もの}や、機織^{はたおり}の西素^{さいそ}という者^{もの}や、そのほか、酒

を造ることのじょうずな仁^に番^ぼという者もいつしよに渡つて来ま
した。

天皇はその仁^に番^ぼ、またの名、須^す須^ず許^こ理^りのこしらえたお酒をめ
しあがりました。そして、

「ああ酔^よった、須^す須^ず許^こ理^りがかもした酒に心持よく酔った。おも
しろく酔った」

という意味の歌をお歌いになりながら、お宮の外へおでましに
なつて、河^{かわ}内^{うち}の方へ行く道のまん中にあつた大きな石を、おつ
えをあげてお打ちになりますと、その石がびっくりして飛びの
きました。

四

天皇は後にとうとうおん年百三十でおかくれになりました。てんのう

それで大雀命は、かねておおせつかつていらつしやるとお

り、若郎子をお位におつけしようとなさいました。わかいらつこ

ところがお兄上の大山守命は、天皇のおおせ残しにそむいて、おおやまのりのみこと

若郎子を殺して自分で天下を取ろうとおかかりになり、ひそか

に兵をお集めになりました。

大雀命は、そのことを早くもお聞きつけになったので、す

ぐに使いを出して、若郎子にお知らせになりました。わかいらつこ

若郎子はそれを聞くとびつくりなすつて、大急ぎでいろいろ

の手はずをなさいました。

皇子はまず第一に、宇治川のほとりへ、こつそりと兵をしの

ばせておおきになりました。それから、宇治の山の上に絹の幕

を張り、とばりを立てまわして、一人のご家来を、りっぱな皇

子のようにしたてて、その姿が山の下からよく見えるように、とばりの一方をあけて、その中のいすにかけさせておおきになりました。そして、そこへいろいろの家来たちを、うやうやしく出たりはいったりおさせになりました。

ですから、遠くから見ると、だれの目にも、そこには若郎子わかいらつこご自身がお出むきになっているように見えました。

皇子はそれといっしよに、おおやまのりのみこと大山守命が下の川をおわたりになるときに、うまくお乗せするように、船をわざとたつた一そうおそなえつけになり、その船の中のすのこには、さなかずらというつる草をついてべとべとの汁しるにしたものをいちめんに塗りつけて、人が足を踏みこむとたちまち滑りころぶようなしかけをさせてお置きになりました。

そしてご自分自身は、そまつ粗末なぬのの着物をめし、いやしい船

頭のようにじょうずにお姿をお変えになつて、かじを握^{にぎ}つて、

その船の中に待ち受けておいでになりました。

おおよまりのみこと

すると大山守命は、おひきつれになつた兵士を、こつそりそ
こいらへ隠^{かく}れさせておおきになり、ご自分は、よろいの上へ、さ
りげなく、ただのお召物^{めしもの}をめして、お一人で川の岸へ出ておい
でになりました。

するとそちらの山の上にりっぱな絹のとばりなどが張りつら
ねてあるのがすぐにお目にとまりました。

みこと

命はそのとばりの中にいかめしくいすにかけている人を、

わかいらつこ

若郎子だと思いこんでおしまいになりました。それでさつそく
その船にお乗りになつて、向こうへおわたりになりかけました。

命は船頭に向かつて、

「おい、あすこの山に大きなておいじしがいるという話だが、ひ

とつそのししをとりたいものだね。どうだ、おまえとつてくれぬか」とお言いになりました。

船頭の皇子は、

「いえ、それはとてもだめでございます」とお答えになりました。

「なぜだめだ」

「あのししは、これまでいろんな人がとうとうとしましたが、どうしてもとれません。ですから、いくらあなたが欲しいとおぼしめしても、とてもだめでございます」

こうお答えになるうちに、船はもはやちょうど川のまん中あたりへ来しました。すると皇子おうじはいきなり、そこでどしんと船を傾かたむけて、命みことをざんぶと川の中へ落としこんでおしまいになりました。

命はまもなく水の上へ浮き出て、顔だけ出して流され流されなさりながら、

ああわしは押し流おされる。

だれかすばやく船を出して、

助けに来てくれよ。

という意味をお歌いになりました。

するとそれといつしよに、さきに若郎子わかいらつこが隠かくしておおきになつ

た兵士たちが、わあツと一度に、そちこちからかけだして来て、命を岸へ取りつかせないように、みんなで矢やをつがえ構かまえて、追い流し追い流ししました。

ですから命はどうすることもおできにならないで、そのまま

かわらのさき
訶和羅前というところまで流れていらしつて、とうとうそこで

おぼれ死にに死んでおしまいになりました。

わかいらつこ
若郎子の兵士たちは、ぶくぶくと沈しずんだ命みことのお死がいを、か

ぎで探さぐりあててひきあげました。

わかいらつこ
若郎子はそれをご覧になりながら、

「わしは伏ふせ勢ぜいの兵たちに、もう矢を射放いはなさせようか、もう射殺

させようかと、いくども思い思いたけれど、一つにはお父上

のことを思いかえし、つぎには妹たちのことを思い出して、同

じお一人のお父上の子、同じあの妹たちの兄でありながら、そ

れをむぎむぎ殺すのはいたわしいので、とうとう矢一本射放す

こともできないでしまった」

という意味をお歌いになり、そのまま大和やまとへおひきあげになり

ました。

そしてお兄上のお死がいを奈良の山にお葬りになりました。

五

おおささぎのみこと

大雀命は、それでいよいよお父上のおおせのとおりに、
わかいらつこおうじ
若郎子皇子にお位におつきになることをおすすめになりました。

しかし皇子は、お父上のおあととおあにいさまがお継ぎになるのがほんとうです。おあにいさまをさしおいてお位にのぼるなぞということは、私にはとてもできません。どうぞお許しく
みこと
ださいとおっしゃって、どこまでもお兄上の命のお顔を
お立て
なろうとなさいました。

しかし命は命で、いかなることがあつても、お父上のお言い

つけにそむくことはできないとお言いとおしになり、長い間お二人でお互い^{たが}に譲^{ゆず}り合つていらつしやいました。

そのときある海人^{あま}が、天皇へ献上^{けんじよう}する物を持つてのぼつて来ました。

その海人が、大雀命^{おおささぎのみこと}のところへ伺^{うかが}いますと、命^{みこと}は、それはわかいらつこ^{わかい}うじ^{うじ}に奉^{たてまつ}れ、あの方が天皇でいらつしやるとおつしやつて、お受けつけになりませんし、それではと言つて皇子の方へうかがえば、それはお兄上^{けん}の方へ献^{けん}ぜよとおおせになりました。海人^{あま}はあつちへ行つたり、こつちへ来たり、それが二度や三度ではなかつたので、とうとう行つたり来たりにくたびれて、しまいにはおんおん泣^なきだしてしまいました。そのために、「海人ではないが、自分のものをもてあまして泣く」ということわざさえできました。

お二人はそれほどまでになすつて、ごめいめいにお義理をつ
くしていらつしやいましたが、そのうちに、若郎子皇子わかいらつこおうじがふい
にお若死わかじにをなすつたので、大雀命おおさぎぎのみこともやむをえず、ついにお
位におつきになりました。後の代から仁徳天皇にんとくてんのうとお呼び申すの
がすなわちこの天皇でいらつしやいます。

難波^{なにわ}のお宮

一

仁徳天皇^{にんとくてんのう}はお位におのぼりになりますと、難波^{なにわ}の高津^{たかつ}の宮^{みや}を
皇居^{みやうきよ}にお定めになり、葛城^{かつらぎ}の曾都彦^{そつひこ}という人の娘^{むすめ}の岩野媛^{いわのひめ}とい
う方を改めて皇后にお立てになりました。

^{おうじおおささぎのみこと}

天皇^{ひめじま}がまだ皇子^{みこ}大雀命^{おほささぎのみこと}でいらつしやるとき、ある年^{せつつ}摂津^{せつつ}の
日女島^{ひめじま}という島へおいでになつて、そこでお酒盛^{さかもり}をなすつたこ
とがありました。すると、たまたまその島にがんが卵^{たまご}をうんで
おりました。皇子は、日本でがんが卵をうんだということは、

これまで一度もお聞きになつたことがないものですから、たいそうふしぎにおぼしめして、あとで武内宿禰たけのうちのすくねを召して、

「そちは世の中にまれな長命の人であるが、いったい日本でがらが卵をうんだという話を聞いたことがあるか」とこういう意味を歌に歌つておたずねになりました。

宿禰すくねは、

「なるほど、それはごもつとものおたずねでございます。私もこれほど長生きをいたしておりますが、今日まで、かつてそういうためしを聞きましたことがございません」と、同じように歌に歌つて、こうお答え申しあげた後、おそばにあつたお琴ことをお借り申して、

「これはきつと、あなたさまがついに天下をお治めになるといふめでたい先ぶれに相違そういございません」と、こういう意味の歌

をお琴^{こと}をひいて歌いました。皇子^{おうじ}はそのとおり、十五人もいらしたごきようだいの中から、しまいにお父上の天皇のおあとをお継^つぎになりました。

ご即位^{そくい}になった後、天皇は、あるとき、高い山におのぼりになって四方の村々をお見しらべになりました。そしてうちしおれておおせになりました。

「見たすところ、どの村々もただひっそりして、家々からちつとも煙があがつていない。これではいたるところ、人民たちが炊^たいて食べる物がないほど貧窮^{ひんきゆう}しているらしい。どうかこれから三年の間は、しもじもから、いつさい租税^{そぜい}をとるな。またすべての働きに使うのを許してやれ」とおおせになりました。

それでそのまる三年の間というものは、宮中^{きゆううちゆう}へはどこからも何一つお納物^{おさめもの}をしないので、天皇もそれはそれはひどいご不自

由をなさいました。たとえばお宮が破れこわれても、お手も
にはそれをおつくろいになるご費用もおありになりませんでし
た。しかし天皇はそれでも寸分すんぶんもおいといにならないで、雨が
ひどく降るたんびには、おへやの中へおけをひき入れて、ざあ
ざあと漏りも入る雨あまもれをお受けになり、ご自分自身はしずく
のおちないところをお見つけになつて、御座所ござしよを移し移ししてお
しのぎになりました。

それから三年の後に、再び山にのぼつてご覧らんになりますと、
こんどはせんとはすっかりうつて変わつて、お目の及およぶ限かぎり、
どの村々にも煙がいつぱい、勢いよく立ちのぼつておりました。
天皇はそれをご覧になつて、みなのも、もうすっかりゆたか
になつたとおっしゃつて、ようやくご安心なさいました。そし
て、そこではじめて租税そぜいや夫役ふやくをおおせつけになりました。

すると人民は、もう十分にたくわえもできていましたので、
お納物おさめものをするにも、使い働うけたまわきにあがるのにも、それこそ樂々と
ご用を承うけたまわることができました。

天皇はしもじもに對して、これほどまでに思いやりの深い方
でいらつしやいました。ですから後の代よからも永くお慕したい申し
あげてそのご一代いちだいを聖帝せいだいの御代みよとお呼び申まうしております。

二

この天皇の皇后でいらした岩野媛いわのひめは、それはそれは、たい
へんにごしつとのはげしいお方で、ちよつとのことにも、じき
に足ずりをして、火がついたようにお騒さわぎたてになりました。
それですから、宮中きゆうちゆうめに召し使つかわれている婦人たちは、天皇のお

へやなぞへは、うつかりはいることもできませんでした。

あるとき天皇はそのころ吉備きびといつていた、今の備前びぜん、備中びつちゅう

地方ちほうの、黒崎くろさきというところに、海部直あまのあたえという者の子で、黒媛くろひめと

いうたいそうきりようのよい娘むすめがいますとお聞きになり、すぐに召めしのぼせて宮中でお召し使いになりました。

ところが皇后がことごとにつけて、あまりにねたみおいじめになるものですから、黒媛くろひめはたまりかねてとうとうお宮を逃にげ出しておうちへ帰つてしまいました。

そのとき天皇は、高殿たかどのにお上りになって、その黒媛くろひめの乗つている船が難波なにわの港を出て行くのをご覧らんになりながら、

かわいそうに、あそこに黒媛くろひめがかえつて行く。

あの沖おきに、たくさんこぶねの小船にまじつて、あの女の船が出て

行くよ。

とこういう意味のお歌をお歌いになりました。

すると皇后は、そのことをお聞きになつて、ひどく怒おこつておしまいになり、すぐに人をやつて、黒媛くろひめをむりやりに船からひきおろさせて、はるかな吉備きびの国まで、わざと歩いておかえしになりました。

天皇はその後も、黒媛くろひめのことをしじゅうあわれに思い思いお

暮あわじしまらしになつていました。そんなわけで、天皇はついにある日、

淡路島を見に行くとおつしやつて皇后のお手前をおつくろいになり、いったんその島へいらしたうえ、そこから、黒媛くろひめをたずねて、こつそり吉備きびまで、おくだりになりました。

黒媛くろひめは天皇を山方やまかたというところへおつれ申しました。そして、

召^めし上がり物にあつものをこしらえてさしあげようと思ひまして、あおなをつみに出ました。すると天皇もいつしよに出てご覧になり、たいそうお興^{きよう}深くおぼしめして、そのお心持をお歌にお歌いになりました。

天皇がいよいよお立ちになるときは、黒媛^{くろひめ}もお別れの歌を歌いました。媛^{ひめ}は天皇がわざわざそんなになすつて、隠^{かく}れ隠れてまでおたずねくだすつたもつたいなさを、一生お忘れ^{わす}れ申すことができませんでした。

三

皇后はその後、ある宴^{えん}会^{かい}をおもよおしになるについて、そのお酒をおつぎになる御綱^{みつな}柏^{かしわ}というかしわの葉をとり、わざわざ

ざ紀伊国^{きのくに}までお出かけになつたことがあります。

そのおるすの間、天皇のおそばには八田若郎女^{やたのわかいらつめ}という女官^{じよかん}が

お仕え申しております。

皇后はまもなく御綱^{みつながしわ}柏の葉をお船につんで、難波^{なにわ}へ向かつて

帰つていらつしやいました。そのお途中で、お供の中のある女

たちの乗つてゐる船が、皇后のお船におくれて行き行きするう

ちに、難波^{なにわ}の大渡^{おおわた}という海まで来ますと、向こうから一そうの

船が来かかりました。その中には、高津^{たかつ}のお宮のお飲み水を取

る役所で働いていた、吉備^{きび}の生まれの、ある身分^{みぶん}の低い仕丁^{よぼろ}で、

おいとまをいただいておうちへ帰るのが、乗り合せておりま

した。その者が船のすれちがいに、

「天皇さまは、このごろ八田若郎女^{やたのわかいらつめ}がすっかりお気に入り、そ

れはそれはいそごちよう愛になつてゐるよ」としやべつて

行きました。それを聞いた女どもはわざわざ大急ぎで皇后のお船に追いついて、そのことを皇后のお耳に入れました。

そうすると、例のご気性きしょうの皇后は、たちまちじりじりなすつ

て、せっかくそこまで持つておかえりになった御綱みつな柏かしわの葉を、

すっかり海へ投げすてておしまいになりました。それからまも

なく船はこちらへ帰りつきましたが、皇后は若郎女わかしらつめのことをお

考えになればなるほどおくやしくて、そのお腹立はらだちまぎれに、港

へおつけにならないで、ずんずん船を堀江ほりえへお入れになり、そ

こから淀川よどがわをのぼつて山城やましろまで行つておしまいになりました。

その時皇后は、

「私はあんまりにくらしくてたまらないので、こんなにあても

なく山城やましろの川をのぼつて来たものの、思えばやつぱり天皇のお

そばがなつかしい。今この目の前の川べりには、鳥葉樹さしづのきがはえ

ている。その木の下には、茂しげった、広葉ひろはのつばきがてかてかとまっかに咲さいている。ああ、あの花のように輝かがやきに充みち、あの広葉のようにお心広く、おやさしくいらつしやる天皇を、どうして私はおしたわしく思わないでいられよう」とこういう意味のお歌をお歌いになりました。

しかしそれかといつてこのまま急にお宮へお帰りになるのも少しいまいましくおぼしめすので、とうとう船からおあがりになつて、大和やまとの方へおまわりになりました。

そのときにも皇后は、

「私わたしはとうとう山城川やましろがわをのぼり、奈良ならや小楯おだてをも通りすぎて、こんなにあちこちさまよつてはいるけれど、それもとこをひとつ見たいのでもない。見たいのは高津たかつのお宮よりほかにはなんにもない」という意味をお歌いになりました。

それからまた山城へひきかえして、筒木というところへおいでになり、そこに住まっている朝鮮の帰化人の奴里能美という者のおうちへおとどまりになりました。

天皇はすべてのことをお聞きになりますと、鳥山という舎人に向かつて、

「おまえ早く行つて会つてこい」という意味をお歌でおつしやつて、皇后のところへおつかわしになりました。そのつぎには、丸邇臣口子という者をお召しになつて、

「皇后はあんなにいつまでもすねて、お宮へもかえつて来ないけれど、しかし心の中ではわしのことを思っているに相違ない。二人の間であるものを、そんなに意地を張らないでもよいであろうに」という意味を二つのお歌にお歌いになつて、また改めて口子をお迎えにおやりになりました。

お使いの口子くちこは、奴里能美ぬりのみのおうちへ着きますと、天皇のそのお歌をかたときも早く皇后に申しあげようと思ひまして、御座所ござしよのお庭先にわさきへうかがいました。

そのときにちょうどひどい大雨がざあざあ降つておりました。

口子くちこはその雨の中をもいとわず、皇后のおへやの前の地じびたへ平伏へいふくしますと、皇后は、つんとして、いきなり後ろの戸口の方へ立つて行つておしまいになりました。口子くちこは怖おそる怖おそるそちら

がわにまわつて平伏しました。そうすると皇后はまたついと前の方の戸口へ来ておしまいになりました。口子くちこはあっちへ行つ

たりこつちへ来たりして土の上にひざまずいてゐるうちに、雨

はいよいよどしやぶりに降りつつて、そのたまり水が腰こしまで

浸ひたすほどになりました。口子くちこは赤いひものついた、あい染ぞめの

上着うわぎを着ておりましたが、そのひもがびしよびしよになつて赤

い色がすっかり流れ出したので、しまいには青い着物もまっかに染まってしまいました。

そのとき皇后のおそばには、口子の妹の口媛くちひめという者がお仕え申しておりました。口媛はおにいさまのそのありさまを見て、「まあおかわいそうに、あんなにまでしておものを申しあげようとしているのに、見ている私には涙なみだがこぼれてくる」という意味を歌に歌いました。

皇后はそれをお聞きになつて、

「兄とはだれのことか」とおたずねになりました。

「さつきから、あすこに、水の中にひれ伏ふしておりますのが私の兄の口子くちこでございます」と、口媛は涙をおさえてお答え申しました。

口子はそのあとで、口媛と奴里能美ぬりのみの二人に相談して、これ

はどうしても天皇にこちらへいらしつていただくよりほかには手だてがあるまいと、こう話を決めました。そこで口子くちこは急いでお宮へかえつて申しあげました。

「まいりまして、すっかりわけをお聞き申しますと、皇后さまがあちらへお出向きになりましたのは、奴里能美ぬりのみのうちに珍めずしい虫を飼かつておりますので、ただそれをご覧らんになるためにおでかけになりましたのでございます。そのほかにはけつしてなんのわけもおありにはなりません。その虫と申しますのは、はじめはう虫でいますのが、つぎには卵たまごになり、またそのつぎには飛ぶ虫になりました、順々に三度姿すがたをかえる、きたいな虫だそうでございます」と、口子くちこは子供でも心得ているかいこのことを、わざと珍めずしそうに、じょうずにこう申しあげました。

すると天皇は、

「そうか、そんなおもしろい虫がいるなら、わしも見に行こう」
とおつしやつて、すぐにお宮をお出ましになり、奴里能美のお
うちへ行幸ぎようこうになりました。

奴里能美は、口子くちこが申しあげたとおりの三みとおりの虫を、前
もつて皇后に献上けんじようしておきました。

天皇は皇后のおへやの戸の前にお立ちになつて、

「そなたがいつまでも怒おこつたりしてゐるので、とうとうみんな
がここまで出て来なければならなくなつた。もうたいていにし
てお帰りなさい」とお歌いになり、まもなくおともどもに難波なにわ
のお宮へご還幸かんこうになりました。

天皇はそれといつしよに、八田若郎女やたのわかいらつめにおいとまをおつかわ
しになりました。しかしそのかわりには、郎女いらつめの名まえをいつ
までも伝え残すために、八田部やたべという部族をおこしらえになり

ました。

四

それからあるとき天皇は、女鳥王めとりのみこという、あるお血筋ちすじの近い方きゆうちゆうを宮中めにお召しかかえになろうとして、弟さまの速総別王はやぶさわけのみこをお使いにお立てになりました。

王みこはさつそくいらしつて、そのおぼしめしをお伝えになりました。すと、女鳥王めとりのみこはかぶりをふつて、

「いえいえ私は宮中へはお仕え申したくございません。皇后さまがあんなにごしつと深くいらつしやるので、八田若郎女やたのわかいらつめだつてご奉公ができないでさがつてしまいましたではございませんか。それよりもこんな私でございますが、どうぞあなたのお嫁よめ

にしてくださいまし」とお頼たのみになりました。

それで王みこはその女鳥王めとりのみこをお嫁になさいました。そして天皇に對しては、いつまでもご返事を申しあげないままでいらつしやいました。

すると天皇は、しまいにめとりのみこご自分で女鳥王のおうちへお出かけになり、戸口のしきいの上にお立ちになつてのぞいてご覧になりますと、王みこはちようど中でお機はたを織つていらつしやいました。

天皇は、

「それはだれの着物を織つているのか」とお歌に歌つてお聞きになりました。すると女鳥王めとりのみこもやはりお歌で、

「これは速はや総ふさ別王わけのみこにお着せ申しますのでございます」とお答えになりました。

天皇はそれをお聞きになつて、二人のことをすっかりおさと

りになり、そのままお宮へおかえりになりました。

めとりのみこ

はやぶさわけのみこ

女鳥王はそのあとで、まもなく速総別王が出ていらつしやいますと、

「もし。あなたさまよ。ひばりでさえもどんどん大空へかけのぼるではございませんか。あなたはお名まえもたかの中のはやぶさと同じでいらつしやるのに、さあ早くささぎをとり殺しておしまいなさい」とこういう意味をお歌いになりました。それはいうまでもなく、おおささぎのみこと天皇のお名が大雀命なので、それをささ

ぎにかよわせて、一ときも早く天皇をお殺し申してご自分でお位におつきになるようにと、おそ怖ろしい入れぢえをなすつたのでした。

そうすると、そのお歌のことが、いつのまにか天皇のお耳にはいりました。天皇はすぐに兵をあつめて速総別王を殺しにお

はやぶさわけのみこ

つかわしになりました。

はやぶさわけのみこ

速総別王はそれと感づく^{やまと}と、びつくりして、女鳥王^{めとりのみこ}といつしよ

にすばやく大和へ逃げ出しておしまひになりました。そのお

くらはしやま

途中、倉橋山^{くらはしやま}という険^{けわ}しい山をお越^こえになるときに、かよわい

めとりのみこ

女鳥王はたいそうご難渋^{なんじゆう}をなすつて、夫^{みこ}の王のお手にすがりす

がりして、やつと上までお上りになりました。

やまと

そに

お二人はそこからさらに同じ大和の曾爾^{そに}というところまでい

らつしやいますと、天皇の兵がそこまで追いついて、お二人を

刺^さし殺してしまいました。

ひき

そのとき軍勢を率^{ひき}いて来たのは山辺大楯連^{やまべのおおだてのむらじ}というつわもので

むらじ

めとりのみこ

した。連は女鳥王のお死がいのお手首に、りっぱなお腕飾^{うでかざ}りが

ついているのを見て、さつそくそれをはぎ取つて、自分の家内^{かない}

に持つてかえつてやりました。

そのうちに宮中にあるご宴会えんかいがあつて、臣下の者の妻女たちが、おおぜいお召めしにあずかりました。すると大楯連おおだてのむらじの妻は、めとりのみこ女鳥王のお腕飾りを得意とくいらしく手首に飾かざつてまいりました。皇后はそれらの女たちへ、お手ずから、お酒を盛もるかしの葉をおくだしになりました。みんなはかわるがわる御前ごぜんへ出て、それをいただいてさがりました。

皇后はそのときに、ふと、連むらじの妻の腕飾りにお目がとまりました。するとそれはかねてお見覚えみおぼのある女鳥王めとりのみこのお持物もちものでした。たので皇后はにわかにお顔色をお変えになり、この女にばかりはかしの葉をおくだしにならないで、そのまますぐにご宴席えんせきから追い出しておしまいになりました。そしてさつそく夫の連むらじをお呼よびつけになつて、

「そちは人の腕飾りをぬすんで来て家内にやつたろう。あの

はやぶさわけ
速総別と女鳥めとりの二人は、天皇に対して怖ろしい大罪を犯そうとしたのだから、かれたちが殺されたのはもとよりあたりまえである。しかしそちなぞからいえば、二人とも目上の王みこたちではないか。その人が身につけている物を、死んでまだ膚はだのあたたかいうちにはぎとつて、それをおのれの妻に与あたえるなぞと、まあ、よくもそんなひどいことができたね」とおつしやつて、ぐんぐんおいじめつけになつたうえ、ようしやなくすぐ死刑しけいに行なわせておしまいになりました。

五

この天皇の御代みよに、兎寸川とさがわというある川の西に、大きな大きな大木が一本立っておりまして。いつも朝日がさすたんびに、そ

の木の影が淡路の島までとどき、夕日が当たると、河内の高安山よりももつと上まで影がさしました。

土地の者はその木を切つて船をこしらえました。するとそれはそれはたいそう早く走れる船ができました。みんなその船に「枯野」という名前をつけました。そして朝晩それに乗つて、淡路島のわき出るきれいな水をくんで来ては、それを宮中のお召し料にさしあげておりました。

後にみんなは、その船が古びこわれたのを燃やして塩を焼き、その焼け残った木で琴を作りました。その琴をひきますと、音が遠く七つの村々まで響いたということです。

天皇はついにおん年八十三でおかくれになりました。

大鈴小鈴
おおすずこすず

一

仁徳天皇にんとくてんのうには皇子おうじが五人、皇女おうじよが一人おありになりました。
その中で伊邪本別いざほわけ、水齒別みずはわけ、若子宿禰わくごのすくねのお三方さんかたがつぎつぎに天皇のお位におのぼりになりました。

いちばんのお兄上の伊邪本別皇子いざほわけのおうじは、お父上の亡なきおあとをおつぎになつて、同じ難波なにわのお宮で、履仲天皇りちゆうてんのうとしてお位におつきになりました。

そのご即位そくいのお祝いのときに、天皇はお酒をどつきり召めしあ

がつて、ひどくお酔よいになつたままおやすみになりました。

すると、じき下の弟さまの中津王なかつのみこが、それをしおに天皇をお

殺し申してお位を取ろうとおぼしめして、いきなりお宮へ火をおつけになりました。火の手は、たちまちぼうぼうと四方へ燃え広がりました。お宮じゅうの者はふいをくつて大あわてにあわて騒さわぎました。

天皇は、それでもまだ前後もなくおよつていらつしやいました。それを阿知直あちのあたえという者が、すばやくお抱かかえ申しあげ、むりやりにうまにお乗せ申して、大和やまとへ向かつて逃にげ出して行きました。

お酔いつぶれになつていた天皇は、河内かわちの多遲比野たじひのというところまでいらしたとき、やつとおうまの上でお目ざめになり、「ここはどこか」とおたずねになりました。阿知直あちのあたえは、

「中津王^{なかつのみこ}がお宮へ火をお放ちになりましたので、ひとまず大和^{やまと}の方へお供^{とも}をしてまいりますところでございます」とお答え申しました。

天皇はそれをお聞きになつて、はじめてびつくりなさり、

「ああ、こんな多遅比^{たじひ}の野の中に寝^ねるのだとわかつていたら、夜風^{よかぜ}を防ぐたてごもりと持つて来ようものを」

と、こういう意味のお歌をお歌いになりました。

それから埴生坂^{はにうざか}という坂までおいでになりました、そこから、はるかに難波^{なにわ}の方をふりかえつてご覧^{らん}になりますと、お宮の火はまだ炎々^{えんえん}とまっかに燃え立っております。天皇は、

「ああ、あんなに多くの家が燃えている。わが妃^{きさき}のいるお宮も、あの中に焼けているのか」という意味をお歌いになりました。それから同じ河内^{かわち}の大坂^{おおさか}という山の下へおつきになりますと、

向こうから一人の女が通りかかりました。その女に道をおたずねになりますと、女は、

「この山の上には、いくさどうぐ戦道具を持った人たちがおおぜいで道をふさいでおります。やまと大和の方へおいでになりますのなら、たじまじ当麻道からおまわりになりましたほうがよろしゅうございましょう」と申しあげました。

天皇はその女の言うとおりになすつて、ご無事にやまと大和へおはいりになり、いそのかみ石上のじんぐう神宮へお着きになつて、仮にそこへおとどまりになりました。

すると二ばんめの弟さまの水齒別王が、みずはわけのみこその神宮へおうかがいになつて、天皇におめみえをしようとなさいました。天皇はおそばの者をもつて、

「そちもきつとなかつのみこ中津王とはら腹を合せているのであらう。目どお

りは許されない」とおおせになりました。王は、

「いえいえ私はそんなまちがった心は持つておりません。けつして中津王なぞと同腹ではございません」とお言いになりました。た。天皇は、

「それならば、これから難波へかえつて、中津王を討ちとつてまいれ。その上で対面しよう」とおつしやいました。

二

水齒別王は、大急ぎでこちらへおかえりになりました。そして中津王のおそばに仕えている、曾婆加里というつわものをお召しになつて、

「もしそちがわしの言うことを聞いてくれるなら、わしはまも

なく天皇になつて、そちを大臣にひきあげてやる。どうだ、そうして二人で天下を治めようではないか」とじょうずにおだましかけになりました。すると曾婆加里は大喜びで、

「あなたのおおせなら、どんなことでもいたします」

と申しあげました。皇子はその曾婆加里にさまざまのお品物をおくだしになつたうえ、

「それでは、そちが仕えているあの中津王を殺してまいれ」とお言いつけになりました。曾婆加里は、

「かしこまりました」と、ぞうさもなくおひき受けして飛んをかえり、王がかわやにおはいりになろうとするとところを待ち受けて、一刺しに刺し殺してしまいました。

水齒別王は、曾婆加里とごいっしょに、すぐに大和へ向かつてお立ちになりました。その途中、例の大坂の山の下までおい

でになったとき、命はつくづくお考えになりました。

「この曾婆加里めは、私のためには大きな手柄を立てたやつではあるが、かれ一人からいえば、主人を殺した大悪人である。こんなやつをこのままおくと、さきざきどんな怖ろしいことをしだすかわからない。今のうちに手早くかたづけてしまつてやろう。しかし、手柄だけはどこまでも賞めておいてやらないと、これから後、人が私を信じてくれなくなる」

こうお思ひになつて急にその手だてをお考えさだめになりました。それで曾婆加里に向かつて、

「今晚はこの村へとまることにしよう。そしてそちに大臣の位をさずけたうえ、あすあちらへおうかがいをしよう」とおつしやつて、にわかになつてそこへ仮のお宮をおつくりになりました。そしてさかななご宴会をお開きになつて、そのお席で曾婆加里を大臣

の位におつけになり、すべての役人たちに言いつけて礼拝をおさせになりました。

曾婆加里そばかりはこれでいよいよ思いがかなったと言つて大得意だいとくいになつて喜びました。水齒別王みずはわけのみこは、

「それでは改めて、大臣のおまえと同じさかずきで飲み合おう」とおつしやりながら、わざと人の顔よりも大きなさかずきへなみなみとおつがせになりました。そして、まずご自分で一口めしあがつた後、曾婆加里そばかりにおくだしになりました。曾婆加里そばかりはそれをいただいて、がぶがぶと飲みはじめました。

王みこは曾婆加里そばかりの目顔めがおがそのさかずきで隠かくれるといつしよに、かねてむしろの下にかくしておおきになつた剣つるぎを抜き放ぬして、あッというまに曾婆加里そばかりの首を切り落としておしまいになりました。

それからあくる日そこをお立ちになり、大和の遠飛鳥やまととおあすかという村までおいでになつて、そこへまた一晚ばんおとまりになつたうえ、けがれ払いのお祈りをなすつて、そのあくる日石上いそのかみの神宮へおうかがいになりました。そしておおせつけのとおり、中津王なかつのみこを平らたいげてまいりましたとご奏上そうじょうになりました。

天皇はそれではじめて王みこを御前ごぜんへお通しになりました。それから阿知直あちのあたえに対しても、ごほうびに蔵くらの司つかさという役におつけになり、たいそうな田地でんちをもおくだしになりました。

三

天皇は後に大和やまとの若桜宮わかざくらのみやにお移りになり、しまいにおん年六十四でおかくれになりました。そのおあとは、弟さまの水齒別王みずはわけのみこ

がお継ぎになりました。後に反正天皇とお呼び申すのがこの天皇のおんことです。

天皇はお身のたけが九尺二寸五分、お齒の長さが一寸、幅が二分おありになりました。そのお齒は上下とも同じようによくおそろいになって、ちようと玉をつないだようにおきれいでした。河内の多遲比の柴垣宮で、政をおとりになり、おん年六十でおかくれになりました。

四

反正天皇のおあとには、弟さまの若子宿禰王が允恭天皇としてお位におつきになり、大和の遠飛鳥宮へお移りになりました。天皇は、もとからある不治のご病氣がおありになりましたの

で、このからだでは位にのぼることはできないとおつしやつて、はじめには固くかたご辞退じたいになりました。しかし、皇后やすべての役人がしいておねがい申すので、やむなくご即位そくいになったのでした。

するとまもなく新羅国しらぎのくにから、八十一そうの船で貢物を献けんじて来ました。そのお使いにわたつて来た金波鎮こんばちん、漢起武かんきむという二人の者が、どちらともたいそう医薬のことに通じておりまして、天皇の永い間ながのご病気を、たちまちおなおし申しあげました。そのために天皇はついにおん年七十八までお生きのびになりました。

天皇は日本じゅうの多くの部族の中で、めいめいいいかげんなかつてな姓せいを名のっているものが多いのをお嘆なげきになり、大和やまとのある村へ玖訂瓮くかえといつて、にえ湯のたぎっているかまをおす

えになって、日本じゅうのすべての氏姓しせいを正しくお定めになりました。そのにえ湯の中へ一人一人手を入れさせますと、正直しょうじきにほんとうの姓せいを名のっている者は、その手がどうにもなりません、偽りいつわを申し立てているものは、たちまち手が焼けただれてしまうので、いちいちうそとほんとうとを見わけることができました。

五

天皇がおかくれになったあとにはいちばん上の皇子おうじの、木梨きなし輕皇子かるのおうじがお位におつきになることにきまつておりました。ところが皇子はそくいご即位になるまえに、お身持ちの上について、ある言うに言われないまちがいごとをなすつたので、朝廷ちやうていのすべての役人

やしもじもの人民たちがみんな皇子をおいとい申して、弟さまの穴穗王あなほのみこのほうへついてしまいました。

軽皇子はこれでは、うつかりしていると、穴穗王方あなほのみこがたからどん

なことをしむけるかもわからないとお怖れおそになり、大前宿禰おおまえのすくね、

こまえのすくね

小前宿禰という、きょうだい二人の大臣のうちへお逃げにこみに

なりました。そしてさつそくいくさ道具をおととのえになり、

かるや

軽矢やといって、矢の根を銅でこしらえた矢などを、どつきり

こしらえて、待ちかまえていらつしやいました。

それに対して、穴穗王あなほのみこのほうでもぬからず戦いくさの手配てくばりをなさ

いました。こちらでも穴穗矢あなほやといって、後の代よの矢と同じよう

に鉄の矢じりのついた矢を、どんどんおこしらえになりました。

そしてまもなく王みこご自身が軍務をおひきつれになって、大前おおまえ、

こまえ

小前せの家をお攻めかこ囲みになりました。

王はちようどそのとき急に降り出したひようの中を、まつ先に突進して、門前へ押しよせていらつしやいました。

「さあ、みんなもわしのとおりに進んで来い。ひようの雨は今にやむ。そのひようのやむように、すべてを片づけてしまうのだ。さあ来い来い」という意味をお歌いになって、味方の兵をお招きになりました。

すると大前、小前の宿禰は、手をあげひぎをたたいて、歌い踊りながら出て来ました。

「何をそんなにお騒ぎになる。宮人のはかまのすそのひもについた小さな鈴、たとえばその鈴が落ちたほどの小さなことに、宮人も村の人も、そんなに騒ぐにはおよびますまい」

こういう意味の歌を歌いながら穴穂王のご前に出て来て、
「もしあなたさま、軽皇子さまならわざわざお攻めになります

には及びません。ご同腹どうふくのお兄上をお攻めになつては人が笑わらいます。皇子さまは私がめしとつてさし出します」と申しあげました。

それで穴穂王あなほのみこは囲とみを解といて、ひきあげて待つておいでになりますと、二人の宿禰すくねは、ちゃんと軽皇子かるのおうじをおひきたて申してまいりました。

六

軽皇子かるのおうじには、軽太郎女かるのおいらつめとおつしやるたいそう仲なかのよいご同腹どうふくのお妹さまがおありになりました。太郎女おおいらつめは世よにまれなお美しい方で、そのきれいなおからだの光がお召物めしものまでも通して光つていたほででしたので、またの名を衣通郎女そとおしのいらつめと呼よばれていらつ

しやいました。

あなほのみこ穴穗王の手にわたお渡されになつたかるのおうじ輕皇子は、その仲のよいおおいらつめ大郎女

のお嘆なげきを思いやつて、

「ああいらつめ郎女よ。ひどく泣くなと人が聞いて笑わらいそしる。羽は狭さの山

のやまばとのように、こつそりと忍しのび泣きに泣くがよい」という意味の歌をお歌いになりました。

あなほのみこ穴穗王は、かるのおうじ輕皇子を、そのまま伊予いよへ島流しにしておしまい

になりました。そのときおおいらつめ大郎女は、

「どうぞ浜べをお通りになつても、かきがらをお踏ふみになつて、けがをなさらないように、よく氣をつけてお歩きくださいまし」という意味の歌を、泣き泣きお兄上お兄上にお捧げになりました。

おおいらつめ

大郎女はそのおあとでも、お兄上のことばかり案じつづけていらつしやいましたが、ついにたまりかねてはるばる伊予いよまで

おあとを追つていらつしやいました。

かるのおうじ

軽皇子はそれはそれはお喜びになつて、おおいらつめ大郎女のお手を取り

ながら、

「ほんとうによく来てくれた。鏡のように輝き、玉のように光つている、きれいなおまえがいればこそ、やまと大和へも帰りたいともだえていたけれど、おまえがここにいてくれれば、やまと大和もうちもなんであろう」とこういう意味のお歌をお歌いになりました。まもなくお二人は、その土地で自殺しておしまいになりました。

しかの群むれ、ししの群むれ

一

穴穗王あなほのみこは、おあにいさまの軽皇子かるのおうじを島流しにおしになつた後、
第二十代の安康天皇あんこうてんのうとしてお立ちになり、大和やまとの石上いそのかみの穴穗宮あなほのみや
へおひき移りになりました。

天皇は弟さまの大長谷皇子おおはつせのおうじのために、仁徳天皇にんとくてんのうの皇子おうじで、ちよ
うど大おじさまにおあたりになる大日下王おおひさかのみことおつしやる方のお
妹さまの、若日下王わかくさかのみこという方を、お嫁よめにもらおうとお思ひにな
りました。

それで根臣ねのおみという者を

おおくさかのみこ

大日下王のところへおつかわしになつ

て、そのおぼしめしをお伝えになりました。おおくさかのみこ大日下王はそれを

お聞きになりますと、四たび礼拝をなすつたうえ、

「実は私も、万一そういうご大命たいめいがくだるかもわからないと思

いましたので、妹は、ふだん、外へも出さないようにしていま

した。まことにおそれ多いことながら、それではおおせのまま

にさしあげますでございましょう」とたいそう喜んでお受けを

なさいました。しかしただ言葉ことばだけでご返事を申しあげたので

は失礼だとお考えになつて、天皇へお礼のお印しるしに、押木おしぎの玉か

ずらというりっぱな髪飾かみかざりりを、若日下王わかくさかのみこから献上品けんじょうひんとしておこ

とづけになりました。

するとお使いの根臣ねのおみは、

らんぼう

乱暴にも、その玉かずらを途中で自

分ぬすが盗み取つたうえ、天皇に向かつては、

「おおせをお伝えいたしましたが、王はみこお聞き入れがございません。おれの妹でもあるものを、あんなやつしきものの敷物にやれるかとおっしゃって、それはそれは、刀の柄つかに手をかけてご立腹になりました」

こう言つて、まるで根のないことをこしらえて、ひどいざん言げんをしました。

天皇は非常にお怒りいかになつて、すぐに人を派はせて大日下王おおくさのみこを殺しておしまいになりました。そして王みこのお妃きさきの長田大郎女ながたのおいらつめをめしいれて自分の皇后になさいました。

あるとき天皇は、お昼寝ひるねをなさろうとして、お寢床ねどこにおよこたわりになりながら、おそばにいらした皇后に、

「そちはなにか心の中に思っていることはないか」とおたずねになりました。皇后は、

「いいえけつしてそんなはずはございません。これほどおてあつ
いお情けをいただいておりますのに、このうえ何を思いましよ
う」とお答えになりました。

そのとき、ちようど御殿ごてんの下には、皇后が先の大日下王おおくさかのみことの
間におもうけになった、目弱王まよわのみことおつしやる、七つにおなりにな
るお子さまが、ひとりで遊んでおいでになりました。

天皇はそれとはご存じないものですから、ついうっかりと、
「わしはただ一つ、いつも気になってならないことがある。そ
れは目弱まよわが大きくなつた後に、あれの父はわしが殺したのだと
聞くと、わしに復しゆうをしはしないだろうか、それが心配
である」とこうおおせになりました。

目弱王まよわのみこは下でそれをお聞きになつて、それではお父上を殺し
たのは天皇であつたのかとびつくりなさいました。

そのうちに、まもなく天皇はぐつすりお眠りねむになりました。
目弱王まよわのみこはそこをねらつてそつと御殿ごてんへおあがりになり、おまくらもとにあつた太刀たちを抜き放ぬして、いきなり天皇のお首をお切りになりました。そしてすぐにお宮を抜け出して、都夫良意富美つぶらおおみという者のうちへ逃にげこんでおしまいになりました。

天皇はそのままお息がお絶えになりました。お年は五十六歳でいらつしやいました。

そのときには、弟さまの大長谷皇子おおはつせのおうじは、まだ童髪どうはつをおゆいになつてゐる一少年でおいでになりましたが、目弱王まよわのみこが天皇をお殺し申したとお聞きになりますと、それはそれはお憤りいきどおになつて、すぐにお兄上の黒日子王くろひこのみこのところへかけつけておいでになり、

「おあにいさま、たいへんです。天皇をお殺し申したやつがい

ます。どういたしましう」とご相談をなさいました。すると、
黒日子王は天皇のご同腹どうふくのおあにいさまでおありになりながら、
てんで、びつくりなさらないで平氣にかまえていらつしやいま
した。大長谷皇子はそれをご覧らんになりますと、くわツとお怒りいか
になり、

「あなたはなんとという頼たのもしげもない人でしよう。われわれの
天皇がお殺されになつたのじゃありませんか。そして、それは、
またあなたのおあにいさまじゃありませんか。それを平氣で聞
いているとは何ごとです」とおつしやりながら、いきなりえり
もとをひツつかんでひきずり出し、刀を抜くなり、一打ちひとつうちに打
ち殺しておしまいになりました。

皇子おうじはそれからまたつぎのおあにいさまの白日子王しろひこのみこのところ
へおいでになつて、同じように、天皇がお殺されになつたこと

をお告げになりました。白日子王しろひこのみこは天皇のご同腹どうふくの弟さままでいらつしやいました。それなのに、この方も同じく平氣な顔をして、すましておいでになりました。皇子はまたそのおあにいさまのえり首をつかんでひきずり出して、小治田おはりだという村まで引っぱつていらつしやいました。そしてそこへ穴あなを掘ほつて、その中へまつすぐに立たせたまま、生き埋うめに埋うめておしまいになりました。

王みこはどんどん土をかけられて、腰こしまでお埋められになつたとき両方りょうほうのお目の玉が飛び出して、それなり死んでおしまいになりました。

おおはつせのおうじ　大長谷皇子はそれから軍勢をひきつれて、目弱王をかくまつ
ている都夫良意富美の邸をおとり囲みになりました。すると、
こちらでもちゃんと手くばりをして待ちかまえておりまして、
それツというなり、ちょうどあしの花が飛び散るように、もう
もうと矢を射出しました。

おおはつせのおうじ　大長谷皇子は、その前から、この都夫良の娘の訶良媛という人
をお嫁におもらいになることにしていらいつしやいました。皇子
は今どんどん射向ける矢の中に、矛を突いてお突ツ立ちになり
ながら、

「都夫良よ、訶良媛はこのうちにいるか」と大声でおどなりに
なりました。

都夫良はそれを聞くと、急いで武器を投げすてて、皇子の御前
へ出て来ました。そして八度伏し拝んで申しあげました。

「娘^{むすめ}の詞良媛^{からひめ}はお約束のとおり必ずあなたにさしあげます。また五^いか村^{そん}の私の領地も、娘^{むすめ}に添^そえて献上^{けんじょう}いたします。ただどうぞ、今しばらくお待ちくださいまし。私がただ今すぐに娘をさしあげかねますわけは、昔^{むかし}から臣下の者が皇子さま方のお宮へ逃^にげかくれたことは聞いておりますが、貴^{とうと}い皇子さまがしもじもの者のところへお逃^{のが}れになったためしはかつて聞きません。私はいかに力いっぱい戦いまして、あなたにお勝ち申すことができないのは十分わきまえております。しかし、目弱王^{まよわのみこ}は、私ごとき者をも頼^{たよ}りにしてくださって、いやしい私のうちへおはいりくださっているのでございますから、私といたしましては、たとえ死んでもお見捨^{みす}て申すことはできません。娘はどうぞ私が討^うち死^じにをいたしましたあとで、おめしつれくださいまし」

こう申しあげて御前をさがり、再び戦道具を取って邸にはいつて、いっしょうけんめいに戦をいたしました。

そのうちに都夫良はとうとうひどい手傷を負いました。みんなも矢だねがすっかり尽きてしまいました。それで都夫良はまよわのみに目弱王に向かつて、

「私もこのとおりで、もはや戦を続けることができません。いかがいたしましょう」と申しあげました。

お小さな目弱王は、

「それではもうしかたがない。早く私を殺してくれ」とおっしゃいました。都夫良はおおせに従つてすぐに王をお刺し申した上、その刀で自分の首を切つて死んでしまいました。

このさわぎが片づく^{かた}とまもなく、ある日、大長谷皇子^{おおはつせのおうじ}のところへ、近江^{おうみ}の韓袋^{からぶくろ}という者が、そちらの蚊屋野^{かやの}というところに、ししやしかがひじょうにたくさんおりますと申し出ました。

「そのどつさりおりますことと申しますと、群がり集まった足はちようどすすきの原のすすきのようでごさいますし、群がった角^{つの}は、ちようど枯木^{かれき}の林のようでごさいます」と韓袋^{からぶくろ}は申しあげました。

皇子^{おうじ}は、ようし、とおつしやつて、履仲天皇^{りちゅうてんのう}の皇子で、ちようどおいとこにおあたりになる、忍鹵王^{おしはのみこ}とおつしやるお方とお二人で、すぐに近江^{おうみ}へおくだりになりました。お二人は蚊屋野^{かやの}にお着きになりますと、ごめいめに別々の飯屋^{かりや}をお立てになつて、その中へおとまりになりました。

そのあくる朝、忍齒王おしはのみこは、まだ日も上らないうちにお目ざめ

になりました。それでまったくなんのお気もなく、すぐにおう

まにめして、大長谷皇子おおはつせのおうじのお飯屋へ出かけておいでになりました

た。こちらでは、皇子おうじはまだよくおよつていらつしやいました。

王みこは、皇子のおつきの者に向かつて、

「まだお目ざめでないようだね。もう夜よも明けたのだから、早

くお出かけになるように申しあげよ」とおつしやつて、そのま

まおうまをすすめて、りよう場へお出かけになりました。

皇子のおつきの者は、皇子に向かつて、

「ただ今忍齒王おしはのみこがおいでになりました、これこれとおつしやいま

した。なんだかおつしやることが変ではございませんか。けっ

してごゆだんをなさいますな。お身固かためも十分になすつてお出

かけなさいますように」と悪く疑うたがつてこう申しあげました。そ

れで皇子も、わざわざお召物めしものの下へよろいをお着こみになりました。そして弓矢ゆみやを取つておうまを召めすなり、大急ぎで王みこのあとを追つてお出かけになりました。

皇子はまもなく王に追いついて、お二人でうまを並ならべてお進みになりました。そのうちに皇子はすきまをねらつて、さつと矢をおつがえになり、罪もない忍齒王おしはのみこを、だしぬけに射落いとしておしまいになりました。そして、なお飽あき足たらずに、そのおからだをずたずたに切り刻きざんで、それをうまの飼葉かいばを入れるおけの中へ投げ入れて、土の中へ埋うめておしまいになりました。

四

忍齒王おしはのみこには意富祁王おおけのみこ、袁祁王おけのみこというお二人のお子さまがいらつ

しやいました。

お二人はお父上がお殺されになつたとお聞きになりました、それでは自分たちも、うかうかしてはいられないとおぼしめして、急いで大和をお逃げになりました。

そのお途中でお二人が、山城の荊羽井やましろうかりはいというところでおべんとうをめしあがつておりますと、そこへ、ちよう役あがりの印えきしるしに、顔へ入墨かおいれずみをされている、一人の老人ろうじんが出て来て、お二人が食べかけていらつしやるおべんとうを奪うばい取りました。お二人は、

「そんなものは惜おしくもないけれど、いったいおまえは何者だ」とおたしなめになりました。

「おれは山城やましろうでお上かみのししを飼かっているしし飼かいだ」とその悪者わるものの老人は言いました。

お二人は、それから河内^{かわち}の玖須婆川^{くすばがわ}という川をお渡り^{わた}になり、
とうとう播磨^{はりま}まで逃げのびていらつしやいました。そして固く
ご身分をかくして、志^し自^じ牟^むという者のうちへ下男におやとわれ
になり、いやしいうし飼、うま飼^{しごと}の仕事をして、お命をつない
でいらつしやいました。

とんぼのお歌

一

おおはつせのおうじ
大長谷皇子は、まもなく雄略天皇としてご即位になり、大和

あさくらのみや

うつ

の朝倉宮にお移りになりました。皇后には、例の大日下王のお

わかくさかのみこ

妹さまの若日下王をお立てになりました。

わかくさかのみこ

その若日下王が、まだ河内の日下というところにいらした

やまと

ときに、ある日天皇は、大和からお近道をおとりになり、日下

ただぐえ

とうげ

の直越という峠をお越えになつて、王のところへおいでになつ

みこ

たことがあります。

そのとき天皇は、山の上から四方の村々をお見わたしになりますと、向こうの方に、一軒^{けん}、むねにかつお木をとりつけているうちがありました。かつお木というのは、天皇のお宮か、神さまのお社^{やしろ}かでなければつけないはずの、かつおのような形をした、むねの飾^{かざ}りです。

天皇はそれをご覧^{らん}になつて、

「あの家はだれの家か」とおたずねになりました。

「あれは志幾^{しき}の大^{おお}泉主^{あがたぬし}のうちでございます」と、お供の者がお

答え申しました。天皇は、

「無礼なやつめ。おのれが家をわしのお宮に似^にせて作っている」

とお怒^{いか}りになり、

「行つてあの家を焼きはらつて来い」とおっしゃつて、すぐに人をおつかわしになりました。

すると大県主はすつかりおそれいつてしまいました。
おおあがたぬし

「実は、おろかな私どものことでございますので、ついなんにも存じませんで、うつかりこしらえましたものでございます」と言つて、縮みあがつてお申しわけをしました。そして、そのおわびの印に、一ぴきの白いぬにぬのを着せ、鈴すずの飾かざりをつけて、それを身内みうちの者の一人の、腰佩こしはきという者に綱つなで引かせて、天皇に献上けんじょういたしました。

それで天皇も、そのうちをお焼きはらいになることだけは許しておやりになり、そのまま若日下王わかくさのみこのおうちへお着きになりました。

天皇はお供ともの者をもつて、

「これはただいま途中で手に入れたいぬだ。珍しいものだから進物しんもつにする」とおつしやつて、さつきの白いぬを若日下王わかくさのみこにお

くだしになりました。しかし王は、

「きよう天皇は、お日さまをお背中^{せなか}になすつておこしになりました。これではお日さまに対しておそれおおうございますので、きようはお目にかかりません。そのうち、私のほうからすぐにまかり出まして、お宮へお仕え申しあげます」

こう言つて、おことわりをなさいました。

天皇はお帰りのお途中、山の上にお立ちになつて、若日下王^{わかくさかのみこ}のことをお慕^{した}いになるお歌をおよみになり、それを王^{みこ}へお送りになりました。王^{みこ}はそれからまもなくお宮へおあがりになりました。

天皇はあるとき、大和やまとの美和川みわがわのほとりへお出ましになりました。そうすると、一人の娘むすめが、その川で着物を洗っておりました。それはほんとうに美しい、かわいらしい娘でした。天皇は、

「そちはだれの子か」とおたずねになりました。

わたくし ひけたべ
「私は引田郎の赤猪子あかいのこと申します者でございます」と娘はお答え申しました。天皇は、

「それでは、いずれわしのお宮へ召めし使つてやるから待っていてよ」とおっしゃって、そのままお通りすぎになりました。

あかいのこ
赤猪子あかいのこはたいそう喜んで、それなりお嫁よめにも行かないで、一心ほうこうにご奉公を待っておりました。しかし宮中きゆううちゆうからは、何十年たつても、とうとうお召めしがありませんでした。そのうちに、もうひどいおばあさんになつてしまいました。赤猪子あかいのこは、

「これではいよいよお宮へご奉公にあがることはできなくなつた。しかしこんなになるまで、いつしうけんめいにおめしを待っていたことだけは、いちおう申しあげて来たい」こう思つて、ある日、いろいろの鳥やお魚さかなや野菜ものをおみやげに持つて、お宮へおうかがいいました。すると天皇は、

「そちはなんという老婆ろうばだ。どういうことでまいつたのか」とおたずねになりました。赤猪子あかいのこは、

「私は、いついつの年のこれこれの月に、これこれこういうおせをこうむりましたものでございます。こんにちまでお召めしをお待ち申してとうとう何十年という年を過すしました。もはやこんな老婆ろうばになりましたので、もとよりご奉公ほうこうには堪たえられません、ただ私がどこまでもおおせを守まもつておりましたことだけを申しあげたいと存じましてわざわざおうかがいいたしま

した」と申しあげました。天皇てんのうはそれをお聞きになつて、びつくりなさいました。

「私わしはそのことは、もうとつくに忘れてしまつていた。これはこれはすまないことをした。かわいそうに」とおっしゃつて、二つのお歌をお歌いになり、それでもつて、赤猪子あかいのこのどこまでも正直しょうじきな心根こころねをおほめになり、ご自分のために、とうとう一生お嫁よめにも行かないで過あやごしたことをしみじみおあわれみになりました。赤猪子あかいのこは、そのお歌を聞いて、たまりかねて泣きだしました。その涙で、赤色なみだにすりそめた着物の袖そでがじとじとにぬれました。そして泣き泣き歌つて、

「ああああ、これから先はだれにすがつて生きて行こう。若い女の人たちは、ちょうど日下くさかの入江いりえのはすの花のように輝かがやき誇ほこっている。私もわたしそのとおりの若さでいたら、すぐにもお宮で召めし

使つていただけようものを」と、こういう意味をお答え申しあげました。

天皇はかずかずのお品物をおくだしになり、そのままおうちへおかえしになりました。

三

またあるとき天皇は、大和やまとの阿岐豆野あきつという野へりようご獵りようにおいてになりました。そして獵場りようばでおいすにおかけになつておりますと、一ぴきのあぶが飛とんで来て、お腕うでにくいつきました。すると一ぴきのとんぼが出て来て、たちまちそのあぶを食くい殺ころして飛とんで行きました。

天皇はこれをご覧らんになつて、たいそうお喜びになり、

「なるほどこんなふうには天皇のことを思う虫だから、それでの日本のことをあきつ島というのであろう」という意味をお歌に歌っておほめになりました。とんぼのことを昔の言葉ではあきつと呼んでおりました。

そのつぎにはまた別のときに、大和の葛城山へお上りになりました。そうすると、ふいに大きな大いのししが飛び出して来ましたがえず、ぴゅうとお射あてになりました。すると、ししはおそろしく怒り狂って、ううううとうなりながら飛びかかって来ました。それには、さすがの天皇もこわくおなりになって、おそばに立っていたはんのきへ、大急ぎでお逃げのぼりになり、それでもつて、やつと危いとところをお助かりになりました。

天皇はそのはんのきの上で、

「ああ、この木のおかげで命びろいをした。ありがたいありがたい」とおっしゃる意味を、お歌にお歌いになりました。

四

天皇はその後、また葛城山かつらぎやまにおのぼりになりました。そのときお供の人々は、みんな、赤いひものついた、青ずりのしょうぞくをいただいて着ておりました。

すると、向こうの山を、一人のりっぱな人がのぼって行くのがお目にとまりました。その人のお供の者たちも、やはりみんな、赤いものついた、青ずりの着物を着ていまして、だれが見ても天皇のお行列と寸分すんぶんも違ちがいませんでした。

天皇はおどろいて、すぐに人をおつかわしになり、

「日本にはわしを除いて二人と天皇はいないはずだ。それなのに、わしと同じお供を従えて行くそちは、いったい何者だ」と、きびしくお問いつめになりました。すると向こうからも、そのおたずねと同じようなことを問いかえしました。

天皇はくわツとお怒りいかになり、まづ先に矢をぬいておつがえになりました。お供の者も残らず一度に矢をつがえました。そうすると、向こうでも負けていないで、みんなそろって矢をつがえました。天皇は、

「さあ、それでは名を名乗れ。お互いたがに名乗り合つたうえで矢を放とう」とお言い送りになりました。向こうからは、

「それではこちらの名まえもあかそう。私は悪いことにもただ一言、いいことにも一言だけお告げをくだす、葛城山かつらぎやまの一言主神ひとことぬしのかみだ」とお答えがありました。天皇はそれをお聞きになると、びつ

くりなすつて、

「これはこれはおそれおおい、大神おおかみがご神体をお現わしになつたとは思ひもかけなかつた」とおつしやつて、大急ぎで太刀たちやゆみや弓矢をはじめ、お供ともの者一同の青ずりの着物をもすつかりおぬがせになり、それをみんな、伏ふし拝おがんで、大神おおかみへご献上けんじようになりました。

すると大神おおかみは手を打つてお喜びになり、その献上物けんじようものをすつかりお受けいれになりました。それから天皇がご還幸かんこうになるときには、大神おおかみはわざわざ山をおりて、遠く長谷はつせの山の口までお見送りになりました。

天皇はつぎにはまたあるとき、その長谷はつせにあるももえつきと
いう大きな、大けやきの木の下でお酒宴さかもりをお催もよおしになりました。
そのとき伊勢いせの生まれの三重采女みえのうねめという女官じよかんが、天皇におさ
かずきを捧ささげて、お酒をおつぎ申しました。すると、あいにく、
けやきの葉が一つ、そのさかずきの中へ落ちこみました。采女うねめ
はそれとも気がつかないで、なおどんどんおつぎ申しました。
天皇はふと、その木の葉をご覧らんになりますと、たちまちむツと
お怒いかりになって、いきなり采女うねめをつかみ伏ふせておしまいになり、
お刀をおぬきになって、首を切ろうとなさいました。采女うねめは、
「あッ」と怖おそれちぢかんで、
「どうぞ命いのちだけはお許しくださいます。申しあげたいことがご
ざいます」と言いながら、つぎのような意味の、長い歌を歌い
ました。

「このお宮は、朝日も夕日もよくさし入る、はればれとしたよいお宮である。堅い^{かた}地伏^{ぢふく}の上に立てられた、がっしりした大きなお宮である。お宮のそこには大きなけやきの木がそびえたっている。その大木^{たいぼく}の上の枝^{えだ}は天をおおっている。中ほどの枝は東の国においかぶさり、下の枝はそのあとの地方をすっきりとおっている。上の枝のこずえの葉は、落ちて中の枝にかかり、中の枝の落ちた葉は下の枝にふりかかる。下の枝の葉は采女^{うねめ}が捧^{ささ}げたおさかずきの中へ落ち浮^うかんだ。

それを見ると、大昔^{おおむかし}、天地がはじめてできたときに、この世界が浮き油のように浮かんでいたときのありさまが思い出される。また、神さまが、大海^{たいかい}のまん中へこの日本の島を作りお浮かべになった、そのときのありさまにもよく似^にている。ほんとは尊^{とうと}くもめでたいことである。これはきつと、後の世までも話

し伝えるに相違ない」
そうい

采女はこう言つて、昔からの言い伝えを引いておもしろく歌
うねめ

いあげました。天皇はこの歌に免じて、采女の罪を許しておや
うねめ
りになりました。すると皇后もたいそうお喜びになつて、

「この大和の高市郡の高いところに、大きく茂つた広葉のつば
やまと たかいちのり しげ ひろは

きが咲いている。今、天皇は、そのつばきの葉と同じように、大
さ

きなお寛い、そして、その花と同じように美しくおやさしいお
ひろ

心で、采女をお許しくだすつた。さあ、この貴い天皇にお酒を
うねめ とうと

おつぎ申しあげよ。このありがたいお情けは、みんなが後の世

まで永く語り伝えるであらう」と、こういう意味のお歌をお歌
なが

いになりました。

それについて天皇も楽しくお歌をお歌いになり、みんなでに

ぎやかに酒盛をなさいました。

采女^{うねめ}は罪を許されたばかりでなく、そのうえに、さまざまのおくだし物をいただいて、大喜びに喜びました。

天皇はしまいに、おん年百二十四歳でおかぐれになりました。

うし飼^{かい}、うま飼^{かい}

一

雄略天皇のおあとには、お子さまの清寧天皇^{せいねいてんのう}がお立ちになりました。天皇はしまいまで皇后をお迎えにならず、お子さまもお一人もいらつしやいませんでした。

ですから天皇がおかれになると、おあとをお継ぎ^{つぎ}になる方がいらつしやらないので、みんなはたいそう当惑^{とうわく}して、これまでのどの天皇かのお血筋^{ちすじ}の方をいつしようにけんめいにお探^{さが}し申しました。すると、さきに大長谷皇子^{おおはつせのおうじ}にお殺されになった、

忍おし齒はのみこ王のお妹さまで忍海郎女おしぬみのいらつめ、またのお名まえを飯豊王いいとよのみことおつしやる方が、大和やまとの葛城かつらぎの角刺宮つのさしのみやというお宮においでになりました。それで、このお方にともかく一時じまつりごと政をおとりになつていただきました。みんなは、例の忍齒王おしはのみこのお子さまの意富祁おおけ、
袁祁おけのお二人が、播磨はりまの国でうし飼かい、うま飼かいになつて、生きながらえておいでになるといふことはちつとも知らないでいました。

その後まもなく、その播磨はりまの国へ、山部連小楯やまべのむらじおだてという人くにのみやつこが国造くわくぞうになつて行きました。するとその地方の志自牟しじむという者が新築しんちくしたおうちでお酒盛さかもりをしました。そのとき小楯おだてをはじめ、よばれた人たちも、お酒がまわるにつれて、みんなで代わる代わる立まいつて舞を舞いました。しまいにはかまどのそばで火をたいいていたきようだい二人の火たきの子供にも舞えと言いました。

すると弟のほうの子は、兄の子に向かつて、おまえさきにお舞いと言いました。兄は弟に向かつて、おまえから舞えと言いました。みんなは、そんないやしい小やつこどもが、人なみに、もつともらしくゆずり合うのをおもしろがつて、やんやと笑わらいました。

そのうちに、とうとう兄のほうがさきに舞いました。弟はそのあとに舞い出そうとするときに、まず大声でつぎのような歌を歌って自分たちきょうだいの身の上をうちあけました。

「男らしい大きな男が、太刀たちのつかに赤い飾かざりをつけ、太刀のおには赤いきれをつけて、いかにも人目を引く姿すがたをしていても、深くおい茂しげったたけやぶの後ろにはいれば、隠かくれて目にも見えない」と、こう歌いだして、たけやぶという言葉ことばを引き出した後、

「そんなたけやぶの大きなたけを割つて、それを並べてこしらえた、八絃琴は、それはそれは調子がよく整つて申し分がない。はちげんきん 今から五代前の履仲天皇は、ちようどその琴のしらべと同じように、どこまでもりっぱに天下をお治めになったお方である。だいまえ りちゆうてんのう その皇子に忍齒王とおつしやる方がいらした。みんなの人々よ、われわれ二人は、その忍齒王の子であるぞ」と歌いました。おうじ おしはのみこ

小楯はそれを聞くとびっくりして、床ゆかからころがり落ちてしまいましたが。そして大あわてにあわてて、さつそくみんなを残らず追い出したうえ、意外なところでお見出し申した、意富祁おおけ、袁祁おけのお二人を左右のおひぎにお抱えかか申しながら、お二人の今日までのご辛苦しんくをお察し申しあげて、ほろほろと涙なみだを流して泣きました。

おだて 小楯はそれから急いでみんなを集めて、仮のお宮をつくり、

お二人をその中にお移し申しました。そして、すぐに大和へ早
うまの使いを立てて、おんおば上の飯豊王にいいとよのみこご注進ちゆうしん申しあげま
した。飯豊王はそれをお聞きになると、大喜びにお喜びになり、
すぐにお二人をお呼びよのぼせになりました。

二

お二人は、角刺つのさしのお宮でだんだんにご成人せいじんになりました。

あるとき袁祁王おけのみこは、歌がきといつて、男や女がおおぜいいつ

しよに集まつて、歌を歌いかわす催もよおしへおでかけになりました。

そのとき菟田首うたのおびとという人の娘で、王みこがかねがねお嫁よめにもらお

うと思つておいでになる、大魚おうおという美しい女の人も来あわせ
ておりました。するとそのころ、臣下の中でおそろしく幅はばをき

かせていた志毘臣しびのおみというものが、その大魚おうおの手を取りながら、
 袁祁王おけのみこにあてつけて、

「ああ、おかしやおかしや、お宮の屋根がゆがんでしまった」と
 歌いだし、そのあとの歌のむすびを王みこにさし向けました。王みこは、
 すぐにそれをお受けになつて、

「それは大工だいくがへただだからゆがんだのだ」とお歌いになりました。
 た。すると志毘しびは重かさねて、

「いや、どんなに王みこがあせられても、わしがゆいめぐらした、
 八重やえのしばがきの中へははいれまい。大魚おうおとわしとの仲なかをじゃ
 ますることはできまい」と歌いかけました。王みこはすかさず、

「潮しおの流れの上の、波あの荒いところにしびが泳いでいる。しび
 のそばにはしびの妻がついている。ばかなしびよ」とお歌いにな
 りました。

そうすると志毘しびはむつと怒おこつて、

「王みこのゆつたしばがきなぞは、いかに堅固けんごにゆいまわしてあろうとも、おれがたちまち切り破やぶつて見せる。焼やき払はらつて見せてやる」と歌いました。王みこはどこまでも負けないで、

「あはは、しびよ。そちは魚さかなだ。いかにいばつても、そちを突つきに来る海人あまにはかなうまい。そんなにこわいものがいては悲かなしかろう」とお歌いになりました。

王みこは、そんなにして、とうとう夜があけるまで歌い争まがつてお

ひきあげになりました。そして、お宮へお歸りになるとすぐに、

お兄上の意富祁王おおけのみことご相談なさいました。志毘しびはひとりでつけ

あがつて、われわれをもまるで踏ふみつけている。われわれのお

宮に仕えている者も、朝はお宮へ来るけれど、それからさきは昼じゆう志毘しびの家に集まつてこびいつている。あんなやつは後々

のために早く討ち亡^うしてしまわなければいけない。志毘^{しび}は今ごろは疲^{つか}れて寝入^{ねい}っているにちがいない。門には番人もいまい、襲^{おそ}うのは今だとお二人でご決心になりました。そしてすぐに軍勢を集めて志毘^{しび}の家をお取り囲みになり、目あての志毘^{しび}を難なく切り殺しておしまになりました。

三

お二人はもはや、お年の上でも十分おひとり立ちで天下をお治めになることがおできになるので、順序^{しゅんじょ}からいつて、お兄上の意^{おおけのみこ}富祁王^{みこ}が、まず第一にご即位^{そくい}になるのがほんとうでした。しかし、命^{みこと}は弟さまに向かつて、

「二人が志自牟^{しじむ}のうちにいたときに、もしそなたが名まえを名

乗らなかつたら、二人ともあのままあそこに埋^{うず}もれていなければならなかつたはずであつた。お互^{たが}いにこんなになつたのもみんなそなたのお手柄^{てがら}である。それで、私は兄に生まれてはいるけれど、どうかそなたからさきに天下を治めておくれ」とおつしやいました。袁祁王はそのことだけはどこまでもご辞退^{じたい}になりましたが、お兄上がどうしてもお聞きいれにならないので、とうとうしかたなしに、第一にお位におつきになりました。後に^{けんそうてんのう}顕宗天皇と申しあげるのがすなわちこの天皇でいらつしやいます。

天皇はそれといつしよに大和^{やまと}の近飛鳥宮^{ちかあすかのみや}へお移りになり、石木王^{いしきのみこ}という方のお子さまの難波王^{なにわのみこ}とおつしやる方を、皇后にお迎えになりました。

天皇は、お父上の忍齒王^{おしはのみこ}のご遺骨^{いこつ}をおさがし申そうとおぼし

めして、いろいろ、ご苦心をなさいました。すると、近江おうみから一人の卑いやしい老婆ろうばがのぼつて来て、

「王みこのお骨こつをお埋め申したところは私がちゃんと存じております。おそれながら、王みこには、ゆりの根のようにお重かさなりになつたお歯はがおりになりました。そのお歯はをご覧らんになりませば、王みこのお骨こつということはすぐにお見分けがつきます」と申しあげました。天皇はさつそく近江おうみの蚊屋野かやのへおくだりになつて、土地の人民におおせつけになつて、老婆ろうばの指す場所をお掘ほらせになり、たしかにお父上のご遺骨をお見出しになりました。それで蚊屋野かやのの東の山にみささぎを作つてお葬ほうむりになり、さきに、お父上たちに獵をおすすめ申しあげた、あの韓袋からぶくろの子孫をお墓守はかもりにご任命になりました。

天皇はそれからご還御かんぎよの後、さきの老婆ろうばをおめしのぼせにな

りまして、

「そちは大事な場所をよく見届けておいでくれた」とおほめに

おきめのおみな

なり、置目老嫗という名をおくだしになりました。そして、と

きゆうちゆう

うぶんそのまま宮中へおとどめになつて、おてあつくおもてな

しになつた後、改めてお宮の近くの村へお住ませになり、毎日

一度はかならずおそばへめして、やさしくお言葉ことばをかけておや

りになりました。天皇はそのためにわざわざお宮の戸のところ

すず

へ大きな鈴をおかけになり、置目おきめをおめしになるときは、その

鈴をお鳴らしになりました。

おきめ

後には置目は、

「私もたいそう年をとりましたので、生まれた村へ帰りたくありませんでした」と申しあげました。

おきめ

天皇は置目のおねがいをお許しになり、それではもうあすか

らそなたを見ることもできないのかとおつしやる意味の、お別れの歌をお歌いになりながら、わざわざ見送りまでしておやりになりました。

つぎに天皇は、昔^{むかし}お兄上とお二人で大和^{やまと}からお逃^にげになる途中で、おべんとうを奪^{うば}い取った、あのしし飼^{かい}の老人をおさがし出しになって大和^{やまと}の飛鳥川^{あすかがわ}の川原^{かわら}で死刑^{しけい}にお行ないになりました。その悪者の老人は志米須^{しめす}というところに住んでおりました。天皇はなおその上の刑罰^{けいばつ}として、その老人の一族の者たちのひざの筋^{すじ}を断^たち切らせておしまいになりました。これらの者たちは、その後大和^{やまと}へのぼるのに、いつもびつこを引いて出て来ました。

天皇は、お父上をお殺しになつた雄略天皇を、深くお恨みに
なりまして、せめてそのみ霊たまに向かつて復しゆうをしようとい
うおぼしめしから、人をやって、河内かわちの多治比たじひというところ
にある、天皇のみささぎをこわさせようとなさいました。

するとお兄上の意富祁王おおけのみこが、

「天皇のみささぎをこわすためなら、ほかのものをやってはい
けません。私わたしが自分で行つておぼしめしどおりこわして来ます」
とご奏上そうじょうになりました。天皇は、

「それではあなたがおいでになるがよい」とお許しになりました。
意富祁王おおけのみこは急いでお出かけになりました。そしてまもなく
お帰りになつて、

「ちゃんとこわしてまいりました」とおつしやいました。

しかし、そのお帰りがあんまりお早いので、天皇は変だとおぼしめし、

「いつたいどんなふうにおこわしになったのです」とおたずねになりました。するとお兄上は、

「実はみささぎの土を少しだけ掘りかえしてまいりました」とお答えになりました。天皇は、それをお聞きになつて、

「それはまたどういうわけでしょう。お父上の復しゅうをするのに、土を少し掘つて帰られただけでは飽きたりないではありませんか。なぜみささぎをすっかりこわして来てくださらないのです」とおつしやいました。お兄上は、

「そのおおせはいちおうごもつともです。しかし、相手の方はいくら父上のかたきとはいえ、一方ではわれわれのおじであり、またわれわれの天皇の一人でいらつしやるお方です。私たち

がただ父上のかたきということだけ考えて天皇ともある方のみ
ささぎをこわしたとなりますと、後の世の人から必ずそしりを
受けます。ただかたきはどこまでも報いねばならないので、そ
の印に土を少し掘ほつて来たのです。このくらいの恥はじを与えたの
ならば、後世こうせいだれにもはばかりことはありますまいから」

こう言つて、そのわけをお話しになりました。すると天皇も、
「なるほどそれは道理である。あなたのなさつたとおりでよろ
しい」とおつしやつてご満足になりました。

天皇は八年の間天下をお治めになつた後、おん年三十八歳で
おかくれになりました。天皇はお子さまが一人もおありになり
ませんでした。それでおあとにはお兄上の意富祁王おおけのみこが仁賢天皇
としてご即位そくいになりました。

天皇は大和やまとの石上いそのかみの広高宮ひろたかのみやへお移りになり、皇后には雄略天皇ゆうりやくてんのう

のお子さまの春日大郎女とおつしやる方をお立てになりました。
天皇のおつきには、皇子小長谷若雀命が武烈天皇としてお
位におつきになりました。そのおあとには、継体、安閑、宣化、
欽明、敏達、用明、崇峻、推古の諸天皇がつぎつぎにお位にお
のぼりになりました。

※校正者註：底本の間違いと思われる箇所のうち、読解に支障
がありそうな部分を修正しました。その際、「古事記」（倉野憲
司校注、岩波文庫、1988年1月14日第36刷）および J-text
(<http://www.j-text.com/>) の電子テキスト版「古事記物語」を
参照しました。

ページ数・行数「底本」→「修正」

10-11' 10-12' 21-17' 22-1「かづら」→「かづら」

17-6「とおつしやいました」→「とおつしやいました。」

18-13「お互^{たがい}い」→「お互^{たが}い」

20-13「おき」→「梭^ひ」

21-12「鉄床^{てつどし}」→「鉄床^{かなどし}」

31-2「須加^{すか}」→「須加^{すが}」

33-14「一別」→「一列」

34-6「うさぎはおんおん」→「うさぎはまたおんおん」

38-1「お引き出し」→「お引き出し」

42-2「お父上の大神の」→「お父上の大神も」

51-12「おりて来ました。」→「おりて来ました。」

53-8「屋羽張神」→「尾羽張神」

64-14 「なつて」 ↓ 「なつて」

68-1 「出てまいりました。」 ↓ 「出てまいりまして、」

80-4 「速吸門」はやすいかにど ↓ 「速吸門」はやすいのと

80-9 「そちはそのへんの」 ↓ 「そちはこのへんの」

85-6 「申します、」 ↓ 「申します。」

87-1 「忍坂」おびさか ↓ 「忍坂」おびさか

93-3' 100-3 「崇神天皇」すいじんてんのう ↓ 「崇神天皇」すいじんてんのう

98-14 「陣取りました、」 ↓ 「陣取りました。」

100-10 「どうぞ、この刀で」 ↓ 「どうぞこの刀で、」

105-4 「弟媛」おとめ ↓ 「弟媛」おとめ

109-4 「本牟智別王」はむちわけのみこ ↓ 「本牟智別王」はむちわけのみこ

113-8 「別稻置」わけいなぎ ↓ 「別、稻置」わけ いなぎ

118-12 「切りほうつて」 ↓ 「切り屠つて」ほふ

119-3 「あかひのき」↓「いちい」

123-4 「小野^{おぬ}」↓「小野^{おの}」

125-14 「のぼつて」↓「のぼつて」

131-14 「七拳脛^{なかつかはぎ}」↓「七拳脛^{ななつかはぎ}」

136-3 「山の神、海の神、海と河との神々」↓「山の神、海と河
との神々」

137-6 「無久」↓「無窮」

137-8 「さつそく」↓「さつそく」

139-9 「つれて」↓「奉じて」

141-2 「切らせて^き」↓「切らせて^き」

141-11 「どんどんと」↓「どんどんと」

152-8 「なりまがら」↓「なりながら」

153-7 「天皇のおおせの」↓「天皇はおおせの」

160-2 「さなかつら」 ↓ 「さなかずら」

163-3 「大雀命」おおささぎのみこと ↓ 「大雀命」おおささぎのみこと

167-2 「夫役」ふえき ↓ 「夫役」ふやく

169-10 「大渡」ねおわたり ↓ 「大渡」おおわたり

176-15 「高安山」むかやすやま ↓ 「高安山」たかやすやま

177-2 「枯野」からぬ ↓ 「枯野」からの

191-5 「白日子王」しらひこのみこ ↓ 「白日子王」しろひこのみこ

197-4 「縮み」ちぢ ↓ 「縮み」ちぢ

201-7 「二人の天皇」 ↓ 「二人と天皇」

210-5 「私に兄に」 ↓ 「私は兄に」おおけのみこ

210-6 「袁祁王」おおけのみこ ↓ 「袁祁王」おおけのみこ

213-4 「一方は」 ↓ 「一方では」

213-15 「雄略天皇」ゆうりやくてんのう ↓ 「雄略天皇」ゆうりやくてんのう

後註

一

「
つ
つ
に
傍
点
」

底本：「古事記物語」角川文庫、角川書店

1955（昭和 30）年 1 月 20 日初版発行

1968（昭和 43）年 8 月 10 日 31 版発行

1980（昭和 55）年 9 月 30 日改版 19 刷

※校正には 1989（平成元）年 10 月 30 日改版 31 刷を使用しました。

入力：jupiter

校正：鈴木厚司

2001 年 11 月 19 日公開

2003 年 6 月 15 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。